

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

平成 29 年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

平成 30 年 6 月 29 日



## はじめに

平成29年度の外部評価書をお届けします。国立国語研究所は昭和23年に現代日本語の総合的研究を行う唯一の機関として創設以来、今年度で創立70周年を迎えます。2009年10月に大学共同利用機関法人人間文化研究機構に移管され、内外の大学、研究機関との協力しながら一般言語学的な見地から日本語研究、日本語教育研究を行ってきても来年度で10年になります。国語研はこの間日本語の科学的研究に資すべく、日本語研究の新たな方法論を開発し、社会言語学、方言地理学、言語生活の定点観測、話し言葉コーパスに基づく日本語文法研究など、世界の最先端の研究をリードしてきたといえるかと思います。また、人間文化機構移管以降は最新の理論言語学の成果を取り入れ、対照研究も視野に入れて、日本語をさまざまな外国語と比較することで、日本語の特徴をあぶりだす研究を多く行っています。

平成29年度は第3期2年目を迎えて、機関拠点型の基幹研究「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」というこれまで国語研が蓄積したさまざまな言語資源に加え、現代語以外の時代別のコーパス、方言コーパス、日本語非母語話者のコーパス、方言コーパス、日常会話コーパスを作成しています。さらには、これらの言語資源を横断的に検索できるようなシステムを開発しています。国語研ではこれらの言語資源を活用した研究方法を数多く提言しており、日本語の理論的・実証的研究を飛躍的に向上させ、一般言語学理論に貢献し、かつ実用的な応用も大きく前進させてきています。

ディープラーニング技術が開発され、空前のAIのブームを迎えている現在、国語研が提供するさまざまな大規模日本語データはますますその重要性を増しつつあります。しかし、それと同時にさまざまな基礎的な言語現象を記録し、その原理を解明していく作業を並行して行って初めて現象の理解が進み、本当の意味の進歩が望めると思います。国語研では最新の言語解析技術や大規模データ蓄積技術を開発していくと同時に、言語学研究の基礎、言語構造・言語使用の原理の追求をしていくために研究を行っています。29年度の研究成果もそのような国語研の研究の方向性を外部評価委員会の先生方に精査していただき、評価していただきました。

ここで、門倉委員長をはじめとする外部評価委員会の委員の皆さまの労を多としたいと思います。さまざまな事情で評価のための資料の作成が遅くなり、評価書作成のための時間が限られてしまっていたなか、正当な評価をするために最大限の努力を傾けて、フェアな評価をしてくださったこと、また、時には厳しくも建設的な提言をしてくださったことに関して、いくら感謝しても感謝したりない気持ちです。

所員一同この評価と提言にこたえるべく誠心誠意、国語研のより一層の発展のために努力を重ねていきたいと存じます。

平成 30 年 6 月

国立国語研究所長

田窪 行則



## 目 次

|  |    |
|--|----|
| 1. 評価結果報告書                                     | 1  |
| 1. 平成 29 年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」に関する評価結果 | 2  |
| 2. 平成 29 年度「管理業務」に関する評価結果                      | 85 |
| 2. 資料  | 92 |
| 1. 国立国語研究所外部評価委員名簿                             | 93 |
| 2. 国立国語研究所平成 29 年度業務の実績に関する評価の実施について           | 94 |
| 3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧                           | 95 |
| 4. 国立国語研究所外部評価委員会規程                            | 96 |
| 5. 国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 1 回)         | 98 |
| 国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 2 回)            | 99 |

# 1. 評価結果報告書

平成 29 年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

平成 30 年 3 月 6 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 1 回)

平成 30 年 6 月 29 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 2 回)

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会  
委員長 門倉 正美

## 国立国語研究所平成29年度外部評価にあたって

本報告書は、外部評価委員会において、平成29年度における機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の総合評価と、各共同研究プロジェクトへの評価、コーパス開発センター、研究情報発信センターへの評価、「組織・運営」「管理業務」への評価を行った結果をまとめたものである。

平成29年度の基幹研究プロジェクトへの評価結果は「A：計画を上回って実施している」である。本評価委員会における「A」評価は、単に量的に「計画を上回って実施した」だけでなく、達成された成果が質的に高いことを意味している。6つの共同プロジェクト評価の内3つが「A」評価をつけているところに表れているように、平成29年度は基幹研究内の多数の研究が収穫期を迎えた観があり、研究成果が量的にも質的にもきわめて優れていたことを高く評価する。また、社会貢献や国際発信、および言語資源の充実においても着実に有意義な成果を蓄積している点も評価に値する。

今後は、基幹研究のタイトルに掲げられた「総合的日本語研究」の「総合性」の内実を具体的に明らかにしていく努力が求められる。また、「総合的日本語研究」がどのような教育形態をとるのかについては、期待をもって見届けたい。

当研究所が大学共同利用機関であるという点からは、充実した言語資源（各種コーパスやデータベース）を活用するための方法やスキルをより広範に、より効率的に普及する必要がある。また、国立の研究所であるという点からは、ホームページをさらに見やすく使い勝手のよい、魅力的なレイアウトと構成にして、広く国民に成果をアピールするとともに、その関心に応えるようにする必要がある。これらの点での一層の努力を期待したい。

なお、当研究所が所属する人間文化研究機構内の事柄ではあるが、基幹研究プロジェクトの総合評価の評点に関して、一言付記しておきたい。機構に本年3月に提出した基幹研究プロジェクト評価においては、「総合評価」の評価結果（評点）の記入は求められていなかった。しかし、機構の外部評価委員会では、機構内の各基幹研究に対して「S, A, B, C」の4段階の評価がなされている。とするなら、平成30年度以降の基幹研究プロジェクト評価では、「S, A, B, C」の4段階評価を当外部評価委員会にも求めるべきであろう。その際、当然、「S, A, B, C」の4段階評価の評価基準もともに示されるべきである。

平成30年6月  
外部評価委員会  
委員長 門倉 正美

## 機関拠点型基幹研究プロジェクト総合評価

### 平成29年度の評価

#### 《評価結果》

計画を上回って実施している

#### 1. 平成29年度の点検・評価に関する総括

今年度は、多数の研究が収穫期を迎えた観があり、研究成果の書籍・報告書・シンポジウム等での公開が量的にも、質的にもきわめて豊かであったことを高く評価する。特に、「対照言語学」の研究所スタッフが、以前からの Handbooks of Japanese Language and Linguistics のシリーズを2冊刊行したのに加えて、さらに3冊の英文論文集を権威ある出版社から刊行し、その内の窪菌（編）の促音に関する英文論文集が専門誌の書評で高い評価を得ている点は、本研究所の研究水準の高さを表す一例として評価できる。

「危機言語・方言」が当初の計画を大幅に上回る40地点で危機言語・方言の現地調査・資料収集を実施し着実にデータベースを充実させているのをはじめとして、「統語コーパス」、「通時コーパス」、「日常会話コーパス」、「学習者コーパス」も順調にコーパス構築を進展させている。

また、すべての基幹研究プロジェクト班が国際学会や国際シンポジウムの企画・運営を行い、国際学会のパネルセッション、シンポジウム、ワークショップを開催したことは、上述の英文論文集の刊行とともに、国際的発信を一層進めたものとして評価に値する。

「危機言語・方言」は「危機言語・方言サミット」が創設されて以来、地方自治体などと連携して支援してきたのに加えて、今年度は宮崎県椎葉村と交流協定を結んで、方言保全を通じた地域創生のモデル事業をめざしている。こうした点は、重要な社会連携・社会貢献として高く評価する。

本基幹研究プロジェクトの「基本計画」では、中期計画の3年目、5年目に「言語資源と言語分析（仮称）」と題された基幹研究の合同研究成果発表会を行うことになっている。大規模コーパスという言語資源をいかに有機的に言語分析と結びつけることができるかが、本基幹研究のテーマである「総合的日本語研究」の「総合性」の実質の豊かさを表す中心的な課題となるだろう。

この点を踏まえて、各基幹研究プロジェクト班の間の連携・協働をいっそう進めるとともに、「総合的日本語研究」がめざす「総合性」の性質について実践的に考察するワーキンググループが組織されることを期待したい。

#### 2. 平成29年度のプロジェクト全体の連携活動に関する点検・評価

##### (1) 研究成果について

今年度は研究成果の書籍・報告書・シンポジウム等での公開が活発になされた。特に、「対照言語学」で研究所スタッフが国内外の出版社から10冊の書籍を刊行し、研究所全体で国内シンポジウム16件、国際シンポジウム・ワークショップを10件、企画・開催した点を高く評価する。危機言語・方言の現地調査・資料収集が当初の計画を大幅に上回る40地点で実施された点も評価できる。

権威ある出版社から刊行された5冊の英文論文集や、各分野で重要な課題をとりあげた国際シンポジウムは、日本語研究の国際発信力を高めるものと言えよう。

また、「通時コーパス」「統語コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」のデータ整備・蓄積も順調に進んでおり、それらのコーパスを活用する今後の研究の進展が期待される。そのためにも、コーパス利用のための講習会をウェブなども使って効率的に行うことに加えて、コーパスを活用した研究のモデルを提示する努力が必要である。各プロジェクト班内の研究会においては、研究発表などの形で、当該コーパスを活用した研究も出てきているようなので、完成した論文に至っていないプロジェクト班のニューズレターや報告書の形式でもよいので、このコーパスを使ってこのような研究ができるというモデルが盛んに示されることを期待したい。

## (2) 研究水準について

「対照言語学」の成果書籍の5冊の英文論文集が権威ある出版社から刊行されている点、また、窪菌（編）の促音に関する英文論文集と野田・野田『日本語を分析するレッスン』が国内外の専門誌の書評で高い評価を得ている点は、これらの研究の学術的意義が高いことを表していると評価できる。

窪菌（編）『オノマトペの謎』は一般紙書評で好評を得ているように、オノマトペという一般の関心の高いテーマを多様な角度から分析しており、本基幹研究プロジェクトの言う「総合的日本語研究」の「総合性」に迫る成果をあげていると思える。さらに学際性を広げて、日本語研究の「総合性」を追究してほしい。

「危機言語・方言」による『椎葉村方言語彙集』などの地道なデータベース蓄積は、今年度の椎葉村との地域連携締結や、創設以来深く関与してきた「危機言語・方言サミット」の共催と合わせて、学術的・社会的意義が高い研究活動である。

その他の各プロジェクトも、それぞれに学術的水準の高い活動を展開している。

研究水準を高めるとともに、学術的・社会的ニーズに深く呼応する基盤づくりの方策として、研究会、シンポジウム、講演会参加者からのフィードバックをさらに積極的に得ていく努力が望まれる。2つのプロジェクトがすでにつくっているアドバイザリーボードを、他のプロジェクトもさまざまな形（Zoomなどのウェブ会議ソフトを活用すると、容易に海外在住者もメンバーに加えられる）で構成することも考えられるし、ウェブサイトでコメントを得るシステムも工夫できるだろう。

## (3) 研究体制について

6つの基幹研究プロジェクト班に440人という多数の共同研究員を組織し、その内、若手研究者が32人、在外研究者が63人という構成は、共同利用機関という国語研の役割と、若手研究者育成、国際性という目標の両者とも十分に満たしている。

「共同研究プロジェクト推進会議」が各プロジェクト班の間の調整を行っており、コーパス合同シンポジウムなどを共同で実施している点は、「総合的日本語研究」への布石としては評価できる。さらにプロジェクト班の間の連携の実質を高め、単なる「融合」や「言語資源構築を共通基盤としていること」にとどまらない「総合的日本語研究」の探究の展開を期待する。

アドバイザリーボードは、国際シンポジウムや研究成果公表についてアドバイスするだけでなく、そのプロジェクトの研究活動を部外者の目で客観的・社会的・全体的に見る役割を果たすことが望ましい。

#### (4) 教育について

連携大学院で、言語のフィールドワークに関する授業やコーパスを使った授業を行った点は、国語研ならではの授業内容として評価できる。東京外国語大学 AA 研と共同での、木曾川方言調査における学生へのフィールドワーク指導の成果とあわせて、言語のフィールドワークに関する教材・教育プログラムの開発が、「総合的日本語研究」の教育プログラム的一端として結実していくことを期待したい。

「学習者のコミュニケーション」は日本語教師セミナーだけでなく、作文研究や文章理解のシンポジウムなどにおいても教師研修的役割を果たしていると評価する。

「統語コーパス」がインドの大学の依頼をうけて日本語学教材を開発して、ウェブで公開している点は評価できる。

#### (5) 人材育成について

博士学位を取得した若手研究者をプロジェクト研究員として 6 人、非常勤研究員として 36 人雇用して、専門的研究指導を行っている点、学振特別研究員 PD 32 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、シンポジウムや研究会において研究発表の機会を与えている点は、若手研究者のアカデミック・キャリアの向上につながる貴重な努力として評価する。

コーパスの利用法を主なテーマとしたチュートリアル、講習会を国内で 12 回、海外で 4 回開催している点も、若手研究者育成に貢献していると評価できる。

ただし、昨年度の外部評価でも指摘したように、講習をより効果的なものとするために、ウェブでの講習映像公開もあわせて推進されるべきであろう。

#### (6) 社会連携について

「危機言語・方言」の、椎葉村との正式な交流協定の締結と、本年度で 4 回目となる「日本の消滅危機言語・方言サミット」共催の継続的努力は、意義深い社会連携として高く評価できる。地域創生という実践的課題と、危機言語・方言の保存を有機的に結びつける活動は、言語の力を「総合的」にとらえ直す活動であり、この意味で「総合的」日本語研究の一つのあり方を示しているとも言える。

コーパス検索アプリケーション「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクはきわめて興味深い。これがうまく稼働すれば、通時コーパスが一般の読書人にとって身近なものとなり得るだろう。この点を考慮すると、さらなる社会連携をふまえたコーパス利用法に関する一般向け講習ビデオのウェブ公開にも取り組んでほしいところである。

#### (7) 社会貢献について

一般向けに研究成果を分かりやすく伝えるための NINJAL フォーラムや講演会の開催、広報誌『国語研 ことばの波止場』の発行は、社会貢献として評価できる。子ども向けの「ことば探検」はいろいろと工夫されていて興味深い。第 11 回 NINJAL フォーラムがビデオ録画され、ネット配信されている点は、外部評価委員会の提言を汲み入れた措置として共感する。

ただし、同じく評価委員会の提言を入れた、コーパス利用講習会のビデオ録画については、現在のものはアクセスしにくいという問題点が残っている。また、より一般向けのコーパス利用の手引も、

ビデオとテキスト両方の形で公開することが望まれる。

「消滅危機言語・方言」が共催した「え、ほん？」展は、文字テキストと視覚表現が結びついたマルチモーダルな展示の試みとして斬新であり、社会貢献としても高く評価したい。方言の可搬型コンテンツの作成と使用も同様に評価できる。

国語研のHPでは、多様で大量の言語資源がコーパスとして提示・公開されている。このこと自体は多大な社会貢献の可能性をもっている。しかし、博物館などと違って、国語研の展示については「ウェブ上で展示・展開する」（基本計画 p.4）のものであると述べているわりには、国語研のHPでのコーパスなどの見せ方はあまり親切で魅力的とは言えない。ウェブサイトの整備が行われたが、この点ではまだ不十分であると思える。一般の人が国語研のサイトにどのような期待とニーズをもってアクセスするかを踏まえて、ウェブサイト訪問者の関心別の入門的サイト・ツアーのようなHPガイドをHPに載せることが必要なのではないか。

#### **(8) 国際連携について**

今年度は、アメリカ2件、インド、台湾各1件の計4件の国際交流協定を締結した。これまでの交流協定がヨーロッパに偏っていたのに対して、外部評価委員会ではアジア諸国やロシアとの協定の方角を助言した。2件はそれに適っていると見える。アメリカの2大学との協定も内容的に有意義である。特に、危機言語の研究拠点であるハワイ大学との交流協定には期待したい。

もちろん協定を結ぶだけでなく、実質的な交流を行うことが重要であり、その意味で「統語コーパス」が海外の諸大学と積極的に研究交流を行っている点は評価できる。海外の優秀な若手日本語学研究者を受け入れるような方策も、可能なら、有意義な試みとなろう。

#### **(9) 国際発信について**

今年度は、研究成果の書籍・報告書・シンポジウム等での国際発信が質量ともに豊富に行われたことを高く評価する。特に「対照言語学」で、研究所スタッフが言語学分野で定評のある海外の出版社から英語による書籍を5冊刊行したことは優れた成果である。

また、すべてのプロジェクト班が国際学会や国際シンポジウムの企画・運営を行い、国際学会のパネルセッション、シンポジウム、ワークショップを開催したことも評価できる。とりわけ、認知言語学国際学会やヨーロッパ日本学会でのセッションの開催は、当該領域での影響力が大きい学会におけるものとして重要である。

大学院生を主な対象としたチュートリアル・講習会の海外での実施、ホームページでの英語による発信への注力も評価に値する。

昨年度の外部評価で注目した寺村秀夫の名詞修飾表現に関する一連の研究の英語訳の試みが今年度公開にいたったが、残念なのは、その後、日本における画期的な日本語研究を英語訳する作業が一切進展していない点である。

画期的な日本語研究の英語訳の公開は、日本語研究の国際発信に大いに貢献する作業であろう。

また、「総合的な日本語研究」に日本語研究史の観点は欠かせない。日本語研究史の目によって精選された画期的な日本語研究の英語訳のさらなる展開を期待したい。

## (10) その他特記事項

以下に箇条書きする。

- 1) 本点検・評価報告書は3月中旬に人間文化研究機構に提出しなくてはならない。しかし、その時期までに提出するためには評価者にとって非常な労力が必要な上に、3月期の活動状況を確認し得ない等、厳密に見て、適切な評価がなしにくい状況があるので、本点検・評価報告書の機構への提出時期に関して再考していただきたい。
- 2) 「実績報告書」の「今後の研究の推進方策および課題等」において、昨年度の外部評価委員会による改善点の提起に応じて、事項ごとに対応の結果を示している点は高く評価する。また、各プロジェクトの自己点検評価報告書の書き方が、本外部評価委員会の提言に従って、計画事項と実施事項を併記する形になり、格段と評価しやすくなった点も評価に値する。
- 3) 精選した主要業績については、「実績報告書 p.8」におけるように、1, 2行程度の簡潔な内容紹介を加えていただくと、その業績の学術的・社会的意義を理解しやすいので、他の主要業績についてもそのような紹介文を付加していただきたい。
- 4) 外部評価をよりの確に行うために、当該年度における主要業績を、予算等で可能な限り、少なくとも各プロジェクト班担当の評価委員には資料として送付していただきたい。
- 5) 今期中期計画3年目および5年目の中間総括年度においては、外部評価委員による各プロジェクトリーダーへのヒアリングを設定していただきたい。

## 3. 次年度の研究推進に向けた意見

昨年度の「点検・評価報告書」で要望した点への「実績報告書」最終ページにおける応答を踏まえ、さらに今年度の「実績報告書」からあらたに考慮させられた点について、以下に箇条書きする。

- (1) 英語圏だけでなく、中国、韓国、ロシアなどの近隣諸国や他のアジア諸国の当該学界との連携も重要であろう。その点で、今年度、インドのネルー大学言語学科、台湾の東呉大学文学系と交流協定を締結したことは評価できる。
- (2) 「総合的日本語研究」を志向する点からすると、6つのプロジェクト班相互の対話と協働をより促進するとともに、テーマと関連する隣接領域や異分野の広義の言語研究者を共同研究者として積極的に迎える努力もあってよい。また、研究所内に、本報告書の1で指摘した意味での「総合性のあり方を探究するワーキンググループ」を組織することも考えられる。
- (3) 日本語学における過去の優れた業績を精選して、英語訳の紹介を行う。
- (4) 各プロジェクトで、研究目的と必要に応じたアドバイザリーボードについて検討する。
- (5) コーパスの利用法についての講習会のビデオを、HPで分かりやすい形で公開する。
- (6) 一般向けのコーパス利用法のビデオないしテキストを公開する。
- (7) 国語研のHPのレイアウトと使い勝手をさらによくして、美術館・博物館の「展示」のように、分かりやすく、魅力的なものにする。一般人向けの「HPガイド」がある方がよい。

## 各プロジェクト・センターの評価

### 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法

プロジェクトリーダー：窪菌 晴夫

#### I. プロジェクトの概要

##### 1. 目的及び特色

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i)世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii)一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii)日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語（諸方言を含む）を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得（第一言語獲得、第二言語習得）はもとより、言語に関する他の学問分野（心理学、認知科学他）との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

##### 2. 年次計画（ロードマップ）

平成28年度（研究プロジェクトの始動）

1. 日英語によるプロジェクトHPを開設し、以後、随時更新する。
2. 若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員(PD)2名に対して研究指導を行う。
3. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
4. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
5. NINJAL国際シンポジウムとしてThe 24th Japanese Korean Linguistics Conference (JK 24)

(10月14～16日)とオノマトペ国際シンポジウム(12月17～18日)の2つを開催する。またその成果の取りまとめ(論文集の編集)に着手する。

6. オノマトペをテーマに一般社会向けのNINJALフォーラムを開催する(平成29年1月21日)。
7. 第二期中期計画期間に着手した『日本語版連濁事典』, Mouton Handbook (Contrastive Linguisticsの巻), The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Tonal Change and Neutralizationの編集作業を完了する。
8. 言語地図の立案を開始する(項目・言語の選択, 刊行方法等)。
9. 大学院生向けのチュートリアル(第1回)を開催する。
10. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し, 客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

#### 平成29年度(研究プロジェクトの展開)

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し, 研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員(PD)1名に対して研究指導を行う。
2. 研究班, 研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 「プロソディー」と「名詞修飾」をテーマにそれぞれ国際シンポジウムを開催する。
4. 国際認知言語学会を他機関と共同誘致する。
5. 前年度に開催したNINJAL国際シンポジウム2件とNINJALフォーラム1件の成果を取りまとめ, それぞれ論文集, 啓蒙書として編集を行う。
6. 言語地図の作成を開始する。
7. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し, 客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

#### 平成30年度(研究成果の中間とりまとめ)

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し, 研究指導を行う。またPDフェローの任期終了に伴い, 年度末に平成31～33年度のPDフェロー2名を募集する。
2. 研究班, 研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 平成28年度に開催したNINJAL国際シンポジウム2件とNINJALフォーラム1件の成果物(論文集・啓蒙書)の編集を完了し, 刊行する。
4. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集として取りまとめる(公刊は1～2年後)。
5. 「動詞の意味構造」に関する国際シンポジウムを開催する。
6. 引き続き言語地図の作成を行う。
7. 音声関係の啓蒙書に着手する(1冊目)。
8. 大学院生向けのチュートリアル(第2回)を開催する。
9. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し, 客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 31 年度（研究プロジェクトの拡充）

1. 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 「プロソディー」に関する国際シンポジウム（2 回目）を開催する。
4. 前年度に開催した「動詞の意味構造」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集として取りまとめる（公刊は 1～2 年後）。
5. 「プロソディー」と「名詞修飾（和文）」に関する研究論文集の編集を終え、刊行する。
6. 引き続き言語地図の作成を行う。
7. 音声関係の啓蒙書を出版する（1 冊目）。
8. 文法関係の啓蒙書に着手する（2 冊目）。
9. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 32 年度（研究成果のとりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集として取りまとめる（公刊は 1～2 年後）。
4. 言語地図の取りまとめを行う。
5. 文法関係の啓蒙書を出版する（2 冊目）。
6. 大学院生向けのチュートリアル（第 3 回）を開催する。
7. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 33 年度（研究成果の公刊）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 一般社会向けの NINJAL フォーラム（第 2 回）を開催する。
3. 「動詞の意味構造」に関する研究論文集の編集を終え、刊行する。
4. 言語地図を公刊（公開）する。
5. 大学院生向けのチュートリアル（第 4 回）を開催する。
6. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

【3 年目までの成果物】〔編者〕

1. Sequential Voicing in Japanese Compounds (John Benjamins). 2016 年 6 月. [バンス]
2. 赤瀬川 史朗, プラシヤント・パルデシ, 今井 新悟 (著) 『日本語コーパス活用入門: NINJAL-LWP 実践ガイド』 (大修館). 2016 年 7 月. [パルデシ]
3. Mouton Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (De Gruyter Mouton). 2018 年 2 月 [パルデシ]

4. The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants (Oxford University Press). 2017年4月〔窪  
菌〕
  5. Tonal Change and Neutralization (De Gruyter Mouton). 2018年3月.〔窪菌〕
  6. Japanese Korean Linguistics 24 (CSLI). 2018年〔船越・窪菌〕
  7. 『オノマトペの謎』2017年5月〔窪菌〕
  8. 音声関係の啓蒙書『通じない日本語』2017年12月〔窪菌〕
- 【5年目までの成果物】上記に加え次のものを刊行する。
1. 『日本語と世界の言語のとりたて表現』くろしお出版, 2019年〔野田〕
  2. プロソディー関係の英文論文集 (The Linguistic Review 特集号), 2019年〔窪菌〕
  3. 名詞修飾関係の和文論文集, 2019年〔パルデン〕
  4. 『移動表現の類型論と第二言語習得』2019年〔松本〕
  5. 『動詞の意味と百科事典的知識 (仮題)』2021年〔松本〕
  6. Typology of Motion Event Descriptions 2021年〔松本〕

## II. 29年度活動概要

### 29年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

対照言語学研究を推進するために、国内外の研究者 32 人を共同研究員として追加し、合計 123 人の組織で事業を遂行した。4つの研究班ごとの公開研究発表会を計9回、4班合同の発表会 (Prosody and Grammar Festa 2) を1回、国際ワークショップ・シンポジウムを2回開催した。これらの企画において計76件の研究発表が行われ (うち学生が筆頭発表者のもの8件)、計610名 (延べ) の参加者が得られた (うち海外機関研究者68人、大学院生を含む学生74人)。またプロジェクトの所内メンバーが合計7冊の研究論文集を刊行、3冊の研究論文集の編集を行い、さらに3冊の一般書・啓蒙書を刊行した。これらの図書は国内外の専門誌の書評欄において好意的な評価を受け、また一般書・啓蒙書は複数の新聞の書評欄等で取り上げられた。

プロジェクト共同研究員の研究成果も含めると、プロジェクト全体で論文19件、図書10冊、発表・講演43件を公開・刊行した (いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ)。

#### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

複数の基幹型プロジェクトにまたがる企画として NINJAL シンポジウム「日本語の名詞周辺の文法現象—名詞修飾表現ととりたて表現—」を開催し、56人の参加者を得た (発表6件、基調講演1件)。

国際ワークショップ Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces と Nominalization and Noun modification を開催するにあたってアドバイザーボードのメンバーに意見を求め、その意見をテーマや招待講演 (発表) 者の選定と成果の刊行計画立案に活用した。

また立命館大学大学院言語教育情報研究科と連携して第11回 NINJAL フォーラム「オノマトペの魅力と不思議」を大阪で開催し、一般市民と大学生を中心に215人の参加を得た。NINJAL フォーラムとしては東京以外での初めての開催であった。

### 3. 教育に関する計画

NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」を台湾東呉大学で開催し、対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法について各4コマの講義を行った。大学院生67人を含む合計99人の参加を得た。

若手育成として新規にPDフェローを2人雇用し、また学振PD1人を外来研究員として受け入れ指導を行った。またプロジェクト全体で6人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。

さらに大学院生6人、学振PD1人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、このうち3人(延べ)にプロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また共同研究員以外に、各班の研究発表会や国際ワークショップ等において延べ5人の大学院生(筆頭発表者)に発表の機会を与えた。上記の発表を含め、若手研究者28人に対して旅費を支援し、加えて計2名の若手研究者に対して方言調査の旅費を援助した。

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

社会との連携として鹿児島県薩摩川内市と甕島方言の保存・調査・啓蒙活動について協議を行い、甕島の2ヶ所で島民向けの講演会を行った。研究成果を社会へ還元するために、立命館大学大学院言語教育情報研究科と共催で第11回NINJALフォーラム「オノマトペの魅力と不思議」を開催し、その内容をネット配信した。またオノマトペに関する啓蒙書『オノマトペの謎』と、日本語の多様性に関する啓蒙書『通じない日本語—世代差・地域差からみる言葉の不思議』をそれぞれ刊行した。

社会人の学び直しとして、台湾東呉大学で開催されたNINJALチュートリアルにおいて、32人の社会人(現地日本語教師)に対して「日本語の音声と文法」の講義を行った。また東京言語研究所が小中高の教員向けに開催した「教師のためのことばワークショップ」と、関西外国語大学イベロアメリカ研究センターがスペイン語教員向けに開催した第10回スペイン語教授法研究会において、それぞれ講演をそれぞれ行った。

### 5. グローバル化に関する計画

プロジェクトの所内メンバーが合計5冊の英文研究論文集を刊行した(Haruo Kubozono (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Oxford University Press, 計408頁), Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization* (De Gruyter Mouton, 計383頁), Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.) *Handbook of Japanese Syntax* (De Gruyter Mouton, 計852頁), Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (De Gruyter Mouton, 計722頁), Kenshi Funakoshi et al. (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 24* (CSLI, 計400頁))。

また寺村秀夫の名詞修飾表現に関する一連の研究の英語訳をホームページ公開した。

さらに国際イベントとして、JK Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean (ハワイ大学), The 14th International Cognitive Linguistics Conference のテーマセッション「Diversity of Path Coding in Languages」, NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」(台湾東呉大学)の3つのイベントを開催した。

国際会議WAFIL 13における基調講演「Prosodic evidence for syllable structure in Japanese」をはじめ、プロジェクト全体では20件、国際会議で成果発表を行った。

## 6. その他

特になし

### III. 項目ごとの状況

#### 1. 研究に関する計画

|  |             |
|--|-------------|
| 自己点検評価   | 計画を上回って実施した |
| <b>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</b>  |             |
| 1. 対照言語学研究を推進するために、4つの研究班（下記）ごとの <u>公開研究発表会を計9回、4班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 2)を1回、国際ワークショップ・シンポジウムを2回開催した。</u><br><u>これらの企画において計76件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの8件）、計610名（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者68人、大学院生を含む学生74人）。</u>  |             |
| ①このうち、班ごとの研究発表会9回の内訳は音声研究班3回（平成29年6月18日、10月1日、平成30年3月5日）、とりたて班1回（平成30年1月27日）、名詞修飾班3回（平成29年7月29日、10月29日、平成30年3月17日）、動詞の意味構造班（以下「意味構造班」）が2回（平成29年10月14日、平成30年2月20日）であった。これらの発表会に合計392人の参加が得られた（うち海外機関研究者39人、大学院生を含む学生49人）。発表数は合計38件であった（うち学生が筆頭発表者の発表6件）。                                      |             |
| ②プロジェクト全体の統合を図るために、平成30年2月17-18日に、2つの公募型共同研究プロジェクト（「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」）も加わった <u>合同の研究発表会(Prosody and Grammar Festa 2)を開催し、125人の参加者を得た（うち海外機関研究者3人、大学生を含む学生25人）。</u> この合同発表会では合計13件の発表（2~3件x4班+公募班各1件）と「日本語と言語類型論」と題するシンポジウム（発表4件）により、対照言語学および言語類型論に関する研究成果を報告した。 |             |
| ③国際シンポジウム等   |             |
| ・ The 25 <sup>th</sup> Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 25)のサテライトワークショップとして、 <u>JK Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean（ハワイ大学、平成29年10月11日）を開催した。</u> 参加者は63人（うち海外機関研究者26人）、発表件数は12件（口頭5件、ポスター発表7件；うち海外機関研究者による発表6件、学生が筆頭発表者の発表2件）であった。〔音声研究班〕        |             |
| ・ The 14th International Cognitive Linguistics Conference（エストニア・タルトゥ大学、平成29年7月10-14日）において、 <u>Diversity of Path Coding in Languages</u> と題するテーマセッションを開催した（スペイン・サラゴサ大学を中心とする研究チームと共同）。発表件数は9件（うち海外機関研究者（筆頭発表者）による発表は3件であった。参加者は30人であった。〔意味構造班〕  |             |

## 2. 方言調査

プロソディーの研究を推進するために2017年6月に「薩摩川内市(鹿児島県)鹿児島方言のプロソディー調査」、2018年1月に「薩摩川内市(鹿児島県)甕島方言のプロソディー調査」を実施し、プロジェクト主催の国際ワークショップ Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces (2017年10月, ハワイ大学) 等でその成果を報告した。

## 3. プロジェクトの所内メンバーが合計7冊の研究論文集を刊行し、さらに3冊の研究論文集の編集を行った。

① 音声研究班は平成29年4月に Oxford University Press より Haruo Kubozono (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (計408頁) を、30年3月に De Gruyter Mouton より Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization* (計383頁) をそれぞれ刊行した。さらに、平成29年10月に開催した国際ワークショップ JK Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean の成果を論文集としてまとめるべく、国際誌 *The Linguistic Review* (De Gruyter Mouton) と交渉を行い、編集作業を始めた(平成30年8月入稿, 平成31年前半刊行予定)。

② とりたて班は平成29年10月に De Gruyter Mouton より Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.) *Handbook of Japanese Syntax* の巻(計852頁) を刊行した。また、研究論文集『日本語と世界の言語のとりたて表現』の編集作業を進めた。

③ 名詞修飾班は平成30年2月に De Gruyter Mouton より Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* の巻(計722頁) を刊行した。

④ 意味構造班は、班長の松本と前プロジェクト PD フェローの陳奕廷(現三重大学特任教員) が共著の研究書『日本語語彙的複合動詞の意味と体系』を平成30年2月に刊行した(計364頁, ひつじ書房)。また『移動表現の類型論と第二言語習得』(吉成祐子・眞野美穂・江口清子・松本曜編, くろしお出版) の刊行準備を行った。

⑤ 昨年度プロジェクトが主催した NINJAL 国際シンポジウム The 24<sup>th</sup> Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 24) の成果を CSLI 社(Stanford) から *Japanese/Korean Linguistics 24* として刊行した(Kenshi Funakoshi et al. eds., 400頁, 平成30年1月刊)。また第二期中期計画中の音声研究班の成果として Timothy Vance 名誉教授が『連濁の研究－国立国語研究所プロジェクト論文選集』を筆頭編者として刊行した(開拓社, 249頁, 平成29年11月刊)。

## 4. プロジェクトの所内メンバーが3冊の一般書、啓蒙書を刊行した。

① 音声研究班では昨年度実施した一般向け NINJAL フォーラム「オノマトペの魅力と不思議」の成果を窪菌晴夫(編)『オノマトペの謎』として刊行した(岩波科学ライブラリー261, 岩波書店, 166頁, 平成29年5月刊)。この本は、日本語のオノマトペを対照言語学, 日本語史, 言語発達, 日本語教育等の様々な観点から分析したものである。また、対照言語(方言)学の観点から日本語の多様性を分析した啓蒙書, 窪菌晴夫(著)『通じない日本語－世代差・地域差からみる言葉の不思議』を刊行した(平凡社新書861, 207頁, 平成29年12月刊)。

② とりたて班では、日本語の分析方法を学習するための大学生向けテキスト, 野田尚史・野田春美(著)

『〈アクティブ・ラーニング対応〉日本語を分析するレッスン』を刊行した（大修館書店，174頁，平成29年4月刊）。

5. インド政府人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会（UGC）およびネルー大学の依頼により，合計30モジュールの大学院生向け日本語学教材（テキストとビデオ講義）を開発し，ビデオ講義をYouTubeで公開した。これは「日本語学習者」プロジェクトと合同の事業であったが，プロジェクト間の重複を避けるために，「日本語学習者」プロジェクトの成果として位置付けることにした。
6. プロジェクト共同研究員の研究成果も含めると，プロジェクト全体で論文19件，図書10冊，発表・講演43件を公開・刊行した（いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ。別添の「研究成果一覧」参照）。
7. 音声研究班が刊行した *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Haruo Kubozono ed., Oxford University Press)は，Abigail Cohn氏（コーネル大学教授）と Carlos Gussenhoven氏（オランダネイメイヘン大学教授）からそれぞれ “this book provides new insights into geminates in languages across the globe”， “This first single volume devoted exclusively to the topic of geminates engages in revealing ways with a range of key questions…Recommended!” という評価を受けた（裏表紙）。またアメリカ音響学会の機関誌 *JASA* の書評欄 (online 2017. 10. 3) では Donna Erickson氏 (Haskins Lab) から “This book stands out in terms of the range of languages and perspectives covered. … this book is a fascinating read, and a definite must for phoneticians and phonologists exploring the linguistic nature of gemination.” と評された。
8. とりたて班が刊行した『〈アクティブ・ラーニング対応〉日本語を分析するレッスン』は、『英語教育』第66巻第4号（平成29年7月）で塚本秀樹氏から「現在の日本語研究は，日本語を国語として見るのではなく，英語などと同様に，いわば外国語として見て分析し考察するアプローチが定着しており，これまで多大な成果を上げてきた。本書はまさに日本語に対するこういう見方の基礎を養うものであり，英語にかかわる方々にもぜひ，本書によって日本語ということばの世界を存分に楽しんでいただきたい」と評された。
9. 『オノマトペの謎』（窪菌晴夫編，岩波書店）は複数の新聞（産経新聞7月2日，朝日新聞7月23日，東京新聞8月3日，日刊ゲンダイ10月7日）やNHKラジオ（10月12日）等で紹介された。このうち朝日新聞の書評欄では「本書は最新の学説やデータでオノマトペという現象を総合的に捉える。オノマトペ研究日本代表とも言っている研究者たちがオノマトペの謎に挑み解明していくので，サクサク読めてウトウトする暇もない。」と評された。また『通じない日本語』（窪菌晴夫著，平凡社新書）は読売新聞全国版（12月28日）の「編集手帳」欄で紹介された。

## （2）研究実施体制等に関する計画

10. コーネル大学言語学科との連携協定に関する協議を続けた。こちらから協定案を送り，先方からの返事を待っているところである。
11. 大学院生を対象にした講習会である NINJAL チュートリアルを国語研が国際展開するにあたり，プロジェクトとして台湾東呉大学でチュートリアルを行ったが（詳細については「3. 教育に関する計画（1）」

参照)], この交流を通して, 国語研と東呉大学との学術交流協定作りに尽力した (平成 30 年 1 月に締結)。

12. 対照言語学研究を実施するために, 国内外の研究者 32 人を共同研究員として追加し, 合計 123 人の組織でプロジェクトの事業を遂行した (うち大学院生 6 人, 海外研究機関に属する研究者 15 人)。また国内外から 3 人の研究者 (国内 2 人, 海外 1 人) を外来研究員として受け入れ, 共同研究を行った。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

|   |            |
|---|------------|
| 自己点検評価  | 計画どおりに実施した |
| <p><b>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</b></p> <p>1. 言語地図の作成のためのデータ収集用のアンケートを作成し, データ収集を開始した。データベース設計について検討を開始した。〔名詞修飾班〕</p> <p>2. 諸言語の移動動詞に関する文献目録の改訂を行った。〔動詞意味班〕</p> <p>3. 音声研究班が平成 28 年度に公開した甌島アクセントデータベースは, 方言アクセントの研究に使用されており, 年間約 270 件のアクセスがあった。</p> <p><b>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</b></p> <p>4. <u>複数の基幹型プロジェクトにまたがる NINJAL シンポジウム「日本語の名詞周辺の文法現象 一名詞修飾表現ととりたて表現」</u>を平成 29 年 12 月 23 日に開催し, 56 人の参加者を得た (うち海外機関研究者 1 人, 大学院生 9 人)。この合同発表会では合計 6 件の発表と 1 件の基調講演を行い, 対照言語学および言語類型論に関する研究成果を報告した。〔とりたて班, 名詞修飾班〕</p> <p>音声研究班は国際ワークショップ Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces を開催するにあたり, 名詞修飾班は国際ワークショップ Nominalization and Noun modification を開催するにあたり, <u>アドバイザリーボードのメンバーに, テーマ・招待講演 (発表) 者の選定や成果の刊行計画等について意見を求め, それを活用した。</u></p> |            |

## 3. 教育に関する計画

|  |            |
|--|------------|
| 自己点検評価   | 計画どおりに実施した |
| <p><b>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</b></p> <p>研究過程および研究成果の教育的普及<br/>大学の機能強化に貢献しているか</p> <p>1. 国内の 5 つの大学院 (東京大学, 南山大学, 早稲田大学, 東北大学, 神戸大学) において日本語学・言語学の授業を担当した。ただし「個人的な非常勤講師や研究指導は含まない」という自己点検評価委員会の方針に従い, プロジェクトの実績外とすることにした。</p> <p><b>(2) 人材育成に関する計画</b></p> <p>若手研究者の育成</p> <p>2. <u>NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」</u>を平成 29 年 10 月 28-29 日に台湾東呉大学で開催し, 対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法について窪蘭と野田が各 4 コマ (90 分 x 4 コマ) の講</p> |            |

義を行った。大学院生 67 人を含む合計 99 人の参加を得た。

3. 前年度の PD フェロー2 人が常勤職（三重大学，学術振興会特別研究員 PD）に就いて退職したのに伴い，新規に PD フェローを 2 人雇用し（音声研究班，文法研究班各 1 人），また学振 PD1 人を外来研究員として受け入れ，若手育成を行った。このうち PD フェロー1 人は，平成 30 年 4 月に私立大学の専任教員として採用されることが内定した。またプロジェクト全体で 6 人の非常勤研究員を雇用し，対照言語学の事業を推進した。
4. 大学院生 6 人，学振 PD1 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ，このうち 3 人（延べ）にプロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。
5. 上記の共同研究員以外に，各班の研究発表会や国際ワークショップ等において延べ 5 人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与えた（音声研究班）。  
上記の発表を含め，若手研究者 28 人に対して旅費を支援した。また若手研究者に対して方言調査の旅費を援助した（合計 2 件）。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| 自己点検評価  | 計画どおりに実施した |
|---|------------|
| <b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b>   |            |
| 1. <u>音声研究班では鹿児島県薩摩川内市と甕島方言の保存・調査・啓蒙活動について平成 29 年 11 月に協議を行い，平成 30 年 1 月 13-14 日に甕島の 2 ヶ所で島民向けの講演会を行った（参加者計 120 人）。また 30 年度に甕島の中学校（全 4 校）において中学生と教員向けの講義（啓蒙活動）を行うことで合意した。</u>   |            |
| <b>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</b>  |            |
| 2. <u>立命館大学大学院言語教育情報研究科と共催で第 11 回 NINJAL フォーラム「オノマトペの魅力と不思議」（平成 29 年 9 月 10 日，大阪）を開催し，大学生・大学院生，教員（小学校～大学），一般市民の合計 215 人に対して，オノマトペの謎と面白さを伝えた。この一般向けイベントはビデオ録画され，ネット配信されている。〔音声研究班〕</u>   |            |
| 3. <u>オノマトペに関する啓蒙書『オノマトペの謎』（窪菌晴夫編，岩波科学ライブラリー261）を平成 29 年 5 月に，日本語の多様性に関する啓蒙書『通じない日本語―世代差・地域差からみる言葉の不思議』（窪菌晴夫著，平凡社新書 861）を平成 29 年 12 月にそれぞれ刊行した。〔音声研究班〕</u>  |            |
| 4. <u>NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」を台湾東呉大学で開催した（詳細については「3. 教育に関する計画」（1）参照））。99 人の参加者のうち，32 人が現地の学校（高校，大学）で日本語を教える日本語教師であった。〔音声研究班，とりたて班〕</u>  |            |
| 5. <u>東京言語研究所が小中高の教員向けに開催した「教師のためのことばワークショップ」（平成 29 年 8 月 5-6 日）において「母語から始めることばの教育」と題する講演を行った（音声研究班：窪菌）。また，関西外国語大学イベロアメリカ研究センターが主催した第 10 回スペイン語教授法研究会（平成 29 年 7 月 22 日，関西外国語大学）においてスペイン語教員向けに「リーディングのためのスペイン語の主語・主題・語順―日本語との対照から―」と題する講演を行った（とりたて班：野田）。</u> |            |

## 5. グローバル化に関する計画

|  |             |
|--|-------------|
| 自己点検評価   | 計画を上回って実施した |
| <p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <p>1. 海外の研究者 1 人を共同研究員に加えた (合計 15 人)。また海外の研究者 2 人を外来研究員として受け入れた。</p> <p>(2) 国際的発信に関する計画</p> <p>2. 下記の 3 件の国際イベントを開催した。</p> <p>① 音声研究班は <u>JK Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean (ハワイ大学)</u> を開催した (詳細については「1. 研究に関する計画」参照)。</p> <p>② 意味構造班は The 14th International Cognitive Linguistics Conference において、<u>Diversity of Path Coding in Languages</u> と題するテーマセッションを開催した (詳細については詳細については「1. 研究に関する計画」参照)。</p> <p>③ NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」を台湾東呉大学で開催し、<u>NINJAL チュートリアルの国際展開</u>を図った (詳細については「3. 教育に関する計画」(1) 参照))。〔音声研究班, とりたて班〕</p> <p>3. <u>プロジェクトの所内メンバーが合計 5 冊の英文研究論文集を刊行し, さらに 2 冊の英文研究論文集の編集を行った</u> (詳しくは「1. 研究に関する計画」参照)。</p> <p>① 音声研究班は <u>Haruo Kubozono (ed.) <i>The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants</i> (Oxford University Press, 計 408 頁)</u> と <u>Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) <i>Tonal Change and Neutralization</i> (De Gruyter Mouton, 計 383 頁)</u> をそれぞれ刊行した。さらに、国際誌 <u><i>The Linguistic Review</i> (De Gruyter Mouton)</u> の特集号の編集に着手した。</p> <p>② とりたて班は <u>Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.) <i>Handbook of Japanese Syntax</i> (De Gruyter Mouton, 計 852 頁)</u> を刊行した。</p> <p>③ 名詞修飾班は <u>Mouton Handbooks の <i>Handbook of Japanese Contrastive Linguistics</i> の巻 (Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds).)</u> を刊行した。</p> <p>④ 意味構造班は <u>Yo Matsumoto &amp; Kazuhiro Kawachi (eds.) <i>Broader Perspectives on Motion Event Descriptions</i></u> の編集を行い、John Benjamins 社に提出した。</p> <p>⑤ 前年度にプロジェクトが主催した国際シンポジウム <u>The 24<sup>th</sup> Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 24)</u> の成果を <u>CSLI (Stanford)</u> から <u><i>Japanese/Korean Linguistics 24</i></u> として刊行した)。</p> <p>4. 国際会議 <u>WAFLL 13 (The 13<sup>th</sup> Workshop on Altaic Formal Linguistics, ICU, 平成 29 年 5 月 25~28 日)</u> において音声研究班の窪菌が ‘Prosodic evidence for syllable structure in Japanese’ と題する基調講演を行った。これを含め、プロジェクト全体では 20 件、国際会議で成果発表を行った (「研究成果一覧」参照)。</p> <p>5. <u>寺村秀夫の名詞修飾表現に関する一連の研究の英語訳をホームページ公開した。寺村秀夫の名詞修飾表現に関する一連の研究の英語訳をウェブ公開した (平成 29 年 7 月)</u>。公開日の平成 29 年 7 月 1 日から平成 30 年 3 月 21 日現在で累計ユーザー数 714, ページビュー数 1, 541。</p> |             |

## 6. その他

特になし。

### 平成29年度の評価

#### 《評価結果》

##### 計画を上回って実施した

本プロジェクトは、対照言語学的観点から日本語の音声・文法を分析することで、国際的な視点からの評価に堪えうる高い水準の研究を行い、言語データベース作成、人材育成、研究成果の社会への還元、社会との連帯など、順調に計画を実施している。特に音声研究班の活動は顕著であり、成果刊行、啓蒙活動など目を見張らせるものがあり、計画を上回る成果を上げていると評価できる。

#### 《評価項目》

##### 1. 研究について

研究発表会開催、研究発表および成果刊行は当初の計画を上回り、きわめて高い評価に値する。今後もこの活動水準を維持して研究を継続することが望まれる。(1)2の方言調査や(1)5の教材作成も順調に進んでおり理想的な計画実施状況である。また海外の研究機関との連携やチュートリアル開催など活発に研究実施体制を作る努力をしているのも高く評価してよい。研究については、平成29年度の研究実施状況は自己評価Aに十分値するものである。

##### 2. 共同利用・共同研究について

当初の計画通り、言語地図作成のためデータ収集が開始され、データベース設計の検討が始まったことは評価できる。またNINJALシンポジウムの開催と研究成果発表、ワークショップ開催にあたり国内外の研究者から成るアドバイザーボードの積極的活用も当初の計画通りである。全体として、平成29年度の共同利用・共同研究は順調に実施されたと評価できる。

##### 3. 教育について

当研究グループの国内大学院の授業担当が計画通り実施されていることは、国内の大学の使用できる資源が限定されているだけに、国内の大学の機能強化に対する大きな貢献であり、非常に望ましい状況である。人材育成に積極的に取り組み、着実に成果を上げていることが窺われ、高い評価が与えられる。教育に関する実施状況は積極的な評価に値する。

##### 4. 社会との連携及び社会貢献について

国内の4つの大学院において日本語学・言語学の授業を担当したことなど、また、アクティブ・ラーニングに対応した日本語学の教材『日本語を分析するレッスン』（大修館書店）の刊行に漕ぎつけたことなど、大学院等の教育協力に関する今年度の計画を予定通り実行に移し、研究成果の教育的普及に貢献できた点が評価できる。

## 5. グローバル化について

国際的協業は、共同研究員としての海外研究者や外来研究員の受け入れを通じて順調に進んでいる。研究成果の国際的発信については、海外でのワークショップ、テーマセッション、チュートリアルの開催、5冊の英文研究論文集の刊行や2冊の英文論文集の編集など申し分のない成果を上げている。寺村秀夫の論文の英訳など日本語に関する重要文献の海外発信にも積極的に取り組んでいる。グローバル化に関する実施状況はきわめて高い評価に値する。

## 6. その他特記事項

なし

# 統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究 プロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

## I. プロジェクトの概要

### 1. 目的及び特色

現在世界の主要言語について Penn Historical Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報タグ付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) を開発するための基礎研究を行い、十分な規模のコーパスを構築し、公開する。さらに、このコーパスを利用して、日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用の推進の一環として、最終年度までに5~6 万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。

### 2. 年次計画（ロードマップ）

平成 28 年度：研究プロジェクトの始動

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
7. ネットを通じてアノテーション作業が円滑に行える環境を海外の研究者と連携しながら構築する。
8. 海外の大学と研究交流協定を結ぶ。
9. 日英版のユーザフレンドリーインターフェースを構築し、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスと合わせて公開する（1 万文）。

平成 29 年度：研究プロジェクトの推進

1. 平成 28 年度の 1. ～5. を引き続き実施する。
2. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) を企画し、実施する。研究成果の編集を開始する。
3. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 2 万文のデータを公開する。

平成 30 年度：研究成果の中間とりまとめ

1. 平成 28 年度の 1. ～5. を引き続き実施する。
2. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 3 万文のデータを公開する。
3. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会 (チュートリアル) を 2 回開催する (内一回は NINJAL チュートリアル)。
4. アノテーションマニュアル試作版作成・ウェブ公開する。
5. インターフェースの開発・改良を続行する。
6. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを経て、海外の定評のある研究雑誌 LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY) に提出する。
7. 日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) を執筆し、この教材の練習問題を NPCMJ コーパスで解くための仕組みを模索する。
8. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究 (宮田 Susanne 教授との共同研究) を開始する。
9. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究 (宮田 Susanne 教授との共同研究) を開始する。
10. 日本語学習者のコミュニケーション (リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ)、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。
11. 2013 年 12 月に開催して NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を続行する。

平成 31 年度：研究プロジェクトの拡充

1. 平成 28 年度の 1. ～5. を引き続き実施する。
2. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 4 万文のデータを公開する。
3. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会 (チュートリアル) を開催。
4. 啓蒙書・普及書を執筆する。
5. 日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) を刊行し、併せて、この教材の

練習問題を NPCMJ コーパスで解くための仕組みも公開する。

6. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開。
7. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を継続する。
8. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を継続する。
9. インターフェースの開発・改良を続行する。
10. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し，「文型バンク」の開発・公開を進める。
11. 2013 年 12 月に開催して NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を完了・出版社に入稿する。

平成 32 年度：研究成果のとりまとめ

1. 平成 28 年度の 1. ～5. を引き続き実施する。
2. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し，合計 5 万文のデータを公開する。
3. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
4. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開。
5. インターフェースの開発・改良を続行する。
6. 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）。
7. 述語と機能語に対して詳細な形態論情報の付与されたデータを公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
8. 啓蒙書・普及書を刊行する。
9. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し，「文型バンク」の開発・公開を進める。
10. 2013 年 12 月に開催して NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の刊行予定（刊行時期は出版社の都合によるもの）。

平成 33 年度：研究成果の公開

1. 平成 28 年度の 1. ～5. を引き続き実施する。
2. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し，合計 6 万文のデータを公開する。
3. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
4. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開。
5. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロ

プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

#### 【3年までの成果物】

- ・海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集：（NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing）の研究成果（LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY)）。
- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3 万文）をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。

#### 【5年までの成果物】

- ・海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集：（NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing）の研究成果（LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY)）。
- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（5 万文）をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。
- ・啓蒙書・普及書（1 冊）
- ・日本語の統語論の教育に特化した入門書 Exploring Japanese Syntax（仮題）の刊行。
- ・日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し開発した「文型バンク」（ウェブ版）。
- ・NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果(論文集)の刊行。

## II. 29年度活動概要

### 29年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

本プロジェクトは、統語・意味解析コーパスの開発とそれを用いた日本語研究を推進するために、国内外の研究者をアドバイザーや共同研究員として新たに迎え、合計 32 名（うち、海外の研究機関所属の研究者 7 名）の組織でプロジェクトを遂行した。コーパス構築班と言語研究班は次のような活動を行った。言語研究班は、公開研究発表会・講演会を 2 回、国際シンポジウムを 1 回、ワークショップを 1 回開催した。これらのイベントにおいて計 26 件の研究発表（学生が筆頭著者の研究発表 2 件を含む）が行われ、計 93 名（延べ）が参加した（うち、海外の研究機関所属の研究者 19 名、大学院生を含む学生 12 名）。

プロジェクト全体で、学術論文・国際学会プロシーディングス論文・著作分担章等 3 件、コーパス・データベース・ソフトウェア（インターフェース開発）等 2 件、発表・講演 10 件、講習会・チュートリアル 3 件があった。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

コーパス構築班は、アノテーション情報の充実と新たなデータ 1 万文のタグ付けを進め、前年度公開した 1 万文と合わせた 2 万文を、アノテーターによるチェック作業を経て NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese (NPCMJ) として公開した。また、コーパス検索の利便性の向上のために、インターフェースに 5 種類の機能（データのローマ字化、フレームグラフ、依存関係・意味役割の表示、文中・文間の照応関係、結合価のプロフィール）を加え、インターフェースの使用法に関する日英語のオンラインドキュメンテーションを作成・公開した。さらに、樺ツリーバンク方式のアノテーションマニュアルの第 1 版を日英語で作成・公開した。

NPCMJ コーパスは、日本語の記述的研究・理論的研究に利用されており、2017 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日間のページビュー数は、82,724 件であった。

国内の大学・研究機関と様々な形で連携・交流を進めた。筑波大学・お茶の水女子大学とは、テキスト含意認識システムに統語・意味解析コーパスとその処理ツールを提供するための共同研究を行なった。慶應義塾大学とは、FrameNet と統語・意味情報コーパスとの連携に関する研究交流を進めた。神戸大学の協力を得て、コーパスの新たなインターフェースの開発を進めている。東北大学とは、アノテーション方式の中国語への適用を進めている。また、NTT コミュニケーション科学基礎研究所および大阪大学大学院情報科学研究科と連携し、機械翻訳および対話システムに統語・意味解析コーパスとその処理ツールを提供するための共同研究について検討し、研究計画を作成した。本プロジェクトのコーパス構築の技術が他のコーパスに利用されている。NPCMJ コーパスのために開発されたアノテーション方式とインターフェースは Man'yōshū97 Parsed Corpus (MYS97) で使用され、2017 年 5 月に公開された (<http://www.compling.jp/mys97/>)。このプロジェクトは NPCMJ の方針をそのまま上代語に適用する試みである。また、NPCMJ コーパスのインターフェースは Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ) で使用され、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の傘下で、2018 年 3 月に公開された (<http://oncoj.ninjal.ac.jp/>)。データ形式だけでなく、今後は NPCMJ コーパスのより高度な分析法も取り入れる予定である。

アドバイザーボードからの意見を受けながら、国際シンポジウム “Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing” を企画・開催した。また、コーパスの機能に関する有益な助言を受けており、今後のコーパス開発に取り入れてゆく予定である。

## 3. 教育に関する計画

NPCMJ コーパスに関する講習会を国内の大学（慶應義塾大学、お茶の水女子大学、神戸大学）において 3 回開催した（参加者は合計 41 名、うち大学院生を含む学生 12 名）。

若手研究者育成のため、非常勤研究員 3 名、技術補佐員 2 名を雇用し、また、大学院生 5 名に共同研究員としてプロジェクトに参画してもらい、コーパス開発およびコーパスに基づく言語研究を推進した。

本プロジェクト共同研究発表会（神戸大学）および東海意味論研究会（名古屋学院大学）における研究発表を行うため、若手研究者 2 名に対して旅費を支援した。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

NTT コミュニケーション科学基礎研究所による機械翻訳の精度向上に関する研究をサポートするための機能をNPCMJ コーパスに加えた。また、新たな連携研究の計画を検討・作成した。株式会社アスコエパートナーズと、行政サービスに関する情報提供システムと統語・意味解析コーパス研究の連携を議論し、本プロジェクトの開発する統語解析機で解析を行った文書、およびコーパス開発ツールを提供した。

#### 5. グローバル化に関する計画

NPCMJ コーパスのインターフェース、オンラインドキュメンテーション、アノテーションマニュアルはすべて日英両言語で作成してある。また、NPCMJ コーパスのデータのローマ字化を進め、日本語の仮名・漢字表記に不慣れな研究者でもコーパスが利用できるような環境を整えた。

#### 6. その他

特になし。

### Ⅲ. 項目ごとの状況

#### 1. 研究に関する計画

|   |             |
|---|-------------|
| 自己点検評価  | 計画を上回って実施した |
| <b>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</b>   |             |
| 1. 本プロジェクトは、統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するためにコーパス構築班と言語研究班の二つの班で活動をした。  |             |
| 研究班は、研究発表会・講演会を計3回、国際シンポジウムを1回開催した。   |             |
| <b>【研究発表会・講演会】</b>  |             |
| ①第1回研究発表会・講演会（平成29年6月9日、国語研（参加者数8人、うち大学院生を含む学生0人）。  |             |
| ②第2回研究発表会・講演会（平成29年11月4日、神戸大学（参加者数22人、うち大学院生を含む学生3人）。   |             |
| ③第3回研究発表会・講演会をワークショップ：Research Methods for the Penn Parsed Corpora of Historical English (PPCHE), 12月12日、早稲田大学（参加者数18人、大学院生を含む学生3人）   |             |
| <b>【国際シンポジウム】</b>   |             |
| ④前年度に協定を締結したペンシルバニア大学、コロラド大学、ヨーク大学、ブランダイス大学およびNTT コミュニケーション科学基礎研究所と連携し、平成29年12月9日—10日の2日間にわたり、国際シンポジウム“Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing”を開催した。口頭発表9件（うち海外からの参加者による発表5件、プロジェクト共同研究員による発表4件）、ポスター発表11件（うち海外からの参加者による発表4件、プロジェクト共同研究員・非常勤研究員による発表5件、その他国内の研究者による発表2件）であった（参加者数45人、うち外国人研究者19人、大学院生を含む学生6人）。この国際シンポジウムにおいて、プロジェクトで雇用している大学院生1名にポスター発表の機会を提供した。 |             |
| このシンポジウムで協定を締結したペンシルバニア大学、ヨーク大学、ブランダイス大学の研究者が研  |             |

究成果を発表し、日本語、英語、中国語、オランダ語のコーパス開発に関する知見と課題が共有できた。また、ペンシルバニア大学のクロック教授、サントリーニ上級研究員から NPCMJ コーパスに付与されている意味情報システムを英語のコーパスに応用することを検討したいという申し出があり、その可能性について、今後共同研究を進めることになった。本プロジェクトの成果は英語など他の言語のコーパス開発に応用されることは学術的な意義が深い。

2. 日本語文法学会第 18 回大会でパネルセッション「統語・意味解析情報をタグ付けした日本語コーパスの開発—アノテーションの方法と文法研究への応用—」を企画し、プロジェクトの成果を発表した（@筑波大学，2017 年 12 月 3 日，プロジェクト共同研究員による発表 3 件）。

上記プロジェクト共同研究員による研究活動の成果は口頭発表 8 件，ポスター発表 2 件である。

3. 上記 NINJAL 国際シンポジウムの口頭発表をとりまとめ，proposal を作成し，スタンフォード大学の CSLI Publications から刊行される国際雑誌 *Linguistic Issues in Language Technology* (LiLT) の編集者に提出した。当 proposal が採択され，国際シンポジウムの研究成果が *Linguistic Issues in Language Technology* (LiLT) の特集号として出版することが決まった。現在，各発表者から投稿原稿を集めている。

4. MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集作業を進めた（公刊は 2～3 年後）。

## (2) 研究実施体制等に関する計画

5. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために，今年度新規として 3 名を追加し，19 名のプロジェクト共同研究員，12 名のアドバイザー体制で共同研究を進めた。

6. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために，今年度新規として 3 名を追加し，19 名のプロジェクト共同研究員体制で共同研究を進めた。また，業務委託に基づき，東北大学と連携してアノテーションの研究・アノテーション作業およびデータのローマ字を進めた。同じく，業務委託に基づき，神戸大学と連携して，インターフェースの改良に関する研究を行い，パターンブラウザの試作版を開発した。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

|   |             |
|---|-------------|
| 自己点検評価  | 計画を上回って実施した |
| <h3>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</h3> <p>1. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス構築に関連して，次のような活動を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・NPCMJ コーパスに，追加する 1 万文の新たなデータを用意している（平成 29 年 3 月に追加し，現時点で合計 2 万文を公開となっている）。</li> <li>・年度公開したデータの質的な改善を図った。</li> <li>・コーパス検索のために，インターフェースに 5 種類の機能（データのローマ字化，フレームグラフ，依存関係と意味役割の表示，談話レベルの表示，結合価のプロフィール）を追加した。</li> <li>・インターフェースの日英両言語によるオンラインドキュメンテーションを充実させた。</li> <li>・インターフェースの利用ガイド（英語版）を作成した（平成 30 年度中に一般公開する予定）。</li> </ul> |             |

- ・特定の構文パターンを検索できる初心者向けの新たなインターフェースの開発に着手し、その試行版をプロジェクト共同研究員に向けて内部公開した（平成 30 年度中に一般公開する予定）。
  - ・日英両言語の樗ツリーバンク方式のアノテーションマニュアルの第 1 版を公開した。
2. 本プロジェクトのコーパス構築の技術が他のコーパスに利用されている。
- ・NPCMJ コーパスのために開発されたアノテーション方式とインターフェースは Man'yoshu97 Parsed Corpus (MYS97) で使用され、2017 年 5 月に公開された。このプロジェクトは NPCMJ コーパスの方針をそのまま上代語に適用する試みである。
  - ・NPCMJ コーパスのインターフェースは Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ) で使用され、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の傘下で、2018 年 3 月に公開された。データ形式だけでなく、今後は NPCMJ のより高度な分析法も取り入れる予定である。
3. NPCMJ コーパスは、日本語の記述的研究・理論的研究に利用されており、2017 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日間のページビュー数 82,724 件であった。

## (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

4. 国際シンポジウム “Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing” の立案・実施に際し、国内外のアドバイザーにテーマの設定、招待発表者の選定、研究成果の刊行計画について意見を求め、それを活用した。
5. 国内の大学・研究機関と次のような連携・交流を進めた。
- ・業務委託に基づき、神戸大学の協力を得て、統語・意味解析コーパスの新たなインターフェースの開発を進めている。
  - ・業務委託に基づき、東北大学と連携し、アノテーション方式の中国語への適用を進めている。
  - ・交流協定を結んでいる NTT コミュニケーション科学基礎研究所および大阪大学大学院情報科学研究科と連携し、機械翻訳および対話システムに、統語・意味解析コーパスとその処理ツールを提供するための共同研究について検討し、研究計画を作成した。

## 3. 教育に関する計画

| 自己点検評価  | 計画どおりに実施した |
|---|------------|
| <p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>特になし。</p>  |            |
| <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <p>1. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに関する講習会を国内の大学と連携して 3 回開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル, 7 月 6 日, 慶應義塾大学 (参加者数 7 人, うち学生 3 人)</li> <li>・統語・意味解析コーパス (NPCMJ) 11 月 1 日, お茶の水女子大学 (参加者数 13 人, うち学生 8 人)</li> <li>・統語・意味解析コーパス (NPCMJ) 11 月 4 日, 神戸大学 (参加者数 21 人, うち学生 1 人)</li> </ul> |            |

2. 若手研究者を育成するために、非常勤研究員を3人、技術補佐員2人を雇用し、プロジェクトの事業を推進した。
3. 大学院生5人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。
4. 東海意味論研究会（名古屋学院大学）および本プロジェクト共同研究発表会（神戸大学）における若手研究者2名の発表の経費を援助した。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

|  |            |
|--|------------|
| 自己点検評価   | 計画どおりに実施した |
| <p><b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b></p> <p>1. ①NTT コミュニケーション科学基礎研究所による機械翻訳の精度向上に関する研究をサポートするための機能をコーパスに加えた。また、新たな連携研究の計画を策定した。</p> <p>②株式会社アスコエパートナーズと2度の会合の機会を得て、行政サービスに関する情報提供システムと統語・意味解析コーパス研究の連携に関する議論を進めた。また、本プロジェクトの開発する統語解析機で解析をおこなった文書、およびコーパス開発ツールを提供した。</p> <p><b>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</b></p> <p>2. NPCMJ コーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に務めた。インターフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザズマニュアル、アノテーションマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした。</p> |            |

#### 5. グローバル化に関する計画

|   |             |
|---|-------------|
| 自己点検評価  | 計画を上回って実施した |
| <p><b>(1) 国際的協業に関する計画</b></p> <p>特になし。</p> <p><b>(2) 国際的発信に関する計画</b></p> <p>1. NPCMJ コーパスのインターフェース、オンラインドキュメンテーション、アノテーションマニュアルはすべて日英両言語で作成してある。また、NPCMJ コーパスのデータのローマ字化を進めた。</p> <p>2. ①第3回研究発表会・講演会として、本プロジェクトのアドバイザーである Anthony Kroch 教授（ペンシルベニア大学）、Beatrice Santorini 教授（ペンシルベニア大学）が平成29年12月12日に早稲田大学にてワークショップ：Research Methods for the Penn Parsed Corpora of Historical English (PPCHE) を行った（参加者数18人、うち、大学院生を含む学生3人）。</p> <p>3. ②平成29年12月9日—10日の2日間にわたり、国際シンポジウム“Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing”を開催した（詳細は1. 研究に関する計画、(1) 研究水準及び研究の成果に関する計画を参照）。</p> |             |

## 6. その他

1. 以下の大学と連携して共同研究を行った。

- ・筑波大学・お茶の水女子大学と連携し、テキスト含意認識システムに、統語・意味解析コーパスとその処理ツールを提供するための共同研究を行った。
- ・慶應義塾大学と、FrameNet と統語・意味情報コーパスとの連携に関する研究交流を進めた。

## 平成29年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施した

NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスのデータ拡充は予定通り進行しており、統語・意味解析コーパス開発は順調に進行している。コーパスに基づく言語研究は、国内外のアドバイザーボードメンバーの助言に基づいて、前年度に協定締結の国内外の大学・研究機関との協力、国内大学との連携の下にコーパスのインターフェース・アノテーションを中心として進められた。国内での研究集会、学会、講習会などに加えて、NINJAL 国際シンポジウムを開催し、その成果の国際学術雑誌での刊行を進めるなど研究プロジェクトの国際的発信に努めている。NPCMJ コーパスのネット公開、各種ドキュメントの日英版の整備を進めると共に民間研究機関、企業でのコーパス活用を目指した活動も着実に進めている。計画通りに順調に実施していると判断する。今後は、国語研開発の統語・意味論コーパスを用いることによって初めて可能となる特色ある言語研究の潮流創出、広範な社会人・一般人へのコーパス利用拡大を目指した取り組みを期待する。

### 《評価項目》

#### 1. 研究について

統語・意味論コーパスを用いた言語研究推進では、研究発表会3回を開催し、また国際シンポジウム1回を海外の協定大学と協力して企画開催している。さらに国際シンポジウムの発表成果は国際雑誌での刊行が進行中である。これらの研究実施のために研究者を増員し、12名のアドバイザーを含む共同研究体制を構築している。研究については概ね計画通り順調に進行していると判断できる。今後は国語研開発の統語・意味論コーパスを用いることによって初めて可能となる特色ある言語研究の潮流創出を目指して引き続き研究活動を推進されることを期待する。

#### 2. 共同利用・共同研究について

統語・意味論コーパスの開発においては、予定通り NPCMJ コーパスの一万文データ追加に加えて、国内大学との連携および業務委託に基づいてコーパス検索のインターフェースおよびアノテーション機能高度化、初心者を対象としたインターフェース開発、英語によるマニュアル作成を行っている。

また、NPCMJ コーパス作成に伴って開発されたインターフェースおよびアノテーション技術は万葉集や日本語通詞コーパス開発にも利用された。NPCMJ コーパスの年間アクセスは8万件あまりにのぼり、日本語の記述的・理論的研究利用普及が進んでいる。さらに NTT コミュニケーション科学

基礎研究所・大阪大学との連携による自然言語処理分野でのコーパス活用を目指した共同研究の検討が進められている。コーパス開発のための共同利用・共同研究については概ね計画通り順調に進行していると判断できる。今後は引き続き NPCMJ コーパスの拡充に努めると共に、自然言語分野との有益な共同の実現を期待する。コーパス開発のアピールにはアクセス数だけでなく、コーパスを利用した研究成果の量的な把握も検討を期待する。

### 3. 教育について

人材育成に関しては、プロジェクト推進のために非常勤研究員 3 名、技術補佐員 2 名を雇用している。また大学院生 5 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させている。NPCMJ コーパスに関するチュートリアルを国内大学において 3 回開催し若手研究者育成を図っている。このように教育については計画通り順調に進行していると判断できる。

### 4. 社会との連携及び社会貢献について

産業界や地域社会との連携に関しては、NTT コミュニケーション科学基礎研究所における機械翻訳研究へのサポート、株式会社アスコエパートナーズへのコーパス開発ツール提供を行っている。研究成果の社会への普及に関しては、NPCMJ コーパスのオンライン公開によって一般に発信すると共に、コーパスの広範な利用のためのインターフェース開発、各種マニュアル作成を行っている。計画通り順調に進行していると判断できる。今後は研究者に止まらず、より広い範囲の社会人を含む多様な人々を対象としたコーパス活用促進の施策検討を期待する。

### 5. グローバル化について

国際的発信については、NPCMJ コーパスに関する英語版ドキュメントに加えてコーパスのローマ字化を進めている。また NINJAL 国際シンポジウムを企画開催して NPCMJ コーパスおよびコーパス言語学研究の発信を行っており、グローバル化に関しては計画通り順調に進行していると判断できる。国際シンポジウム開催などを通じて継続的に研究の国際発信に努められることを期待する。

### 6. その他特記事項

筑波大学・お茶の水女子大学、慶應義塾大学との連携・交流があり、国内大学との連携・共同研究の拡大進展が見られる。

# 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

プロジェクトリーダー：木部 暢子

## I. プロジェクトの概要

### 1. 目的及び特色

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年のユネスコの危機言語リストには、日本で話されている8つの言語－アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語－が含まれている。特に、アイヌ語は危機の度合いが高く、系統関係も不明で、その解明のためのデータの整備と分析が急がれる。それだけでなく、日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

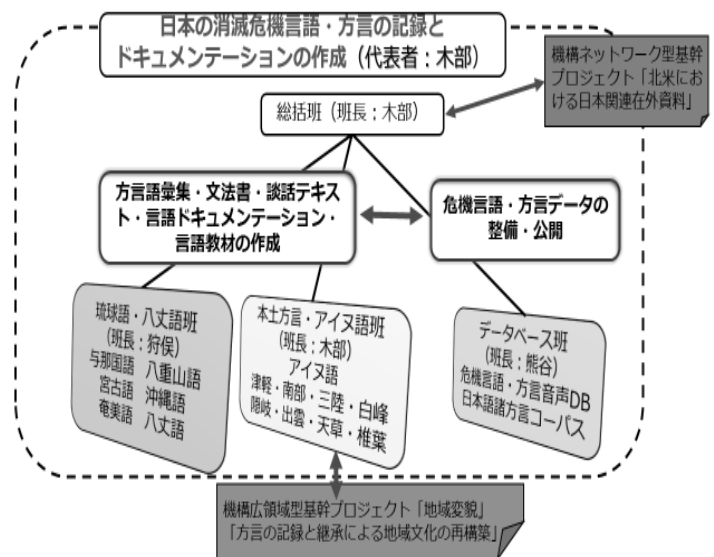
本プロジェクトの実施内容は、以下のとおりである。(1) 語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、「日本語諸方言コーパス」をはじめとする言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールド調査の手引き書の作成。

なお、実施にあたっては、機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と連携する。

### 2. 年次計画（ロードマップ）

本プロジェクトの実施にあたっては、図のような研究班を組織する。

- ・琉球語・八丈語班，アイヌ語班，本土方言班は6年間で、琉球8地点，八丈語，アイヌ語，本土12地点（東北3地点，関東2地点，中部・関西2地点，中国・四国2地点，九州3地点）の語彙集・文法書・談話テキスト，言語ドキュメンテーション，言語教材を作成する。
- ・データベース班は「日本の危機言語・方言の音声データベース」，『アイヌ語口承文芸コーパス』，『日本語諸方言コーパス』，「『日本言語地図』データベース」の整備・公開を行う。
- ・研究成果として，以下のものを目指す。



3年目まで：ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language, 論文集『日本語の格』（仮題）, 『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『宮崎県椎葉村方言語彙集』, 『島根県隠岐の島方言語彙集』, 『日本語諸方言コーパス・モニター版』（47地点のデータによる方言横断コーパス）, 「日本の危機言語・方言の音声データ」（8地点）, 『アイヌ語口承文芸コーパス』。フィールド調査の手引き書。

5年目まで：論文集 Endangered languages and dialects in Japan, 『方言の名詞句』（仮題）, 『方言の動詞句』（仮題）。各地の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材。

#### ◆年次計画

平成 28～29 年度（1～2 年目）

- ①調査：琉球語，八丈語，アイヌ語，本土方言の調査。
- ②研究会：「方言の音韻・音声」「方言語彙集の作成」「名詞句」「動詞句」「グロス」に関する研究会を開催。コーパスに関する合同シンポジウムを開催。
- ③言語資源：『日本語諸方言コーパス』, 「危機言語・方言音声データ」「アイヌ語口承文芸データ」等を整備。
- ④地域との連携：「日本の危機言語・方言サミット」（年1回）, 「方言セミナー」（年1回）を開催。
- ⑤若手育成：大学院生，PD等の調査への参加。フィールド調査の手引き書の作成。
- ⑥成果：ムートン社 Handbook of Japanese Dialects , Handbook of the Ainu Language, 『日本語の格』（仮題）の出版。『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『島根県隠岐の島方言語彙集』の刊行。

平成 30 年度（3 年目）

- ①調査：琉球語，八丈語，アイヌ語，本土方言の調査。
- ②研究会：国際シンポジウム “Endangered languages and dialects in Japan” を開催。
- ③言語資源：『日本語諸方言コーパス・モニター版』（47地点のデータによる方言横断コーパス）の公開。「危機言語・方言音声データ」, 『アイヌ語口承文芸コーパス』, 『日本言語地図』データベースのデータを補充・公開。
- ④地域との連携：「方言セミナー」（1回）を開催。
- ⑤若手育成：大学院生，PD等の調査への参加。フィールド調査の手引き書の試用。
- ⑥成果：『椎葉村方言語彙集』（音声CD付）, 『フィールド調査の手引き書』を出版。各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材の中間公開。

平成 31～32 年度（4～5 年目）

- ①調査：琉球語，八丈語，アイヌ語，本土方言の調査。
- ②研究会：「方言語彙集」, 「文法記述」に関する研究会を開催。コーパス合同シンポジウムを開催。
- ③言語資源：『日本語諸方言コーパス』, 「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸データ」等を整備。
- ④地域との連携：「日本の危機言語・方言サミット」（年1回）, 「方言セミナー」（年1回）を開催。
- ⑤若手育成：大学院生，PD等の調査への参加。
- ⑥成果：英文論文集 Endangered languages and dialects in Japan , 論文集『方言の名詞句』（仮題）, 『方

言の動詞句』(仮題)を出版。『石川県白峰方言語彙集』、『鹿児島県穎娃方言語彙集』、『津軽方言語彙集』、『三陸方言語彙集』を刊行。

平成 33 年度 (6 年目)

- ①調査：次期準備調査を実施。
- ②研究会：研究成果報告会，コーパス合同シンポジウムを開催。
- ③言語資源：『日本語諸方言コーパス』を一般公開。「危機言語・方言音声データ」、『アイヌ語口承文芸コーパス』、『日本言語地図』データベース」のデータを補充・公開。
- ④地域との連携：「日本の危機言語・方言サミット」(年 1 回)、「方言セミナー」(年 1 回)を開催。
- ⑤若手育成：大学院生，PD 等の調査への参加。
- ⑥成果：各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材の公開。

## II. 29 年度活動概要

### 29 年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

- ・日本の消滅危機言語・方言の記録・継承のために，琉球 25 地点，八丈 1 地点，本土 14 地点の計 40 地点で各地点担当者が語彙集・文法書・談話テキスト，言語教材の作成のための調査を行なった。29 年度のテーマは，「指示詞・代名詞」である。共通の調査票をもとに，各地点で「指示詞・代名詞」の調査を行った。
- ・40 地点調査のほか，1 地点の方言を集中的に調査・記録する合同調査を 29 年 8 月に愛知県一宮市木曾川町で実施した。調査には，国語研スタッフ・共同研究員，公募による学生・大学院生，および愛知県立大学学生が参加した。また，宮崎県椎葉村と共同で実施している『椎葉村方言語彙集』の作成のための調査は，今年度で 4 年目を迎え，29 年 9 月と 30 年 3 月に 3 地域の調査を実施した。
- ・40 地点調査と連動させて，「指示詞・代名詞」に関する研究発表会を 29 年 6 月と 30 年 3 月に開催した。また，5 月にハワイ大学マノア校で危機言語に関するワークショップを歴博，ハワイ大学と共同で開催した。
- ・成果の公開に関しては，『島根県隠岐の島方言調査報告書』(27・28 年度に合同調査実施)，『石川県白峰方言調査報告書』(28 年度に合同調査実施)を刊行した。これらを含め，29 年度は論文 10 件，図書・報告書 4 件，データベース等 3 件，発表・講演 39 件の研究成果を公表した(プロジェクトの企画によるもの，および謝辞のあるものに限る)。

#### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・鹿児島県沖永良部方言の基礎語彙データ(音声付)，沖縄県石垣島・鹿児島県徳之島の自然談話データ(音声付)を新規公開，アイヌ語口承文芸コーパスデータ(音声付)を増補公開した。また，『日本言語地図データベース』(『日本言語地図』(LAJ)の原資料カードの画像の電子化とデータベース化)に 5 項目分のデータを追加し公開した。
- ・方言の談話資料を使った『日本語諸方言コーパス』の構築のため，全国 47 地点，24 時間分のデータの整備を行なった。30 年度に方言コーパス・モニター版を公開する予定である。また，このデータを使っ

た研究発表を5件（国際学会1件，国内シンポジウム2件，国内講演2件）行なった。

- ・日本語言語資源の包括的検索システムの構築に向けて、「日常会話コーパス」，「通時コーパス」，「学習者のコミュニケーション」のプロジェクトと合同で，29年9月にコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を開催した。

### 3. 教育に関する計画

- ・愛知県一宮市木曾川町における合同調査を愛知県立大学と連携して実施し，フィールドワークを通して大学支援と学生指導を行った。指導にあたっては，調査前に事前ワークショップを開催し，フィールドワークの概要を理解した上で調査に参加させ，調査後には事後指導を実施し，調査報告書の作成の仕方について指導を行なった。なお，事前ワークショップ，事後指導は，東京外大AA研LingDy3との共同実施である。
- ・また，椎葉村方言調査に九州大学の学生を参加させ，フィールドワークを通して学生指導を行なった。
- ・若手研究者の育成のために，プロジェクトPDフェローや非常勤研究員と共同で調査データや諸方言コーパスデータの分析を行い，ハワイ大ワークショップ，Methods XVI，コーパス合同シンポジウム，JK25で共同発表を行なった。

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・文化庁や北海道教育委員会，北海道大学等と共同で，29年12月3日に北海道大学で「日本の消滅危機言語・方言サミット（北海道大会）」を開催した。サミットは今年が4回目で，各地の状況やアイヌ語の継承活動に関する報告等が行われた。
- ・平成26年から宮崎県椎葉村と共同で『椎葉村方言語彙集』の作成のための調査を行なっている。29年度は椎葉村と正式に交流協定を締結し，方言語彙集を出版するための基盤を整えた。また，30年3月25日に椎葉民俗芸能博物館と共同で市民向け講演会「暮らしをうつす椎葉の方言」（椎葉村向山日添公民館）を開催し，調査の中間報告を行なった。
- ・まつえ市民大学と共同で，自主企画講座「出雲弁は消えてしまうのか」（29年7月29日，市民活動センター）を開催し，出雲方言の特徴と継承について意見交換を行なった。また，鹿児島県沖永良部知名町下平川小学校の方言継承学習を支援し，子どもたちの方言学習の成果発表会（29年11月・下平川小学校，30年2月・国語研）を開催し，これらをとおして，地域の社会人の学び直しに貢献した。
- ・企業との連携として，今年から始まった「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」において，歴博，および博物館や科学館などの展示を手がける丹青社と共同で方言の可搬型展示コンテンツを2台作成した。

### 5. グローバル化に関する計画

- ・海外の大学と連携して危機言語・方言の研究を進めるために，30年2月に危機言語の研究拠点であるハワイ大学と交流協定を締結した。その準備として，29年5月16-18日にハワイ大学マノア校で‘NINJAL/NMJH/UHM Workshop Underdescribed Languages and Histories: Linguists’ and Historians’ Challenges’を開催し，研究紹介と研究発表を行なった（機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と共同開催）。30年8月に開催する国際シンポジウム

‘Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization’の中で、国際交流協定締結記念の講演を行う予定である。

- ・「日本の危機言語・方言」データ公開のページの英訳を作成し、各地基礎語彙の英語検索、沖縄県瀬底方言、首里方言の自然談話の英訳、喜界島方言調査報告書の英訳を公開した。今後、随時、データや研究成果を英語で発信する予定である。

## 6. その他

- ・今年度から、機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」が始まり、国語研として「消滅危機言語・方言の展示を通じた最先端研究の可視化・高度化」プロジェクトを設置し、参加することとなった。その一環として、タイポグラフィのデザイナーである大日本タイポ組合と共同で方言を動物等の形に図案化した「なんでももじもじ 方言版」と、標準語にない方言の音に対して新しい文字を創作する「ひらがなの成り立ち」を作成し、29年11月3日～12月17日に開催されたATELIER MUJI「え、ほん？」展で展示を行なった。また、歴博や丹青社と共同で、可搬型の方言展示コンテンツを2台作成した。30年度に神奈川大学、弘前大学、まつえ市市民活動フェスタ、富山大学で可搬型展示コンテンツを使った展示を開催する予定である。

## III. 項目ごとの状況

### 1. 研究に関する計画

| 自己点検評価  | 計画どおりに実施した |
|---|------------|
| <p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. 日本の消滅危機言語・方言をできるだけ多く記録し、次の世代に言語・方言を継承するために、6年間で各地の語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材を作成する。今年度は、「指示詞・代名詞」をテーマとして、<u>琉球25地点、八丈1地点、本土14地点の計40地点において各地点担当者が共通の調査票をもとに調査を行なった。</u></p> <p>2. 40地点調査の他、毎年、1地点の合同調査を実施している。今年度は<u>愛知県木曾川町方言の調査</u>（29年8月28-30日）を行なった。木曾川町は東部方言と西部方言の接触地域で、言語的に重要な地域である。参加者は国語研スタッフ・共同研究員7人、AA研スタッフ2人、公募による学生・大学院生4人、愛知県立大学の学生9人の計23人で、調査項目は動詞活用等の文法項目、基礎語彙500単語とその例文である。調査報告書は30年度に刊行する。</p> <p>3. 平成26年度から、宮崎県椎葉村と共同で『<u>椎葉村方言語彙集</u>』作成事業を行なっている。今年度は4年目にあたり、29年9月11-15日に椎葉村鹿野遊、大河内で、3月26日に尾八重で調査を実施した。参加者は9月が国語研スタッフ・共同研究員9人、椎葉村学芸員1人、3月が国語研スタッフ・共同研究員5人、椎葉村学芸員1人である。なお、木曾川町方言調査と椎葉村方言調査は、機構広領域連携型プロジェクト「地域文化の再構築」との共同実施である。</p> <p>4. 上記1の調査を計画的に進めるために、今年度のテーマ「指示詞・代名詞」に関する<u>公開研究会「指示詞・代名詞」</u>（29年6月11日、国語研）を開催し、問題点の共有化を図った。発表内容は、招待講演1件（林徹）、発表件数2件（林由華、下地理則）、参加者は54人（うち学生5人）である。また、30年3月11日に第2回研究発表会「<u>指示詞・代名詞（本土諸方言）</u>」を開催した。内容は、青森、山形、福島、</p> |            |

千葉、八丈、島根の各方言の指示詞・代名詞に関する調査報告6件と、基調報告1件である。参加者は56人、そのうち、学生が10人、高校生1人であった。

5. データベース班では、『日本語諸方言コーパス』の構築のためのデータ整備を進めた。また、29年9月8日にコーパス合同シンポジウムを開催した（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）。
6. 海外の大学と連携して危機言語・方言の研究を進めるために、29年5月16-18日にハワイ大学マノア校で危機言語に関するワークショップを開催した（詳細については「5. グローバル化に関する計画」を参照）。
7. 研究成果の公開については、『隠岐の島方言調査報告書』（154頁、27・28年度合同調査実施）、『白峰方言調査報告書』（85頁、28年度合同調査実施）を30年3月に刊行した。
8. 『日本語の格表現』（くろしお出版）、『かたりの中の方言』（勉誠出版）を刊行する予定であったが、今年度から始まった機構事業「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」（詳細については「6. その他」参照）に時間を取られ、実施することができなかった。出版は30年度に持ち越すことになった。
9. 教材・教育プログラムの開発に関しては、東京外国語大学AA研（以下AA研）と共同で木曾川町方言調査のための事前ワークショップを開催し（29年8月26-27日）、言語のフィールドワークに関する教材・教育プログラムの準備を進めた。
10. その他、30年7月2日に「成城学園創立100周年記念・大学院文学研究科創設50周年記念シンポジウム『私たちの知らない<日本語>—琉球・九州・本州の方言と格標識—』」を共同開催した。客員教員の下地理則、共同研究員の坂井美日、新永悠人が発表を、代表者の木部がコメントを行なった。
11. 以上の研究成果を、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文10件、解説・概説1件、図書・報告書4件、コーパス・データベース等3件、発表・講演39件として公開した（プロジェクトの企画によるもの、プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）。「研究成果一覧」参照

## （2）研究実施体制等に関する計画

12. プロジェクトの推進にあたって、危機言語・方言のフィールドワークの経験を有する国内外の研究者69人をプロジェクト共同研究員として組織した（国内66人、海外3人）。
13. 東京外大AA研LingDy3との交流協定に基づき、クロスアポイントメント制度による特任助教1人を雇用し、木曾川町方言調査のための事前ワークショップ（8月26-27日）を共同で開催した。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

|   |            |
|---|------------|
| 自己点検評価  | 計画どおりに実施した |
| <h3>（1）共同利用・共同研究に関する計画</h3> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 危機言語・方言の音声データを増補し公開した。今年度は、<u>鹿児島県沖永良部方言の基礎語彙</u>、<u>沖縄県石垣島、鹿児島県徳之島の自然談話のデータ</u>を新規公開した。また、<u>アイヌ語口承文芸コーパスのデータ（音声付）</u>、『<u>日本語地図データベース</u>』（『日本語地図』（LAJ）の原資料カードの画像の電子化とデータベース化）を3月に追加公開した。</li> <li>2. データベース班では、方言の談話資料を使った『日本語諸方言コーパス』の構築のためのデータ整備を</li> </ol> |            |

進めた。今年度は48地点約24時間分の方言テキスト・標準語テキストの整備、音声との紐付け作業、及びタグ付けを終えた。30年度にモニター版を公開する予定である。

3. 方言コーパスのデータを使った研究発表を以下のとおり行なった。(研究成果一覧参照) ①「諸方言コーパスに見る男性の言葉・女性の言葉」(コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」, 29年9月8日, 国語研講堂) ②「諸方言の文末イントネーション—日本語諸方言コーパスから—」(音声資源活用シンポジウム, 29年9月7日, 国語研講堂) ③Copus based study of Japanese dialects: Regional differences in case marking system' (Methods XVI, 29年8月10日, 国語研) ④「日本語諸方言コーパスに見る富山方言」(富山大学人文学部 第6回言語学・日本語学公開講演会, 29年6月16日) ⑤「ことばが接するところ—富山の方言—」(砺波散村地域研究所例会, 29年6月17日, 砺波散村地域研究所)。
4. 『日本語諸方言コーパス』は現在のところ未公開のため、これを使用した研究は関係者のみが行なっているが、30年度にモニター公開の予定である。近年は発表を聞いた研究者からデータ公開を希望する声が増えている。

## (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

5. 東京外国語大学AA研のプロジェクトLingDy3との連携に関しては、「1. 研究に関する計画13」のとおり。
6. 琉球大学との交流協定に基づき、琉球大学に「沖縄における消滅危機言語・方言の調査・保存に関する研究を」事業委託し、琉球語の記録を行なった。
7. 日本語言語資源の包括的検索システムの構築に向けて、「日常会話コーパス」、「通時コーパス」、「学習者のコミュニケーション」のプロジェクトと合同で、29年9月8日にコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を開催した(国語研講堂)。合同シンポジウムは今年が4回目で、内容は招待講演1件(蒲谷宏)、発表4件(迫田他、木部他、小磯、小木曾)、参加者は、82人(うち学生9人、国外機関所属者1人)であった。
8. プロジェクトの内容を充実させるために、客員教授の岩崎勝一氏(UCLA)にアドバイザーを依頼し、その意見を30年の国際シンポジウムの計画に反映させた。

## 3. 教育に関する計画

|  |             |
|--|-------------|
| 自己点検評価   | 計画を上回って実施した |
| <h3>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</h3> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 国語研と東京外国語大学との協定に基づき、クロスアポイントメント教員として1名(木部)が東京外国語大学連携大学院(国際日本学研究科)においてJapanese Studies I, IIの授業を担当した。</li> <li>2. 愛知県一宮市木曾川町方言調査(29年8月28-30日)を愛知県立大学と共同で行い、愛知県立大学の教育に貢献した。調査には愛知県立大学学生9人が参加した。この9人に対しては、<u>事前ワークショップ</u>(29年8月26-27日)と<u>事後指導</u>(29年11月18日)を実施することにより、フィールドワークの一連の過程について指導した。</li> </ol> |             |

## (2) 人材育成に関する計画

3. 若手研究者を育成するためにプロジェクトPDを1人、非常勤研究員を3人雇用し、プロジェクトの調査データを共同で分析し、ハワイ大ワークショップ (29. 5, 16-18), Methods XVI (29. 8. 10), コーパス合同シンポジウム (29. 9. 8), JK25 (ポスター発表)において共同発表を行なった。
4. また、大学院生3人、学振PD7人をプロジェクト共同研究員として参画させ、研究発表会への参加や研究発表会「指示詞・代名詞」等で発表の機会を与える等の支援を行なった。
5. さらに、上記の若手共同研究員に対して語彙集・文法書・談話テキスト, 言語教材の作成のための調査旅費を援助した。調査データは30年度にデータ集としてまとめる予定である。
- 6 若手研究者にフィールドワークの場を提供するために、木曾川町方言調査に参加する学生・大学院生を全国公募した。5人が応募し、そのうち4人を調査に参加させ、指導を行なった。また、椎葉村方言調査に九州大学の学生を参加させ、フィールドワークを通して指導を行なった。数人が方言で卒業論文を作成することを希望している。

## 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| 自己点検評価   | 計画どおりに実施した |
|--|------------|
| <h3>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</h3> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 平成26年から宮崎県椎葉村と共同で『椎葉村方言語彙集』の作成事業（平成26～30年度）を実施している。<u>今年度は正式に村と交流協定を締結した</u>。この事業について、宮崎日日新聞（2017年8月27日）に「10地区の方言後世に 高齢者に聞き発音記録 村と国語研共同調査」として取り上げられた。</li></ol>   |            |
| <h3>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</h3> <ol style="list-style-type: none"><li>2. 本プロジェクトのメンバーの三井と鐘水が朝日新聞東京版に地域の方言に関する連載記事「東京方言のほお一言」を執筆した。</li><li>3. 方言の継承活動の一環として、29年11月6日に<u>鹿児島県沖永良部島下平川小学校の方言継承学習の発表会を開催した</u>。内容は上川平小学校の生徒が夏休みに行なった、家庭での方言学習の報告である。11月6日の発表会については、南海日日新聞（29年11月8日）に「方言でかるたや紙芝居制作 消滅危機言語の保存・継承で 国語研と下平川小」として取り上げられた。また、下平川小学校の取り組みを他地域の人にも知ってもらうために、30年2月25日に国語研で「ミニ講義：えらぶむに（琉球沖永良部語）ってどんなことば？」を開催した。</li><li>4. 文化庁等と共催で、29年12月3日に北海道大学で「<u>日本の消滅危機言語・方言サミット（北海道大会）</u>」を開催した。サミットは今年が4回目で、各地の状況の報告とアイヌ語の継承活動に関する発表が行われた。来場者は240人で、アンケート結果によると、95%の人が「とても満足」「まあ満足」と答えている。</li><li>5. そのほか、29年7月29日に<u>まつえ市民大学と共同で、まつえ市民大学自主企画講座「出雲弁は消えてしまうのか」</u>を企画・運営した（松江市市民活動センター）。プロジェクトから島根大学の野間が「出雲弁は消えてしまうのかー方言の記録・保存のための取り組みー」を、木部が「方言の展示について」を発表し、友定がコメンテーターを努めた。来場者は67人。アンケート結果では、「とても良かった」「良かった」が87%であった。</li><li>6. 椎葉民俗芸能博物館と共同で椎葉村の市民向け講演会「<u>暮らしをうつす椎葉の方言</u>」を30年3月25日</li></ol> |            |

に椎葉村向山日添公民館で開催した。内容は、これまでの調査の中間報告で、本プロジェクトのメンバー4人が調査の概要、椎葉の方言の特色について発表した。地元の参加者は23人であった。

7. 日本の危機言語・方言のデータのデータを使いやすくするために、「日本の危機言語・方言」データ公開のページをリニューアルした（データ移行の関係で公開は30年5月）。また「2 共同利用・共同研究に関する計画 1」で述べたように、『アイヌ語口承文芸コーパス』、『日本言語地図』データベース」を追加公開した。
8. 企業との連携として、今年から始まった展示プロジェクトにおいて、歴博、および丹青社と共同で可搬型方言展示コンテンツを作成した。（「6 その他」参照）
9. まつえ市民大学自主企画講座、椎葉村の市民向け講演会、鹿児島県沖永良部島下平川小学校の方言継承学習等を通じて、社会人の学び直しに貢献した。

## 5. グローバル化に関する計画

| 自己点検評価   | 計画どおりに実施した |
|--|------------|
| <p><b>(1) 国際的協業に関する計画</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 日本の方言、琉球の方言の調査経験を持つ海外の研究者3人を共同研究員に加えた。そのうち1人が椎葉村方言調査に参加した。</li> <li>2. <u>30年2月にハワイ大学と交流協定を結んだ</u>。ハワイ大学はハワイ語復興の拠点であり、危機言語の研究拠点でもある。また、言語学、日本語研究、東アジア研究、日系移民研究等が盛んであり、危機言語だけでなく、研究所全体として多方面にわたる連携研究が可能である。</li> </ol> <p><b>(2) 国際的発信に関する計画</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>3. 海外の大学と連携して危機言語・方言の研究を進めるために、29年5月16-18日にハワイ大学マノア校で‘<u>NINJAL/NMJH/UHM Workshop Underdescribed Languages and Histories: Linguists’ and Historians’ Challenges</u>’を開催した（機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と共同開催）。本プロジェクトからは、田窪、木部、原田、佐藤、朝日が発表を行なった。参加者は合計68人であった（Faculty 29, Retired faculty 6, PhD student 17, MA student 7, unclassified graduate student 1, visiting graduate student 1, undergraduate 4, staff 1, unknown 2）。30年8月の国際シンポジウム‘Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization’の1セッションで、交流協定締結記念の講演会を行う予定である。</li> <li>4. ムートン社 <i>Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language</i> の編集作業については、新たに始まった展示プロジェクトに時間をとられ、計画どおりに進まなかった。刊行は31年度になる予定である。</li> <li>5. 「日本の危機言語・方言」<u>データ公開のページの英訳を作成した</u>。今年度は、基礎語彙の英語訳、自然談話の英訳、喜界島方言調査報告書の英訳を作成した（データ移行の関係で公開は30年5月）。</li> </ol> |            |

## 6. その他

1. 今年度から、機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」が始まり、国語研として「消滅危機言語・方言の展示を通じた最先端研究の可視化・高度化」プロジェクトが参加することとなった。その一環として、タイポグラフィのデザイナーである大日本タイポ組合と共同で29年11月3日～12月17日に開催されたATELIER MUJI「え、ほん？」展において展示を行なった。内容は、方言を動物等の形に図案化した「なんでももじもじ 方言版」と、標準語にない方言の音に対して新しい文字を創作する「ひらがなの成り立ち」を作成したもの。また、展示期間中の11月19日にワークショップ「君の仮名。」(国語研)を開催、11月28日の対談「え、ほん？ え、ほん？」(ATELIER MUJI)で木部が講演した。
2. 歴博、および丹青社と共同で、可搬型の方言展示コンテンツを2台作成した。30年度に神奈川大学、弘前大学、まつえ市市民活動フェスタ、富山大学で可搬型展示コンテンツを使った展示を開催する予定である。

## 平成29年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施した

評価項目のいずれにおいても、それぞれ十分な成果をあげており、A評価が妥当であると考えられる。特に評価される点は、研究的には『日本語諸方言コーパス』構築のためのデータ整備が進展していることである。次年度の公開に向けて、基盤となる研究作業が継続していることは、重要である。また、最先端研究の可視化を実現する方言の可搬型コンテンツの作成と使用も、これまでにない発想の社会発信となった。さらに、若手研究者の国際的視野を広げる教育活動が評価できる。これは、危機言語研究に実績のあるハワイ大学と締結した国際交流協定の実質化にも寄与した。

今後、課題となる点は、(1)各データベースの構築目的と設計に関する情報を、明示的に公開していくこと、(2)危機言語・方言に関する多様なデータベースの関係性を整理し、位置づけを与えること、(3)英語世界だけではなく、韓国、中国、ロシア等、近隣諸国との研究情報の交換を少しでも進める努力をすること、以上3点にあると思われる。

### 《評価項目》

#### 1. 研究について

当初の計画として、研究水準及び研究の成果等に関して9項目、また、研究実施体制等に関しては2項目、合計11項目の目標が立てられていたが、いずれの項目についても漏れなく計画どおりに実施され、十分な成果をあげていることは評価に値する。ちなみに、本年度出版予定の図書2冊の刊行(『日本語の格表現』『かたりの中の方言』)が次年度への持ち越しとなったが、刊行準備自体は進められていること、刊行遅延の理由が明確であり、他の機構事業の優先的実施の必要性からであったことが明記されているため、大きな問題とはならない。

ただし、研究成果の量については、次年度以降、さらに論文化の努力が望まれる。謝辞記載のあるものだけで解説・概説1件、図書・報告書4件、コーパス・データベース等3件、発表・講演39件とあることについては十分な成果であるといえようが、謝辞付論文数10件については、いささ

か量的に少ない。今後は、関係論文の謝辞の記載について徹底されたい。

## 2. 共同利用・共同研究について

データベースの構築・公開及び講習会・講演会の開催について、また、共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携、プロジェクト合同の研究集会について、どちらも十分な成果をあげている。特記すべき点は、第1に、海外研究者を含むアドバイザーボードの導入について検討が始められ、次年度実施予定の国際シンポジウムの立案に客員教授の意見を反映させたことである。第2に、『日本語諸方言コーパス』が、関係者の研究発表を通して斯界からの反響を得たことがあげられる。本研究業績の学術的意義、社会的意義は大きい。『日本語諸方言コーパス』公開にかかる期待については、エビデンス資料の添付がなくとも容易に納得がいく。

改善点として望まれることは、公開後の『日本語諸方言コーパス』を用いた研究論文の産出量を、プロジェクト員、一般利用者ともに増やすことにある。そのためにも、当該コーパス構築の目的と設計理念について、十分な説明を施すことが重要となろう。

## 3. 教育について

研究過程及び研究成果の教育的普及は十分に行われ、大学院等への教育協力及び人材育成に関して、十分な成果をあげている。東京外国語大学との協定に基づく授業担当のみならず、方言調査の実施に際して、事前事後指導も含め、諸大学の学生に懇切な教育機会を設けた。人文系学問への支援が薄くなり、大学の方言学講座が減少した現在では、フィールドワークの希望があっても実地訓練の機会を持つことは容易ではない。これに対して、国立国語研究所が積極的な努力を見せたことは貴重である。

さらに、若手研究者に研究発表の機会を積極的に与えたことも評価される。特に、今年度は、プロジェクトPD1人、非常勤研究員3人を雇用して研究経験を積ませたばかりではなく、ハワイ大のワークショップ、合同シンポジウム等において発表の場を与えたことは、若手方言研究者に対する国際的視野の涵養という点で、高く評価される。

## 4. 社会との連携及び社会貢献について

地域社会との連携及び研究成果の社会への普及について、十分に成果をあげている。長年の共同研究事業を承けて、本年度は、宮崎県椎葉村と正式に交流協定が締結された。また、新聞の連載記事及びインターネットを通じた日本の危機言語・方言のデータ公開を行っているほか、鹿児島県沖永良部島、北海道、島根県松江、宮崎県椎葉村に出向き、地元への成果の還元を行った。

特筆すべき点の第1は、鹿児島県沖永良部島下平小学校において方言継承学習の発表会を開催したうえで、国立国語研究所において沖永良部島のことばのミニ講義を公開したことである。方言の継承には、地元の人々の意思とともに、言語の多様性についての知識を広め、他地域の取り組みへの理解を促す活動も重要であろう。小学生への啓蒙とともに、相互理解を促進する活動観点を評価したい。第2に、企業と合同で可搬型方言展示コンテンツを開発し、展示に用いたことがあげられる。最先端研究の可視化を助ける試みとして、評価したい。

## 5. グローバル化について

海外の組織との連携及び研究成果の国際的発信において、十分に成果をあげている。海外の研究者3人を共同研究員に迎え、うち1名は、椎葉村方言調査へ参加した。また、ハワイ大学と交流協定を締結した。ハワイ大学は、危機言語研究に実績があり、今後の多方面の研究連携の道を開いた。協定を結んだだけでなく、次のように、実質的な研究交流が促進されている点が、高く評価される。今年度は、ハワイ大学においてワークショップを開催し、プロジェクト研究員の研究発表が行われている。複数のプロジェクト若手研究員にも、国際的成果発信の機会が用意されたことは、すでに「3」で述べた。また、ホームページ「日本の危機言語・方言」データ公開頁の一部に英訳が添えられた。英文のみで構成される頁の必要性については、今後、検討を加えられたい。なお、本年度中に予定されていた、ムートン社からの英語による研究文献の上梓が次年度になったが、編集作業自体は進捗をみているため、問題はない。

## 6. その他特記事項

特になし。

# 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

## I. プロジェクトの概要

### 1. 目的及び特色

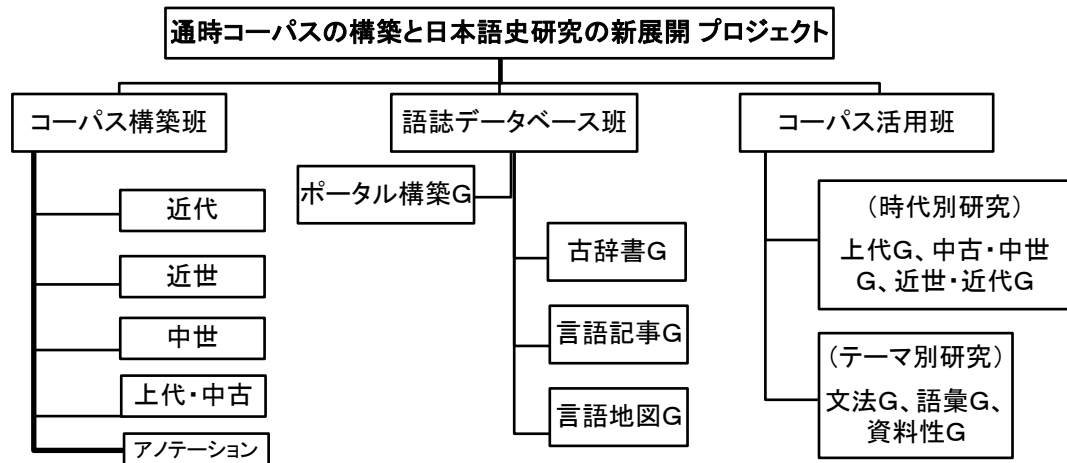
本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリシタン資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

### 2. 年次計画（ロードマップ）

本プロジェクト実施のために下図の研究班・グループを組織する。



「コーパス構築班」は6年間で奈良時代から明治・大正時代までをカバーする通時コーパスを構築する。上代・中古，中世，近世，近代の時代ごとにグループを置き，プロジェクト非常勤研究員を配置してコーパス開発にあたる。また，アノテーション班を置き，追加情報のアノテーションに関する研究を行う。「語誌データベース班」は，コーパスと連携した語誌データベースを開発するために古辞書，言語記事，言語地図のグループを置き，各々専任教員が中心となってデータベースを開発する。またポータル構築のグループを置き，コーパスと語誌データベースの情報を統合した語誌情報ポータルサイトの設計・構築にあたる。「コーパス活用班」は，時代別に上代，中古・中世，近世・近代の研究グループを置き，コーパス構築班と連携しつつ各時代の日本語の研究にあたる。また分野別に，文法，語彙の研究グループを置き各分野の研究にあたるほか，文体・資料性のグループを置き，コーパスに追加する資料に関する研究を行う。このほか，人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築・表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して表記の研究を行う。コーパス活用班にはコーパス構築班のメンバー，PD・大学院生を含む若手研究者を参加させる。

#### ■年次計画

※各年，研究発表会（シンポジウムを含む）・講習会を1回以上開催する。サブコーパスの名称は仮称。  
平成28年度（1年目）

- ・「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」，「明治・大正編Ⅰ雑誌」（太陽・女性雑誌非コアデータ）を公開。
- ・日本語学会でワークショップを開催。

平成29年度（2年目）

- ・「奈良時代編Ⅰ万葉集」，「室町時代編Ⅱキリシタン資料」，「江戸時代編Ⅰ洒落本」を公開。

平成30年度（3年目）

- ・「江戸時代編Ⅱ人情本」，「明治・大正編Ⅱ教科書」を公開。
- ・古辞書データベースの試作版を公開。

#### ●3年目までの成果物

コーパス構築班は『日本語歴史コーパス』を拡張し下記のサブコーパスを公開する。

「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」「室町時代編Ⅱキリシタン資料」「奈良時代編Ⅰ万葉集」「明治・大正編Ⅰ雑誌」「明治・大正編Ⅱ教科書」，「江戸時代編Ⅰ洒落本」「江戸時代編Ⅱ人情本」

語誌データベース班は，語誌データベースの一部として古辞書データベースの試行版を公開する。コーパス活用班は，ワークショップ・公開研究会を2回以上，国際シンポジウムを1回開催し，書籍1冊を刊行する。また，プロジェクト全体として一般向けのNINJALフォーラムを1回開催する。

平成31年度（4年目）

- ・「和歌集編（八代集）」，「奈良時代編Ⅱ宣命」を公開。

平成32年度（5年目）

- ・「明治・大正編Ⅲ文学作品」，「鎌倉時代編Ⅲ軍記」，「江戸時代編Ⅲ近松」を公開。

・語誌情報ポータルサイトの公開。

・研究論文集の出版。

●5年目までの成果物

コーパス構築班は、奈良時代から明治・大正時代までの通時的な研究ができるコーパスとして『日本語歴史コーパス』を拡張し公開する。語誌データベース班は、各種語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルサイトを公開する。コーパス活用班は、国際シンポジウムを1回開催し、研究論文集を1冊以上出版する。

平成33年度（6年目）

・『日本語歴史コーパス』（奈良時代～明治・大正時代）の拡張完了。

・語誌情報ポータルサイトの完成。

## II. 29年度活動概要

### 29年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

『日本語歴史コーパス』を通時コーパスとして拡充するため、キリシタン資料と洒落本のコーパス化のための調査・研究を行った。またコーパスと連携した語誌研究のため、古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースを整備した。さらに、コーパスを活用した研究を行うため、研究グループを設けて計8回の研究発表会を開催した。8月には、各グループ合同の研究会として、「通時コーパス活用班合同研究集会」を開催した。3月にはプロジェクト成果の発表会として「通時コーパス」シンポジウム2018を開催した。以上の研究成果は、プロジェクトに対する謝辞を含むものだけで論文・ブックチャプター等8件、研究発表・講演45件、コーパス・データベース等5件であった。

#### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

『日本語歴史コーパス』に新たに「奈良時代編Ⅰ万葉集」「室町時代編Ⅱキリシタン資料」「江戸時代編Ⅰ洒落本」を追加、公開した。万葉集とキリシタン資料は、漢字かな交じり校訂本文と万葉仮名やローマ字の原文とを対照して利用できるようにし、洒落本は国内研究機関がインターネット上で公開している原本画像データの当該ページとのリンクを整備し、原資料の確認を容易にした。語誌データベースの一部として、古辞書データベースと言語地図データベースの一部を公開した。また、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターとの共同研究により『オックスフォード上代日本語コーパス』を整備し、『オックスフォードNINJAL上代日本語コーパス』として国語研究所のWebサイトから公開した。

#### 3. 教育に関する計画

東京外国語大学・一橋大学との連携協定に基づき、クロスアポイントメント教員、連携教員として各1名が大学院の授業・学生指導を行った。プロジェクトで雇用したプロジェクト非常勤研究員や、共同研究員として参加させた大学院生・若手研究者らに研究発表の機会を与えるとともに国際学会を含む研究発表のための旅費を援助した。大学院生・若手研究者らを対象に『日本語歴史コーパス』中納言講習会を4回開催した。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

(株)小学館・(株)ネットアドバンスと連携して新規公開した『日本語歴史コーパス』「奈良時代編 I 万葉集」のデータについても、検索アプリケーション「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクを行った。また、情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター (CODH) と共同で、八木書店・日本近代文学館と覚書を交わし、近代文献の OCR に関する研究のためのデータ利用環境を整備した。中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会を 2 回開催した。

『日本語歴史コーパス』をコーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて一般公開し、新規の申し込みユーザー数が 3507、検索件数が 112467 あった。

#### 5. グローバル化に関する計画

国際発信のためヨーロッパ日本研究協会 (EAJS2017・リスボン) において通時コーパスのパネル発表 “Construction and utilization of the Corpus of Historical Japanese: Man'yōshū and Christian materials” を開催した。このほか、ハワイ大学マノア校で開催された研究集会、ソウルで開催された韓国日本語学会、モントリオールで開催された Digital Humanities 2018 など研究発表を行った。

また、オックスフォード大学と共同で「NINJAL オックスフォード上代日本語コーパス」を公開するための英語 Web サイトの作成を行ったほか、『日本語歴史コーパス』の新規公開データ (万葉集・キリシタン資料・洒落本) について、英文の Web ページを作成し情報の発信をおこなった。

#### 6. その他

特になし

### III. 項目ごとの状況

#### 1. 研究に関する計画

|   |           |
|---|-----------|
| 自己点検評価  | 計画どおり実施した |
| <b>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</b>   |           |
| 1. コーパスと連携した語誌研究を展開するために、 <u>古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースの整備</u> を行った。 |           |
| 2. <u>通時コーパス活用班の各グループの研究発表会</u> を 8 回開催した (下記参照)。                         |           |
| ・近世・近代グループ研究会, 明治大学, 2017 年 6 月 11 日, 17 名参加                              |           |
| ・国語教育グループ研究会, 国語研, 2017 年 7 月 30 日, 20 名参加                                |           |
| ・中古・中世グループ+語彙グループ合同研究会, 国語研, 2017 年 8 月 8 日, 20 名参加                       |           |
| ・文法グループ研究会, 国語研, 2017 年 8 月 20 日, 9 名参加                                   |           |
| ・近世・近代グループ+文体・資料性グループ合同研究会, 国語研, 2017 年 8 月 20 日, 20 名参加                  |           |
| ・近世・近代グループ研究会, 明治大学, 2017 年 12 月 16 日, 21 名参加                             |           |
| ・国語教育グループ研究会, 国語研, 2017 年 12 月 27 日, 10 名参加                               |           |
| ・国語教育グループ研究会, 群馬大学, 2018 年 3 月 15 日, 21 名参加                               |           |
| 2' 通時コーパス各グループ合同の研究会として、「 <u>通時コーパス活用班合同研究集会</u> 」を開催し、15 件の              |           |

研究発表（うち8件はポスター発表）を行った。60人（うち海外3人、大学院生9人）の参加があった（8月19日・国語研）。

3. プロジェクト全体の研究発表会として2018年3月10日に「通時コーパス」シンポジウム2018を開催し、84人（うち海外2人、大学院生10人）の参加があった。
4. EAJIS（ヨーロッパ日本研究協会）において日本語通時コーパスのパネルセッションを開催した。詳細は、
5. グローバル化に関する計画（2）。
5. 以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて論文・ブックチャプター等8件、発表・講演45件、コーパス・データベース等5件として公開した。（プロジェクトに対する謝辞を含むものに限った。「研究成果一覧」参照）
6. コーパス構築のため、大英図書館においてキリシタン資料の原本調査、ハワイ大学マノア校において大正期日本語教科書の予備調査を行った。
7. 上記の研究成果のうち、共同研究員の村山実和子プロジェクト非常勤研究員が情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会において奨励賞を受賞した。

## （2）研究実施体制等に関する計画

8. 『日本語歴史コーパス』を活用した研究を実施するために、国内外の研究者71人をプロジェクト共同研究員として組織した（国内67人、海外4人）。
9. 『日本語歴史コーパス』の構築を実施するためプロジェクト非常勤研究員4名を雇用し、関連するプロジェクト・科研費による2名とあわせ、合計6名でコーパス構築を行った。
10. 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。
11. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）との共同で、近代語のコーパスの整備と活用に関する研究を行い、深層学習による文字認識のための学習データとして国語研が開発した「太陽コーパス」のテキストと画像を整備して提供した。
12. 万葉集のコーパスを活用した研究を推進するために、英国オックスフォード大学との連携協定のもとで共同研究を推進し、成果を元に『オックスフォード上代日本語コーパス』を改訂し『NINJAL オックスフォード上代日本語コーパス』として公開した。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

|   |             |
|---|-------------|
| 自己点検評価  | 計画を上回って実施した |
| <b>（1）共同利用・共同研究に関する計画</b>   |             |
| 1. 『日本語歴史コーパス』「奈良時代Ⅰ万葉集」（全20巻）を整備し、9月29日に万葉仮名の原文情報を付けて公開した。                                       |             |
| 2. 『日本語歴史コーパス』「室町時代編Ⅱキリシタン資料」を整備し、3月30日にローマ字の原文情報を付けて公開した。  |             |
| 3. 『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅰ洒落本」として30作品を整備し、その大部分の作品を本文画像（国語研蔵本、早稲田大学中央図書館、大阪大学（忍頂寺文庫洒落本データベース）、東京大学国語研究 |             |

室、国文学研究資料館) とリンクしたうえで3月30日に公開した。

4. 『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅱ人情本」, 「明治・大正編Ⅱ教科書」, 「奈良時代編Ⅱ宣命」, 「江戸時代編Ⅲ近松」を整備し、平成30年度以降に公開するための準備を行った。
  - ・語誌データベースのうち「古辞書データベース」の一部データの公開を行った。
  - ・語誌データベースのうち「言語地図データベース」の画像データ187枚の公開を行った。
5. プロジェクト全体の研究発表会「通時コーパス」シンポジウム2018を開催した(詳細は1. 研究に関する計画(1)3, )。
6. 日本語学会2017年度秋季大会シンポジウム「ルールを逸脱した表現の産出と許容」において通時コーパスを活用した研究発表を行った(11月12日)。

### (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

7. コーパス関係のプロジェクトや科研と合同で29年9月8日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を国語研講堂で開催した。招待講演1件(蒲谷宏), 発表4件(迫田, 木部, 小磯, 小木曾), 参加者は, 82人(うち学生9人, 国外機関所属者1人)であった。
8. 万葉集のコーパスを活用した研究を推進するために, 英国オックスフォード大学との連携協定のもとで共同研究を推進した。
9. 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表情情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。
10. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター(CODH)との共同で, 近代語のコーパスの整備と活用に関する研究を実施した。

## 3. 教育に関する計画

|   |             |
|---|-------------|
| 自己点検評価  | 計画を上回って実施した |
| <b>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</b>   |             |
| 1. オックスフォード大学から1名(Maria Telegina氏), 北京外国語大学から1名(徐天成氏)の計2名の特別共同利用研究員を受け入れた。  |             |
| 2. 東京外国語大学との連携協定に基づき, <u>クロスアポイントメント教員として1名が「Japan Studies I コーパス日本語学入門」「Japan Studies II 日本語コーパスの活用」の授業の授業を担当した。</u> |             |
| 3. 一橋大学との連携協定に基づき, 連携教員として1名が演習授業を行った。  |             |
| <b>(2) 人材育成に関する計画</b>   |             |
| 4. 若手研究者を育成するために関連科研費とあわせて <u>非常勤研究員を5人雇用した。</u> (有資格者の応募がなく, 今年度はPDフェローの雇用は行えなかった。)                                  |             |
| 5. <u>大学院生5人・学振PD1名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ共同研究を行った。</u>  |             |
| 6. コーパス活用班研究会, 「通時コーパス」シンポジウムにおいて, 大学院生に発表の機会の提供と旅費の援助を行い, 大学院生による4件の研究発表があった。  |             |
| 7. 共同研究員の <u>大学院生2名, 若手研究者2名に対して国際学会での研究発表の機会を与え, 経費の援助</u>   |             |

を行った (EAJS2017・リスボン=5 (2) 3), Digital Humanities 2017・モントリオール=5 (2) 6)。  
 8. 『日本語歴史コーパス』利用の講習会 (チュートリアル) を国内で4回実施した (国語研・7月30日・24名参加, 東京大学・9月19日・25名参加, 千葉大学・9月25日・13名参加, 群馬大学・3月15日・20名参加)。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

|  |            |
|--|------------|
| 自己点検評価   | 計画どおりに実施した |
| <p><b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b></p> <p>1. (株)小学館・(株)ネットアドバンスと連携して新規公開した『日本語歴史コーパス』「奈良時代編 I 万葉集」のデータについても, 検索アプリケーション「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクを行った。</p> <p>2. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター (CODH) との共同で, 八木書店・日本近代文学館と覚書を交わし, 近代文献の OCR に関する研究のためのデータ利用環境を整備した。</p> <p><b>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</b></p> <p>3. 『日本語歴史コーパス』に「万葉集」「キリシタン資料」「洒落本」を追加して拡充し, コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。新規の申し込みユーザー数は 3507, 検索性数は 112467 であった。</p> <p>4. 歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備をコーパス開発センターと協力して行い, インターネット上で無償にて公開した。</p> <p>5. 中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会を2回開催した (7月30日・国語研・24名参加 (うち一般参加 14名), 3月15日・群馬大学・20名参加 (うち一般参加 20名))。</p> |            |

#### 5. グローバル化に関する計画

|   |             |
|---|-------------|
| 自己点検評価  | 計画を上回って実施した |
| <p><b>(1) 国際的協業に関する計画</b></p> <p>1. オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で万葉集のコーパス構築, 統語情報アノテーションに関する研究を行った。さらに, 『オックスフォード上代日本語コーパス』を改訂して新たに『オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス』 (ONCOJ) として国語研究所で公開した (3月30日)。</p> <p>2. 海外の研究者 4 人を共同研究員に加え, 『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を推進した。このうち, シカゴ大学の Hoyt Long 准教授を外来研究員として迎え, 近代語の語彙研究について共同研究を行った (11月13~17日滞在)。</p> <p><b>(2) 国際的発信に関する計画</b></p> <p>3. ヨーロッパ日本研究協会 (EAJS2017) において通時コーパスのパネルセッション” Construction and utilization of the Corpus of Historical Japanese: Man'yōshū and Christian materials” を開催し, プロジェクト成果を発信した (8月28日, リスボン)。</p> |             |

4. ハワイ大学マノア校 (UHM) で NINJAL/NMJH/UHM Workshop Underdescribed Languages and Histories: Linguists' and Historians' Challenges に参加し『日本語歴史コーパス』の紹介を行った (5月11日, ホノルル)。
5. 韓国日本語学会の特別企画として『日本語歴史コーパス』『現代日本語書き言葉コーパス』利用の講習会 を行った (9月23日, ソウル)。
6. Digital Humanities 2017 に若手共同研究員を派遣し, 通時コーパスの成果発表を行った。(8月9日, モントリオール)。
7. 『日本語歴史コーパス』の新規公開データ (万葉集・キリシタン資料・洒落本) について, 英文 Web ページを作成し情報の発信をおこなった。
8. 『オックスフォード上代日本語コーパス』を改訂し『NINJAL オックスフォード上代日本語コーパス』として公開するための英語 (および日本語) Web サイトの作成を行った。

## 6. その他

特になし。

## 平成29年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施した

個別の項目で見れば, B判定に当たるものがありはするものの, 総合的に見れば, 計画を上回った実施の功を挙げていると評価できる。特に, 1「研究」, 5「グローバル化」に関して, 目覚ましい成果を挙げていると判断される。3「教育」, 4「社会との連携及び社会貢献」に関しては, 評価そのものはB判定となるものの, 計画との比較から見ると若干上回った面が観察される。また, 2「共同利用・共同研究」の面でも, 海外の大学との連携協定を見ることができ, 好印象である。通時コーパスは, やはり, 利用されてこそ, さらなる価値を発揮するものであり, また, そこに日本語史研究の新展開も生まれるものであるから, 実際の研究のケーススタディなども (簡単な見本でよいので) 付されたチュートリアルな講習会をさかんに行ながら, 海外への発信もさらに行ってほしい。

### 《評価項目》

#### 1. 研究について

29年度の都合11件の当初計画に照らして, 計画以上の実施を見ていると判断される。この項目の自己評価Bは, やや辛めではないか。すなわち, 当初計画の5「コーパス合同シンポジウム」, 6「書き言葉コーパスを活用した教育プログラム」については記述がないので, 実施はなかったものと判断されるところは, 評価から差し引かれるべきかとも思われるものの, 1「古辞書データベース試作版の構築準備」の当初計画に加えて「言語地図データベース」「言語記事データベース」の整備を行っている点, 2「コーパスを活用した日本語史研究の研究発表会」を5回以上行うという当初計画に対して8回の開催を見ている点, 3「通時コーパスシンポジウム」に海外からの参加

者3人を組む84人の参加を見ている点、7「日本語歴史コーパスを活用した研究実施のための研究員組織」当初の50人以上という計画に対して71人の組織が達成できている点等、それを補って余りある。また、村山実和子共同研究員が情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会で奨励賞を得ていることは特筆に値し、研究の水準も外的な高い評価に叶うものであることを証する。ただし、研究成果として、45件の発表・講演を数えるのに対して論文等は8本であるというところは、なお一層の論文化への努力が望まれる。

## 2. 共同利用・共同研究について

29年度の都合9件の当初計画に照らして、計画通りの実施を見ていると判断される。自己評価はAとなっていて、どのような点で計画以上だったのかという点が主張されているが、それはむしろ、1「研究について」で主張されるべき点であって（上記1の評価参照）、2「共同利用・共同研究」には必ずしも当たらないのではないかと考えられる。また、当初計画の5「日本語歴史コーパス利用の講習会」に対して、実施の5のシンポジウムは、性格が異なるものなのではないか。ただし、それ以外のところでは、当初計画通りに進んでいたことが確認できる。なかでも、英国オックスフォード大学との連携協定は、海外との共同研究という点で、5「グローバル化」とも関わって、特筆に値する。コーパスは、構築した後でどれだけ利用してもらえるかがカギになるものであるから、シンポジウムのような研究者・大学院生向けのものだけでなく、場合によっては学部学生にまで裾野を広げた、利用のための啓蒙的な講習会をなるべく多く広く開催することを考えてはどうか。また、それはWebを利用したもの（動画を含め）であってもよいのではないかと考えられる。

## 3. 教育について

29年度の都合6件の当初計画に照らして、やや計画を上回る実施を見ていると判断される。ただし、A判定とまではいかないとと思われるので、自己評価Bは妥当と考えられる。オックスフォード大学、北京外国語大学のような海外の教育研究機関との連携も評価に値し、東京外国語大学ならびに一橋大学における授業担当も、教育の実を挙げていると判断できる。さらに、若手研究者・大学院生への育成事業も順当なものと評価できる。PDフェローの雇用については、そもそも有資格者の応募がなかったためであるから、雇用が叶わなかったとしても問題はない。とはいえ、そのような公募をしていることをさらに広く報せる方途も、今後検討の余地があるのではないかと考えられる。

## 4. 社会との連携及び社会貢献について

29年度の都合6件の当初計画に照らして、やや計画を上回る実施を見た判定される。自己評価Bは妥当と考えられる。とはいえ、日本語歴史コーパスをWeb上で無償公開しているということは、貴重かつ極めて意義深い、計画以上の貢献と効果なのであって、当初計画通りに行えていることそのものが、高い評価に値する。また、4「歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書」は、それ自体、高度な言語分析の結晶とも言うべきものであって、それが無償で公開されることの社会貢献上の意義は、一般に科学的成果が広く社会に伝えられる姿を示しているという観点からも、計り知れない。また、中学校・高等学校の国語科教員向け及び教職課程の大学院生向けに、講習会

を開催していることも、社会貢献という点で意義深い。なお、一点、「一般参加」という意味が分かりづらい。教員以外の一般の人ということか、学生院生以外ということか。

## 5. グローバル化について

29年度の都合5件の当初計画に照らして、はるかに計画を上回る実施を見たと判定できる。自己評価のAは妥当と言える。たとえば、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で万葉集のコーパス構築、統語情報アノテーションに関する研究を行ったうえに、『オックスフォード上代日本語コーパス』を改訂して新たに『オックスフォードNINJAL上代日本語コーパス』(ONCOJ)として国語研究所で公開したこと、ヨーロッパ日本研究協会(EAJS2017)において通時コーパスのパネルセッションを開催したこと、ハワイ大学マノア校(UHM)で『日本語歴史コーパス』の紹介を行ったことなど、Digital Humanities 2017に若手共同研究員を派遣し、通時コーパスの成果発表を行ったことなど、よくグローバル化の実を挙げることに貢献していると評価できる。また、『日本語歴史コーパス』の新規公開データ(万葉集・キリシタン資料・洒落本)について、英文Webページを作成し情報の発信を行ったことも、Web上のグローバルな情報発信の一環と認められる。

## 6. その他特記事項

特になし。

# 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

## I. プロジェクトの概要

### 1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、(1) 多様な日常場面の会話 200 時間を収めた規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、(2) 語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性や仕組みを研究するレジスター班、(3) 会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4) 語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の四つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が 21 世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話や発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、50 年前の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉のデータや BCCWJ の小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、大規模日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

### 2. 年次計画 (ロードマップ)

|       |           |                                |
|-------|-----------|--------------------------------|
| 28 年度 | 会話コーパス整備  | 会話収録・データ整備の開始                  |
|       | その他のデータ整備 | アノテーション仕様策定・自動付与システム整備         |
|       |           | [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成開始        |
|       |           | [国会会議録検索システム] 構築開始             |
|       |           | [BCCWJ 発話者情報] アノテーション仕様策定・付与開始 |
|       |           | [名大会話コーパス] 形態論情報付与             |
|       | 研究        | 班ごとに研究会合を持ち研究を始動               |
|       | 成果発表      | シンポジウム 1 回、班合同研究発表会 1 回開催      |

|       |  |  |
|-------|--|--|
|       | 若手育成<br>成果物公開  | コーパス利用講習会 2 回開催<br><u>『名大会話コーパス』 一般公開 (形態論情報付きテキスト検索版)</u>   |
| 29 年度 | 会話コーパス整備<br><br>その他のデータ整備<br><br>研究<br>成果発表<br>若手育成<br>成果物公開     | 会話収録・データ整備の継続<br>コアデータ・アノテーション人手修正開始<br>プロジェクト内部のデータ公開<br>[昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成継続<br>[BCCWJ 発話者情報] アノテーション継続<br>既存データを中心とする予備研究を推進<br>シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催<br>コーパス講習会 2 回開催<br><u>『国会会議録検索システム』 一般公開</u>   |
| 30 年度 | 会話コーパス整備<br><br>その他のデータ整備<br><br>研究<br>成果発表<br><br>若手育成<br>成果物公開 | 会話収録・データ整備の継続<br>コアデータ・アノテーション人手修正継続<br>[昭和話し言葉データ] アノテーション開始, モニター公開準備<br>[BCCWJ 発話者情報] 検索システム整備開始<br>既存データにプロジェクト整備データを加えて研究を展開<br>シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回<br>フォーラム (話し言葉の経年変化) 1 回開催<br>コーパス講習会 2 回開催<br><u>『日本語日常会話コーパス』 50 時間モニター公開</u><br><u>『昭和話し言葉コーパス』 25 時間モニター公開</u> |
| 31 年度 | 会話コーパス整備<br><br>その他のデータ整備<br>研究<br>成果発表<br>若手育成<br>成果物公開         | 会話収録・データ整備の継続<br>コアデータ・アノテーション人手修正継続<br>『昭和話し言葉コーパス』アノテーション継続<br>既存データにモニター公開データを加えて本研究を開始・コーパス評価<br>シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催<br>コーパス講習会 2 回開催<br><u>『BCCWJ 発話者情報』 一般公開 (中納言版)</u>   |
| 32 年度 | 会話コーパス整備<br><br>研究<br>成果発表<br>若手育成<br>成果物公開                      | 会話収録・データ整備の継続<br>コアデータ・アノテーション人手修正継続<br>既存データにモニター公開データを加えて本研究を推進・コーパス評価<br>シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催<br>コーパス講習会 2 回開催<br><u>『昭和話し言葉コーパス』 本公開</u>   |

|      |                                 |   |
|------|---------------------------------|---|
| 33年度 | 会話コーパス整備<br>研究<br>成果発表<br>成果物公開 | 公開準備（データ統合・検証，個人情報処理など）<br>研究成果のとりまとめ<br>シンポジウム1回開催<br>『日本語日常会話コーパス』本公開 |
|------|---------------------------------|---|

## II. 29年度活動概要

### 29年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

- ・ 築中の『日本語日常会話コーパス』のうち20時間のデータを，10月に本プロジェクトおよび領域指定型プロジェクト「創発参与」のメンバーに公開し，各班で整備を進めた他のコーパスと合わせ，研究を推進した。その成果の報告会としてシンポジウム『日常会話コーパス』IIIを30年3月19日に国語研で開催した。
- ・ 世界における通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論するために，29年9月4日に国際シンポジウム‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’を国語研で開催した。
- ・ コーパス関係のプロジェクトや科研と合同で，29年9月8日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を国語研で，30年3月18日にシンポジウム「ことば・認知・インタラクション」6を東京工科大で開催し，連携を深めた。
- ・ 以上の研究成果は，プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて論文2件，報告書・図書1冊，ブックチャプター1件，発表・講演30件，データベース等6件として公開した。

#### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・ 『日本語日常会話コーパス』のデータとして490時間の会話の収録，94時間の転記1次作業，41時間の形態論情報付与を実施し，公開のための処理を終えた50時間のデータを30年3月にプロジェクトメンバーに限定公開した。
- ・ 『昭和話し言葉コーパス』については，独話25時間について予定通り音声と同期付けた転記テキストの作成を終了し，29年6月にプロジェクトメンバーに限定公開した。
- ・ 『BCCWJ』のうち2419サンプル（図書館サブコーパスの小説の76%に相当）の会話文への話者情報の付与を終了し，29年12月にプロジェクトメンバーに限定公開した。
- ・ 『国会会議録』ひまわり版に対し話者の生年情報を追加，『名大会話コーパス』中納言版に会話メタ情報を追加した上で，それぞれ29年6月，30年3月に再公開した。
- ・ 『女性のことば・男性のことば-職場編-』（ひつじ書房）収録テキストを形態素解析し，出版社および開発者の許諾を得た上で，コーパス開発センターと共同して中納言で一般公開する準備を進めた。
- ・ 『日本語日常会話コーパス』設計のために実施した会話行動調査の生データを整理し，30年3月にプロジェクトのホームページで公開した。

#### 3. 教育に関する計画

- ・ コーパス言語学分野の人材を育成するために，若手研究者や大学院生を主対象に，第3回コーパス利用講習会（ひまわり・中納言の2コース）を2017年9月7日に，第4回コーパス利用講習会（同2コース）

を2018年3月19日に開催し、それぞれ23名、32名が参加した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのホームページで公開した。

- ・若手研究者を主対象に、NINJAL チュートリアル「コーパスに基づく話し言葉の研究」を、29年11月30日と30年3月8日に開催し、それぞれ、21名、24名が参加した。
- ・一橋大学との協定に基づき、2名の連携教授が、コーパスを活用した計量的研究の演習を担当した。
- ・共同研究員が指導する大学生・大学院生3名に『日本語日常会話コーパス』の一部を提供し、うち1名がコーパスを活用した研究で卒業論文を執筆した。また3名がシンポジウム『日常会話コーパス』III（30年3月19日）で発表した。

#### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・プロジェクトで整備・公開した『名大会話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に公開した。『名大会話コーパス』は会話研究・日本語教育研究において広く利用されており、今年度、中納言版は485件、ひまわりパッケージ版は266件の新規利用があった。また『国会会議録』は経年変化・レジスター研究において広く利用されており、ひまわりパッケージ版について今年度は340件の新規利用があった。
- ・「通時コーパス」プロジェクトと共同し、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラムを企画し、30年11月4日の開催に向けて準備を進めた。

#### 5. グローバル化に関する計画

- ・29年9月4日に国際シンポジウム‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’を国語研講堂で開催し、英語、フィンランド語、イタリア語、フランス語、日本語を対象とする通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論した。
- ・30年5月に開催される言語資源に関する国際会議LREC（11<sup>th</sup> Language Resources and Evaluation Conference）でワークショップ‘Language and Body in Real Life’を提案し、採択された。今年度は30年5月7日の開催に向けて準備を進めた。
- ・海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションを通して、コーパスについて評価してもらった。

#### 6. その他

特になし。

### Ⅲ. 項目ごとの状況

#### 1. 研究に関する計画

|  |            |
|--|------------|
| 自己点検評価   | 計画どおりに実施した |
| <b>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</b>  |            |
| 1. 構築中の『日本語日常会話コーパス』200時間のうち、公開のための処理（個人情報等のマスキングや映像のボカシ処理など）まで終了した20時間分の会話データを、10月にプロジェクトの研究班および領域指定型プロジェクト「会話における創発的参与構造の解明と類型化」（以下「創発参与」）のメンバ |            |

一に限定して公開し、各班で整備を進めた他のコーパスと合わせ、研究を推進した。その成果の報告会として、「創発参与」プロジェクトと合同でシンポジウム『日常会話コーパス』IIIを30年3月19日に国語研講堂で開催した。口頭発表4件、ポスター発表23件、デモンストレーション1件、参加者は144名（うち学生32名）であった。

2. 経年変化班が主導し、29年9月4日に国際シンポジウム ‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’を国語研講堂で開催した。経年変化班班長の丸山のほか4名（Bas Aarts, Marja-Liisa Helasvuo, Alessandro Panunzi, Marie Skrovec）が登壇し、英語、フィンランド語、イタリア語、フランス語、日本語を対象とする通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論した。参加者は49名（うち学生8名）であった。
3. 29年9月8日にコーパス合同シンポジウムを開催した（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）。また会話コーパスに関連する科研プロジェクトと合同で、30年3月18日にシンポジウム「ことば・認知・インタラクション」6を東京工科大学蒲田キャンパスにて開催した。口頭発表4件、パネル討論1件、参加者は80名（うち学生15名）であった。
4. 各班の研究を実質的に推進するため、各班年2回計6回の研究会合を開催した（レジスター班：29年7月20日・30年1月18日、相互行為班：29年8月9日・30年2月2-4日、経年変化班：29年8月10日、29年12月16日）。
5. 自然な日常会話を収録するため、研究者は収録の場は一切介在せず、一般の人に映像・音声の収録や承諾書等の収集を依頼するという、新しい方法を採用した。この収録に向け、調査協力者向けの資料として、各種マニュアルや、調査の目的・意義などを記したビラ・ホームページを作成した。蓄積した収録法の知見を関連分野で共有するため、報告書『日常会話の収録法』としてとりまとめ、3月にプロジェクトのホームページで公開した。
6. 以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて論文2件、報告書・図書1冊、ブックチャプター1件、発表・講演30件、データベース等6件として公開した。（「研究成果一覧」参照）
7. 『日本語日常会話コーパス』は、映像を含め多様な日常場面の会話を収録・公開するというものであり、世界的に見て新しい取り組みである。そのため、データの収録法やデータ公開に向けた法的・倫理的観点からの対応方針に関する知見の共有が強く求められている。

## (2) 研究実施体制等に関する計画

8. コーパスに基づく話し言葉研究を推進するために、国内外の研究者39名をプロジェクト共同研究員として組織した。今年度は、日本語学（音韻・文体・談話）、日本語教育、社会学、自然言語処理の分野の研究者の拡充を図った。

## 2. 共同利用・共同研究に関する計画

|  |            |
|--|------------|
| 自己点検評価   | 計画どおりに実施した |
| <b>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</b>   |            |
| 1. 『日本語日常会話コーパス』については次の通り整備し、30年度のモニター公開（50時間）および33年度の本公開（200時間）に向けて準備を進めた。モニター公開データ50時間の会話映像について、人工知能学会 SLUD 研究会およびシンポジウム「日常会話コーパス」IIIでデモンストレーションを行った。<br>(a)収録：協力者40名のうち、今年度は <u>15名</u> （合計33名、約490時間）の収録が終了した。この中か |            |

ら、会話行動調査などを参考に会話の種類・場面・話者のバランスを考慮して、コーパスに格納するデータの選定を進めた。現時点でのコーパス格納データのバランスを検証し、学会で報告した。

(b)転記：コーパス 200 時間のうち、転記 1 次作業を 94 時間分、最終公開作業を 50 時間分、実施した。

(c)アノテーション：形態論（短単位）情報は、41 時間のデータについて 1 次人手修正作業を終えた。

談話行為情報は、IS024617-2 の基準を日常会話用に整備し、マニュアルを作成した上でラベリングの試行を進めた。韻律情報は、X-JToBI の簡略化基準を整備し、マニュアルを作成した上でラベリングの試行を進めた。照応・共参照などその他のアノテーションについても、実現の方策などについて検討した。公開のための処理を終えた 50 時間のデータ（音声・映像・転記テキスト・形態論情報・メタ情報）を 3 月にプロジェクトメンバーに限定して公開した（10 月に先行して共有した 20 時間を含む）。これにより日常会話を対象とする各班の研究を本格的に進めることが可能となった。

2. 『昭和話し言葉コーパス』については、独話 25 時間について、予定通り音声と同期付けた転記テキストの作成を終了した。また講演や話者などに関するメタ情報も整理した。これらの転記テキスト・音声・メタ情報を、6 月にプロジェクトメンバーに限定して公開した。このデータの整備により、平成の講演を多数含む『日本語話し言葉コーパス』と対照させることで、来年度から講演の経年変化を本格的に調査することが可能となった。
3. BCCWJ のうち 2419 サンプル（BCCWJ の図書館サブコーパス中の小説の 76%に相当）に対し、会話文の発話者情報（話者名・性別・年代）の付与を終了し、12 月にプロジェクトメンバーに限定して公開した。これにより、書かれた話し言葉と実際の話し言葉の違いを本格的に調査することが可能となった。
4. 28 年度に一般公開した『国会会議録』ひまわり版に対し、話者の生年情報を追加した上で、29 年 6 月に再公開した。
5. 28 年度に一般公開した『名大会話コーパス』中納言版に対し、会話メタ情報を追加した上で、コーパス開発センターと共同して 30 年 3 月に再公開した。
6. 28 年度に整備した『女性のことば・男性のことば-職場編-』（ひつじ書房）収録テキストを形態素解析し、出版社および開発者の許諾を得た上で、コーパス開発センターと共同して中納言で一般公開する準備を進めた。
7. 『日本語日常会話コーパス』設計のために実施した会話行動調査の生データを整理し、30 年 3 月にプロジェクトのホームページで公開した。
8. プロジェクトで整備公開したコーパスを対象とする講習会（中納言講習会・ひまわり講習会の 2 コース）を、29 年 9 月 7 日と 2018 年 3 月 19 日に開催し、それぞれ、23 名、32 名が参加した。
9. 『国会会議録』は経年変化・レジスター研究において広く利用されており、ひまわりパッケージ版について今年度は 340 件の新規利用があった（3 月 31 日現在）。
10. 『名大会話コーパス』は会話研究・日本語教育研究において広く利用されており、ひまわりパッケージ版について、今年度は 266 件の新規利用があった（3 月 31 日現在）。

## （2）共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

コーパス関係のプロジェクトや科研との連携を深めるため、合同で 29 年 9 月 8 日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を国語研講堂で開催した。招待講演 1 件（蒲谷宏）、発表 4 件（迫田、木部、小磯、小木曾）、参加者は 82 名（うち学生 9 名、国外機関所属者 1 名）であった。

### 3. 教育に関する計画

| 自己点検評価   | 計画どおりに実施した |
|--|------------|
| <p><b>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</b></p> <p>1. 一橋大学との協定に基づき、2名の連携教授が、コーパスを活用した計量的研究の演習を担当した。</p>   |            |
| <p><b>(2) 人材育成に関する計画</b></p> <p>2. 若手研究者を育成するために、非常勤研究員（PD フェロー）を1名、プロジェクト非常勤研究員を5名雇用した。</p> <p>3. 大学院生3名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。</p> <p>4. 若手の非常勤研究員および大学院生の共同研究員に対し、シンポジウム「日常会話コーパス」III（30年3月19日）で発表の機会を提供した。</p> <p>5. 若手研究者を主対象に、コーパス利用に関する講習会を9月7日と3月19日に開催し、それぞれ、23名、32名が参加した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのホームページで公開した。</p> <p>6. 若手研究者を主対象に、NINJAL チュートリアル「コーパスに基づく話し言葉の研究」を、29年11月30日と30年3月8日に開催し、それぞれ、21名、24名が参加した。</p> <p>7. 人工知能学会第8回対話システムシンポジウムにて、日常会話コーパスの設計・構築・公開法に関するチュートリアル（招待）を行った。</p> <p>8. 共同研究員が指導する大学生・大学院生3名に『日常会話コーパス』の一部を提供し、うち1名がコーパスを活用した研究で卒業論文を執筆した。また3名がシンポジウム「日常会話コーパス」III（30年3月19日）で発表した。</p> |            |

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| 自己点検評価  | 計画どおりに実施した |
|---|------------|
| <p><b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b></p> <p>特になし。</p>   |            |
| <p><b>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</b></p> <p>1. プロジェクトで整備・公開した『名大会話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。（共同利用に関する計画参照）</p> <p>・「通時コーパス」プロジェクトと共同し、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラムを企画し、30年11月4日の開催に向けて準備を進めた。</p> |            |

### 5. グローバル化に関する計画

| 自己点検評価   | 計画どおりに実施した |
|--|------------|
| <p><b>(1) 国際的協業に関する計画</b></p> <p>1. 海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、日常会話コーパスを用いたデータセッションを通して、コーパスについて評価してもらった。</p> |            |

## (2) 国際的発信に関する計画

2. 世界における通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論するために、29年9月4日に国際シンポジウム‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’を国語研講堂で開催した。
3. 30年5月に開催される言語資源に関する国際会議 LREC (11<sup>th</sup> Language Resources and Evaluation Conference) でワークショップ‘Language and Body in Real Life’を提案し、採択された。今年度は30年5月7日の開催に向けて準備を進めた。

## 6. その他

|        |            |
|--------|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| 特になし。  |            |

## 平成29年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施した

研究については、4班合同の公開研究発表会、国際シンポジウム、報告書のWeb公開等を進め、論文等でその成果を発信しており、計画どおりに実施されている。一般の人がデータ収録や承諾書の収集をすることによって自然な日常会話を収録する、という新しい試みは高く評価できる。法的・倫理的な知見の共有にも期待する。

共同利用・共同研究については、『日本語日常会話コーパス』、『昭和話し言葉コーパス』の作成を進め、既存のコーパスの拡張と公開、会話行動調査の生データの公開、中納言講習会・ひまわり講習会の開催など、順調に計画が実行されている。すでに公開したコーパスが広く研究に役立っていることもわかる。

教育については、一橋大学における教育への協力、若手研究者の雇用と学生のプロジェクトへの参画、彼らへの発表の機会の提供、チュートリアル等の開催、コーパスの提供などを計画通り行なっている。

社会との連携及び社会貢献については、2つのコーパスをインターネットで一般公開した。また、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラムを企画し、準備中である。

グローバル化については、海外在住の研究者によるコーパスの評価、国際シンポジウムによる通時音声コーパスの議論、国際会議でのワークショップの提案を行なった。

以上すべての項目にわたってプロジェクトが計画通り実施されていると認められる。特に数多く利用されているコーパスに関してその利用状況を調査し利用者のニーズを分析すれば、将来のコーパスの作成に反映させることができるのではないかと思われる。

### 《評価項目》

#### 1. 研究について

4班合同の公開研究発表会、国際シンポジウム、報告書のWeb公開等を予定通り進め、論文、書籍、

学会発表等でその成果を発信している。シンポジウム等は多数の参加者を得て行なわれている。

研究者が現場に介在せず一般の人に映像・音声の収録や承諾書等の収集を依頼することによって自然な日常会話を収録する、という新しい手法を試みており、翌年度以降その評価がなされることを期待する。データの収録方法や公開に関する法的・倫理的観点からの課題の整理と知見の共有にも期待したい。

## 2. 共同利用・共同研究について

『日本語日常会話コーパス』については、収録、転記、アノテーションおよびその結果の限定公開がなされている。『昭和話し言葉コーパス』についても、転記と限定公開が予定通り行なわれた。BCCWJ、『国会会議録』ひまわり版、『名大会話コーパス』中納言版、『女性のことば・男性のことば-職場編-』等の拡張作業やその成果の公開、会話行動調査の生データの公開、中納言講習会・ひまわり講習会の開催など、順調に計画が実行されている。また、『国会会議録』と『名大会話コーパス』が特に多く利用され、研究に役立っていることがわかる。これらは新規利用が数百件とのことなので、その利用状況を分析して利用者のニーズを把握する必要があるように思われる。外部機関との合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」も予定通り開かれた。

## 3. 教育について

一橋大学における教育への協力、非常勤研究員とプロジェクト非常勤研究員の雇用、大学院生のプロジェクトへの参画、それら若手研究者への学術発表の機会の提供、若手研究者向けの講習会とチュートリアル開催、学会でのチュートリアル、学生の研究のためのコーパスの提供などを通じて、計画通り若手研究者の育成に務めている。

## 4. 社会との連携及び社会貢献について

『名大会話コーパス』と『国会会議録』をインターネットで一般に発信した。また、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラムを企画し、平成30年11月4日の開催に向けて準備を進めている。

## 5. グローバル化について

海外在住の研究者に、共同研究員として、日常会話コーパスを用いたデータセッションを通して、コーパスを評価してもらった。また、国際シンポジウム‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’を国語研講堂で開催し、世界における通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論した。さらに、平成30年5月に開催される言語資源に関する国際会議 LREC (11<sup>th</sup> Language Resources and Evaluation Conference) でワークショップ‘Language and Body in Real Life’を提案して採択された。

## 6. その他特記事項

特になし。

# 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

プロジェクトリーダー：石黒 圭

## I. プロジェクトの概要

### 1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、自然な日常会話をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

### 2. 年次計画（ロードマップ）

【平成 28（2016）年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築に着手する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築に着手する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築に着手する。

- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成に着手する。
- ・ウェブ版読解教材の開発に着手する。

#### 【平成 29 (2017) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、その一部を試験公開する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続する。ウェブ版聴解教材の開発に着手する。
- ・NINJAL 国際シンポジウム (ICPLJ) を開催する。

#### 【平成 30 (2018) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、サンプルを試験公開する。ウェブ版聴解教材の開発を継続する。
- ・学習者の会話能力に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の読解過程に関する教師指導書を刊行する。

#### 【平成 31 (2019) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。ウェブ版聴解教材のサンプルを試験公開する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。

#### 【平成 32 (2020) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。
- ・読解教材開発に関する研究書を刊行する。
- ・日本語学習者のコミュニケーションに関する国際シンポジウムを開催する。

### 【平成 33 (2021) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスを本格公開する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスを本格公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスを本格公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典を本格公開する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材を本格公開する。
- ・学習者の日本語習得過程に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の聴解過程に関する論文集を刊行する。

## II. 29年度活動概要

### 29年度 成果の概要

#### 1. 研究に関する計画

- ・2017年7月8, 9日に、本プロジェクトの研究成果を日本語教育の分野における実際的な応用に役立てるため、NINJAL 国際シンポジウム「第10回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ)」を開催し、本プロジェクトの成果に関する研究発表を7件行った。シンポジウム全体としては、42件の研究発表が行われ、参加者は207名（うち国外機関所属者38名、学生65名）であった。
- ・学習者の作文コーパスを分析した成果として研究論文集『わかりやすく書ける作文シラバス』（石黒圭編、くろしお出版）を刊行した（2017年12月）。また、2018年1月14日に、シンポジウム「新たな作文研究のアプローチ—わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して—」を開催し、141名（うち国外機関所属者7名、学生28名）の参加者を得た。
- ・プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、プロジェクト全体で、論文25件、図書1冊、発表・講演85件、データベース等7件、その他23件を公開・刊行した。
- ・プロジェクト全体として、83機関（うち外国の大学・研究所は35機関）、105名の共同研究員（うち大学院生4名）を組織し（当初の計画では約100名）、プロジェクト非常勤研究員（PDフェロー）3名、非常勤研究員14名、技術補佐員5名を雇用した（当初の計画では順に3名、約13名、約3名）。

#### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスである『BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) 日本語自然会話コーパス』の構築を前年度から継続して行い、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2017年版』(333会話)を所内に先行公開するとともに、『自然会話リソースバンク (Natural Conversation Resource Bank: NCRB)』のプラットフォームを構築・改良した。また、BTSJに関して、活用方法講習会を国内3回、海外1回の計4回（参加者合計79名、うち国外機関所属者21名、学生37名）、シンポジウム2件を行った（参加者合計57名、うち国外機関所属者3名、学生35名）。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスである『I-JAS (International corpus of Japanese As a Second language) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の構築を前年度から継続して行い、2017年5月20日に、検索システムであるI-JAS中納言とともに、第二次公開として225名分の発話データおよび158名分の作文データを公開した。また、「第三回学習者コーパス・ワークショップ」を開催した（参加者81名、うち国外機関所属者2名、学生16名）。

- ・日本語学習者の読解コーパスとして、『日本語非母語話者の読解コーパス』と『文脈情報を用いた日本語学習者の読解過程コーパス』を前年度から継続して構築した。構築のためのデータ収集を行うとともに、前者は45件のコーパスデータ、後者は3名分のコーパスデータを公開した。また、後者に関して、シンポジウム1件を開催し（参加者116名、うち国外機関所属者2名、学生29名）、日本語教育学会2017年度秋季大会におけるパネル発表1件を行った。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典である『基本動詞ハンドブック』の作成を継続し、15見出しと視聴覚コンテンツのショートアニメ31点を追加公開した。また、5件の講演を行った。
- ・日本語学習者用のウェブ版教材について、読解教材の作成を継続するとともに、聴解教材の作成を開始し、読解教材3シリーズ10レッスン、聴解教材4シリーズ18レッスンを公開した。
- ・連携協定を結んでいる北京日本学研究中心と共同で、日本語習得過程に関するデータ収集を3回（国内1回、海外2回）行った。
- ・連携協定を結んでいる国際交流基金日本語国際センターと共同で、日本語学習者の聴解および読解に関する研究とウェブ版聴解教材の開発を行った。

### 3. 教育に関する計画

- ・一橋大学との連携協定に基づき、修士2名、博士10名の指導教員として研究論文の指導に当たった。
- ・コーパス構築作業に13名の大学院生を参加させるとともに、コーパスを用いた研究の指導を行った。
- ・プロジェクト非常勤研究員（PDフェロー）を3名雇用し、日本語教育研究に関する研究指導を行った。
- ・大学院生4名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。
- ・日本語教師セミナーを当初の計画のとおり国内・海外で1回ずつ開催し（参加者合計67名、うち国外機関所属者28名、学生11名）、日本語教師の研修に努めた。

### 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・クラウドワークス社と研究データ提供に関する契約を締結し、日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと、研究に着手した。
- ・『基本動詞ハンドブック』の例文音声の収録を立川市の朗読ボランティアグループや近隣の大学の学生の協力を得て行った。
- ・日本語教師セミナーを国内・海外で1回ずつ開催し（参加者合計67名、うち国外機関所属者28名、学生11名）、研究成果の社会への普及に努めたほか、日本語教師、ボランティア、高校生などを対象とした講演を各地で行った。

### 5. グローバル化に関する計画

- ・海外在住の研究者38名を共同研究員として、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を推進しているほか、連携協定を結んでいる北京日本学研究中心と共同で、学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を継続している。
- ・NINJAL 国際シンポジウム「第10回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）」を開催した。
- ・日本語教師セミナー（海外）をドイツのハンブルク大学で実施した。
- ・EAJS2017（ポルトガル・リスボン新大学）で、共同研究員とともに3件のパネル発表を行った。

- ・プロジェクト全体で、海外の学会や研究会における講演・発表を 37 件行った。
- ・インド人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会 (UGC) およびネルー大学の依頼により、大学院生向け日本語学教材を開発した。

## 6. その他

- ・『基本動詞ハンドブック』の用例を利用して「文型」をキーにして用例を検索・抽出できるウェブ版のソースのプロトタイプを開発した。

## III. 項目ごとの状況

### 1. 研究に関する計画

|   |           |
|---|-----------|
| 自己点検評価  | 計画どおり実施した |
| <p><b>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</b></p> <p>1. <u>NINJAL 国際シンポジウム「第 10 回 日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ)」</u> (29 年 7 月 8, 9 日, 国立国語研究所) を開催し, 本プロジェクトの成果に関する研究発表 7 件 (発表者: 石黒圭, 福永由佳, 小西円 (2 件), 蒙輻, 布施悠子, 田中啓行) を行った。シンポジウム全体の発表件数は 42 件, 参加者は, 207 名 (うち国外機関所属者 38 名, 学生 65 名) であった。</p> <p>2. 学習者の作文コーパスを分析した成果として, <u>研究論文集, 石黒圭編『わかりやすく書ける作文シラバス』</u> (くろしお出版) を刊行した (29 年 12 月)。</p> <p>3. 29 年 11 月 4 日・5 日に, 東海大学ヨーロッパ学術センター主催の <u>日本語教育ワークショップ「作文能力を伸ばす方法を考える」</u> (東海大学ヨーロッパ学術センター) で講師を務めた (石黒圭)。</p> <p>4. 30 年 1 月 14 日に, <u>シンポジウム「新たな作文研究のアプローチ —わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して—</u>」 (国立国語研究所) を開催した。シンポジウム全体の発表件数は 5 件, 参加者は, 141 名 (うち国外機関所属者 7 名, 学生 28 名) であった。</p> <p>5. プロジェクト共同研究員の研究成果も含め, プロジェクト全体で論文 25 件, 図書 1 冊, 発表・講演 85 件, データベース等 7 件, その他 23 件を公開・刊行した (「研究成果一覧」参照のこと)。</p> <p><b>(2) 研究実施体制等に関する計画</b></p> <p>6. プロジェクトを推進するために, 国内外の日本語教育研究者 105 名で 3 つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織した。</p> <p>7. 本プロジェクトの研究遂行のために, PD フェローを 3 名, プロジェクト非常勤研究員を 14 名, 技術補佐員を 5 名雇用した。</p> |           |

### 2. 共同利用・共同研究に関する計画

|   |             |
|---|-------------|
| 自己点検評価  | 計画を上回って実施した |
| <p><b>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</b></p> <p>1. 29 年 12 月 26 日に <u>「BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2017 年版」</u> (333 会話) を所内に先行公開した。また, <u>「自然会話リソースバンク (Natural Conversation Resource Bank: NCRB)」</u> のプラットフォームを構築・改良した。</p> <p>2. 29 年 9 月 9 日に <u>「第 2 回 BTSJ 日本語会話コーパス活用シンポジウム」</u> (国立国語研究所) を行った。シ</p> |             |

ンポジウム全体の発表件数は2件、参加者は21名（うち、学生11名）であった。

3. 会話・談話研究シンポジウム「日本語教育の新展開 ―談話研究の可能性(1)―」(29年7月10日, 国立国語研究所)において, 研究発表「日本語教育になぜ談話研究が必要なのか?」を行った。シンポジウム全体の発表件数は3件, 参加者は, 36名(うち国外機関所属者3名, 学生24名)であった。
4. 「自然会話リソースバンク(Natural Conversation Resource Bank: NCRB)」を使って, 3件の発表を行った(①「NCRB(Natural Conversation Resource Bank)開発の趣旨と活用方法―自然会話教材の録画方法と教材作成支援機能を中心として―」(29年7月22日, リオデジャネイロ日系協会), ②「共同構築型自然会話リソースバンク(NCRB: Natural Conversation Resource Bank)の教材作成支援機能及び, 作成した自然会話WEB教材の使い方」(CASTEL-J2017(29年8月6日, 早稲田大学)), ③「NCRB(Natural Conversation Resource Bank)開発の趣旨と活用方法―自然会話教材の収集と教材作成支援機能を中心として―」(29年8月24日, ポルト大学)。
5. 多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築の2年目に着手し, 29年5月20日に, I-JASの第二次データを検索システムであるI-JAS中納言とともに公開した。  
本コーパスは日本語学習者の発話と作文のデータからなり, 第二次公開では日本語学習者190名分(中国語母語話者35名, 韓国語母語話者35名, 英語母語話者35名, トルコ語母語話者35名, 国内教室環境学習者25名, 国内自然環境学習者25名), 日本語母語話者35名分, 計225名分の発話データ及び158名分の作文データを公開した。  
現在は第三次公開に向けて, 文字化作業及びデータ整備を行っている。第三次公開として, 来年度の30年5月に210名分のデータの提供を予定している。
6. 29年12月3日に, 「第三回学習者コーパス・ワークショップ」(国立国語研究所)を開催した。第一部はシンポジウム及びポスター発表7件, 第二部は, I-JASのデータに関する説明と, I-JAS中納言の使い方の講習を行った。参加者は, 81名(うち国外機関所属者2名, 学生16名)であった。
7. 日本語非母語話者の読解コーパス構築のためのデータ収集を行うとともに, 中国語, 韓国語, タイ語を母語とする学習者を中心に, 29年8月29日に11件, 29年12月28日に24件, 30年2月26日に10件, 計45件のコーパスデータを公開した。
8. 文脈情報を用いた日本語学習者の読解過程コーパス構築のためのデータ収集を行うとともに, 30年3月30日に, 中国語, ベトナム語を母語とする学習者および日本語母語話者の「語彙の理解」に関するコーパスデータ各1名分, 計3名分を公開した。
9. 29年11月25日に, 日本語教育学会2017年度秋季大会(朱鷺メッセ(新潟市))において, パネル発表「文章理解過程における日本語学習者の多義語の意味把握―文脈的手がかりを用いて―」(企画者:石黒圭)を行った。
10. 30年3月3日に, シンポジウム「日本語学習者は文の関係をどう理解しているのか―目の動きから見えてくるもの―」(国立国語研究所)を開催した。シンポジウム全体の発表件数は6件, 参加者は, 116名(うち国外機関所属者2名, 学生29名)であった。
11. オンライン日本語基本動詞ハンドブックの見出し執筆作業を継続し, 15見出しを追加公開した(累計95見出し)。また, 視聴覚コンテンツのショートアニメを31点追加公開した(累計101点)。
12. 基本動詞ハンドブックに関して, 5件の講演を行った(プラシャント・パルデン, 今村泰也)。「5. グローバル化に関する計画」参照のこと

13. ウェブ版読解教材の開発を行い、「葉の袋」シリーズ4レッスン、「バイキングレストランのクチコミ」シリーズ3レッスン、「スタンプカード」シリーズ3レッスン、合計3シリーズ10レッスンの教材を公開した。

14. ウェブ版聴解教材の開発を行い、「自宅のインターホン」シリーズ3レッスン、「コーヒーショップ」シリーズ4レッスン、「カラオケ店」シリーズ5レッスン、「コンビニ」シリーズ6レッスン、合計4シリーズ18レッスンの教材を公開した。

## (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

15. 連携協定を結んでいる北京日本学研究中心と共同で、北京師範大学において、29年4月21日～24日（担当：石黒圭，布施悠子，田中啓行）と29年9月9日～10日（担当：石黒圭，布施悠子）の計2回、日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を行った。また、29年9月に、国立国語研究所で4名（担当：布施悠子）、天理大学で2名、愛知淑徳大学で1名（担当：野山広）の日本語学習者に対して、日本語習得過程に関するデータ収集を行った。

16. 日本語学習者の聴解および読解に関する研究とウェブ版聴解教材の開発を国際交流基金日本語国際センターと共同で行った。

## 3. 教育に関する計画

| 自己点検評価  | 計画どおりに実施した |
|---|------------|
| <b>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</b>   |            |
| 1. 一橋大学との連携協定に基づき、連携教授1名（石黒）が演習を担当し、指導教員として、修士課程2名、博士課程10名の大学院生に対する研究論文の指導を行った。   |            |
| <b>(2) 人材育成に関する計画</b>   |            |
| 2. 13名の大学院生をコーパスの構築作業に参加させ、コーパスを用いた研究の指導を行った。   |            |
| 3. プロジェクト非常勤研究員（PDフェロー）を3名雇用し、日本語教育に関する研究指導を行った。  |            |
| 4. 大学院生4名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、日本語学習者の教室でのコミュニケーションと学習の変容を分析した結果を発表した（口頭発表1件，論文2件）。  |            |
| 5. その他、「 <u>BTSJ活用方法講習会</u> 」を国内3回（29年5月16日，6月10日，9月9日，いずれも国立国語研究所），海外1回（西安外国語大学）の計4回行った。参加者は，5月16日が10名（うち，学生2名），6月10日が24名（うち，国外機関所属者2名，学生10名），6月24日が19名（うち，国外機関所属者19名，学生12名），9月9日が26名（うち，学生13名）であった。 |            |

## 4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| 自己点検評価  | 計画どおりに実施した |
|---|------------|
| <b>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</b>   |            |
| 1. クラウドワークス社と研究データ提供に関する契約を締結し、日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと、ビジネス文書のわかりやすさを解明する研究に着手した。 |            |
| 2. その他，基本動詞ハンドブックの例文音声の収録を立川市の朗読ボランティアグループや近隣の大学の   |            |

学生の協力を得て行った。

## (2) 研究成果の社会への普及に関する計画

3. その他, 29年10月13日に, 職業発見プログラム(国立国語研究所)で, 新潟県立長岡高等学校の生徒に対して, 特別講義「ディスコース・ポライトネス理論とは?—誤解と円滑なコミュニケーションの観点から—」を行った(宇佐美まゆみ)。
4. その他, 29年12月8日に, 東京外国語大学大学院国際日本学研究院主催の連続講演会・国際シンポジウム「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」(東京外国語大学)で, 講演「学習者コーパスに見る日本語の世界」を行った(石黒圭)。
5. その他, 29年5月19日に, 第32回国立大学日本語教育研究協議会ワークショップ(お茶の水女子大学)で, 講演「読解授業でのピア・リーディングの導入と活用」を行った(石黒圭)。
6. その他, 29年7月13日に, 公益社団法人国際日本語普及協会主催のAJALT講演会(東京都港区)において, 講演「読解における文脈情報を生かした語の理解—中国語母語話者を対象にしたケーススタディ—」を行った(石黒圭)。
7. 30年1月20日に, 日本語教師セミナー「地域に定住する外国人の日本語使用と言語生活について考える—縦断調査の結果や多言語社会としての日本の現在を踏まえながら—」(国立国語研究所)を行い, 33名(うち国外機関所属者3名, 学生8名)が参加した。
8. また, 30年2月25日に, 日本語教師セミナー「学習者は日本語をどう理解しているか—聴解・読解の困難点とその指導—」(ハンブルク大学)を行い, 34名(うち国外機関所属者25名, 学生3名)が参加した。
9. その他, 29年10月14日~16日に, 福岡県国際交流センター主催の福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座で「コミュニケーションのために文法を見直そう」という研修を行った(八幡西生涯学習総合センター・こくさいひろば(福岡市)・えーるピア久留米)(野田尚史)。
10. その他, 30年2月10日に, 岡山県国際交流協会主催・岡山県共催の「やさしい日本語」研修会で「外国の人たちに日本語でどう接するか?—やさしい日本語の使用と相手の立場に立った理解—」という研修を行った(岡山国際交流センター)(野田尚史)。

## 5. グローバル化に関する計画

|  |             |
|--|-------------|
| 自己点検評価   | 計画を上回って実施した |
| <b>(1) 国際的協業に関する計画</b>   |             |
| 1. 海外在住の研究者38名を共同研究員として加え, 日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を実施した。  |             |
| 2. 連携協定を結んでいる北京日本学研究中心と共同で, 日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を計3回行った(「2. 共同利用・共同研究に関する計画」参照)。  |             |
| 3. その他, インド政府人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会(UGC)およびネルー大学の依頼により, 国語研スタッフ(プラシャント・パルデシ, 野田尚史, 今村泰也)・客員教員(砂川有里子, 岸本秀樹, 堀江薫, 今井新悟)・共同研究員(桐生和幸)の8名で合計30モジュールの大学院生向け日本語学教材(テキストとビデオ講義)を開発した。この教材の一部は29年12月現在e大学院のホームページ |             |

(e-PGPathshala) で一般公開されており、ビデオ講義は YouTube でも公開されている。

4. その他、台湾からの研究員 1 名、韓国からの研究員 1 名を受け入れている。(受け入れ期間 29 年 9 月～30 年 8 月)

## (2) 国際的発信に関する計画

5. NINJAL 国際シンポジウム「第 10 回 日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ)」 (29 年 7 月 8, 9 日, 国立国語研究所) を開催した (詳細については「1. 研究」参照)。
6. その他、日本語教師セミナー「学習者は日本語をどう理解しているか ―聴解・読解の困難点とその指導―」 (30 年 2 月 25 日, ハンブルク大学) を行った (詳細は「4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置」参照)。
7. その他, EAJS2017 (29 年 8 月 31 日～9 月 2 日, ポルトガル・リスボン新大学) で, 共同研究員によるパネル発表 3 件 (①『『BTSJ 日本語会話コーパス』を活用した教材作成への提案―ヨーロッパにおける自然なコミュニケーション教育のために』(企画者: 宇佐美まゆみ), ②「ヨーロッパの日本語学習者に有益な読解教育」(企画者: 野田尚史), ③「ヨーロッパで継承語としての日本語を教えることと学ぶことの意味を考える―それぞれの現場から―」(企画者: 野山広)) を行った。
8. その他, 共同研究員が海外の学会や研究会で 37 件の講演・発表を行った (詳細については「研究成果一覧」を参照のこと)。

## 6. その他

|  |  |
|--|--|
| 自己点検評価   |  |
| 1. 「基本動詞ハンドブック」の用例を利用して「文型」をキーにして用例を検索・抽出できるウェブ版のリソースのプロトタイプを開発した。 |  |

## 平成 29 年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施した

本プロジェクトは、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明し、研究成果の日本語教育への応用を目的として、3種のサブジェクト (①「日本語学習者の日本語使用の解明」、②「日本語学習者の日本語理解の解明」、③「日本語学習のためのリソース開発」) を設定している。

今年度は、コーパス 3 種の構築の継続と公開、オンライン日本語動詞辞典とウェブ版日本語教材 2 種の作成と公開、NINJAL 国際シンポジウム (ICPLJ) の開催等の年次計画が全て順調に実施された。

今後は、本プロジェクトの研究目的に即して、3種のサブプロジェクト相互の有機的な連携を図ることで、研究成果を統合して広く公開し、多様化する日本語教育に対する貢献が期待される。

- (1) 本プロジェクトは、各種コーパスの構築やウェブ版日本語教材の作成と公開、日本語学習者に関する調査や共同研究が進められているが、各種の調査結果と研究成果を統合するとともに、日本語教育の実践に対する貢献を効果的に展開していく必要がある。

(2) 国内外における「日本語教師セミナー」等の開催目的は、研究成果の公開が目的の研究推進と研究成果の利用方法の説明が本来連続するものであることから、両者の関連を明確にした上で、国際シンポジウムやセミナー等の立案と実施を効率よく進めるべきである。

(3) 各種コーパスや日本語教材の利用方法に検討を加えながら、作成と整備を進める必要がある。他の研究部門との協力を密にして、今後の共同研究の進展や研究成果公開後の利用促進に向けて、コーパスの構築や日本語教材の開発を進めていくべきである。

## 《評価項目》

### 1. 研究について

今なお構築途上にある日本語教育学における本プロジェクトの目的と課題は、日本語教育の多様化に応じるものとして評価される。今年度の研究成果は、量的には達成されているが、質的な研究水準には、日本語教育の実践に対する貢献を可能にするより高度なものが課されている。

1. 2017年7月に、本プロジェクトの研究成果を日本語教育に応用するために、NINJAL 国際シンポジウム「第10回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ)」を国語研で開催し、本プロジェクト関連の研究発表を7件 (全体で42件) 行い、207名 (うち国外38名、学生65名) が参加した。
2. 2017年12月に、学習者の作文コーパスの分析結果を研究論文集『わかりやすく書ける作文シラバス』(石黒圭編、くろしお出版) として刊行し、2017年1月に、そのシンポジウム「新たな作文研究のアプローチ—わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して—」(参加者141名、うち国外7名、学生28名) を開催した。
3. 共同研究員の研究成果も含むプロジェクト全体で、論文25件、図書1冊、口頭発表・講演85件、データベース等7件、その他23件を公開・刊行した。
4. プロジェクト全体で、83機関 (うち国外35機関)、105名の共同研究員 (うち大学院生4名) を組織し、非常勤研究員 (PD フェロー) 3名、非常勤研究員14名、技術補佐員5名を雇用した。

### 2. 共同利用・共同研究について

各種コーパスの構築と公開、使用方法の講習会等の開催、内外の学会の研究発表や講演、教材開発等々の成果がある。国内外の最大多数の共同研究員を擁する研究体制であるため、本プロジェクト全体や他の研究部門と有機的連携を図ることで、研究成果の統合と公開が肝要である。

1. 2017年12月に、母語話者と学習者の自然会話コーパスの『BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) 日本語自然会話コーパス』の構築を継続して、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2017年版』(333会話) を所内に先行公開し、『自然会話リソースバンク (Natural Conversation Resource Bank: NCRB)』のプラットフォームを構築・改良した。また、BTSJの利用方法の講習会を内外で4回 (参加者79名、うち国外21名、学生37名) 開催し、シンポジウムを2件 (参加者57名、うち国外3名、学生35名) 実施した。
2. 『I-JAS (International corpus of Japanese As a Second language) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の構築を継続して、2017年5月に、検索システムのI-JAS 中納言とともに、第2次公開として225名分の発話データと158名分の作文データを公開した。また、2017年12月に、「第3回学習者コーパス・ワークショップ」(参加者81名、うち国外2名、学生16名) を開

催した。

- 『日本語非母語話者の読解コーパス』と『文脈情報を用いた日本語学習者の読解過程コーパス』の構築を継続してデータを収集し、前者が計 45 件、後者が 3 名分のコーパスデータを公開した。また、後者のシンポジウムを 1 件（参加者 116 名、うち国外 2 名、学生 29 名）開催し、2017 年 11 月に、日本語教育学会 2017 年度秋季大会でパネル発表を 1 件行った。
- オンライン日本語基本動詞辞典の『基本動詞ハンドブック』の作成を継続し、15 見出しと視聴覚コンテンツのショートアニメ 31 点を公開し、「文型」の用例を検索・抽出するウェブ版リソースのプロトタイプを開発した。
- 日本語学習用のウェブ版の読解教材 3 シリーズ 10 レッスン、聴解教材 4 シリーズ 18 レッスンを作成した。
- 連携協定した北京日本学研究中心と共同で、日本語習得過程のデータ収集を内外で 3 回実施し、国際交流基金日本語国際センターと共同で、聴解・読解に関する研究とウェブ版聴解教材の開発を行った。

### 3. 教育について

連携協定による大学院の授業担当をはじめ、コーパス構築作業と共同研究参加の大学院生に対する研究指導、シンポジウムやセミナー等の開催により若手研究者の養成に貢献した。

- 一橋大学との連携協定による教授 1 名が大学院の演習と論文指導（修士 2 名、博士 10 名）を担当した。
- 本プロジェクトのコーパス構築作業に大学院生 13 名を参加させ、コーパスを用いた研究を指導した。
- 本プロジェクトに非常勤研究員（PD フェロー）3 名を雇用し、日本語教育学に関する研究を指導した。
- 本プロジェクトの共同研究員の大学院生 4 名が研究成果（口頭発表 1 件、論文 2 件）を発表した。
- 「日本語教師セミナー」を内外で各 1 回（参加者 67 名、うち国外 28 名、学生 11 名）、「BTSJ 活用方法講習会」を国内 3 回（参加者 53 名、うち国外 21 名、学生 24 名）、海外 1 回（26 名、うち学生 13 名）開催した。

### 4. 社会との連携及び社会貢献について

提携企業とのビジネス日本語研究や地域住民の協力による教材作成等で、社会連携を図った。

- クラウドワークス社とのデータ提供の契約締結により、日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力で、ビジネス文書のわかりやすさに関する研究に着手した。
- 立川市の朗読ボランティアや近隣の大学生の協力で、『基本動詞ハンドブック』の例文の音声収録した。
- 「日本語教師セミナー」を内外で各 1 回開催し、日本語教師やボランティア、高校生を対象として講演した。

## 5. グローバル化について

海外の共同研究者や日本語教育機関との共同研究をはじめ、国際シンポジウムや「日本語教師セミナー」等を開催して、日本語教育の研究と実践における国際化をさらに推進した。

1. 海外在住の共同研究者38名と共に、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を推進し、連携協定により、北京日本学研究中心との共同で、学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を計3回行った。
2. 2017年7月に、NINJAL国際シンポジウム「第10回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）」を開催した。
3. 2018年2月に、ドイツのハンブルク大学で、「日本語教師セミナー」（海外1回）を開催した。
4. 2017年8月31日～9月2日に、EAJS2017（ポルトガル・リスボン新大学）で、パネル発表を3件行った。
5. プロジェクト全体で、海外の学会や研究会等における講演と研究発表を37件行った。
6. インド人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会（UGC）とネルー大学の依頼により、大学院生向けの日本語学の教材を開発して提供した。

## 6. その他特記事項

該当する活動なし。

コーパス開発センター  
センター長：前川 喜久雄

## I. 平成 29 年度計画

### 1. 研究

#### (1) 共同研究の推進

研究系のコーパス開発プロジェクトの支援のために必要な言語処理・音声処理・言語資源構築技術に関する共同研究を進める。また「言語資源活用ワークショップ 2017」を 9 月に開催する。

#### (2) 研究実施体制

センター長 1 名・専任准教授 1 名・特任助教 2 名・プロジェクト非常勤研究員 5 名のほか併任教員 5 名からなる。

そのほか所外共同研究員 16 名（内 2 名大学院生）の技術協力を得て、研究系のコーパス開発プロジェクトの支援を行う。

#### (3) 共同利用の推進

包括的検索システムの開発を進める。特に音声配信機能に関する実装を進める。

#### (4) 国際化

言語処理・音声処理・言語資源構築技術に関する研究の国際会議発表を積極的に行う。Universal Dependency などの、形態論情報・係り受けアノテーションの標準化に参加する。

#### (5) 研究成果の発信と社会貢献

UniDic や分類語彙表などの語彙資源や、BCCWJ, CSJ, CHJ, NWJC に対するアノテーションデータおよび統計的言語解析モデルの公開を行う。

### 2. 教育

#### (若手研究者育成)

既存のコーパス検索アプリケーションの講習会を継続して行う。

## II. 平成 29 年度実績

### (1) 共同研究の推進

#### ・公開ワークショップ

平成 29 年 9 月 5 日 6 日に『言語資源活用ワークショップ』(LRW2017)を開催した。総参加者数 123 名、発表件数は 36 件。また併設イベントとして、国立情報学研究所データセット共同利用研究開発センターと共同で平成 29 年 9 月 7 日に『音声資源活用シンポジウム』を開催した。総参加者数 114 名。発表件数は 6 件。

以上の 2 つのイベント合計 3 日、発表件数 42 件/3 日、参加者のべ 306 名/3 日であった。

- ・共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」では、音声班・係り受け班・意味班の 3 つのグループにわかれて研究を進めた。
- ・情報・システム研究機構：機構間連携・文理融合プロジェクトに 2 件採択された。

➤ 「言語における系統・構造・変異とその数理」(代表者：持橋先生 (ISM))

分担者：前川・浅原・横山（国語研）、菊沢先生（民博）、村脇先生（京大）

2017年度 80万円平成30年2月2日に、「言語における系統・変異・多様性とその数理」シンポジウムを開催（参加者55名）。

- ▶ 「わかりやすい情報伝達の実現に向けた言語認知機構の解明とその工学的応用」（代表者：相澤先生（NII））

分担者：浅原（国語研）

2017年度 100万円，2018年度 300万円

平成30年3月3日に、日本語教育研究領域と合同で、「シンポジウム 「日本語学習者はどのように文章を理解しているのか 一目の動きから見えてくるもの」」を開催（参加者116名）。

- ▶ 共同研究プロジェクト「all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用」（代表者：新納浩幸）の研究発表会（平成30年3月25日）の企画補助。
- ▶ 「言語処理学会第24回年次大会ワークショップ 形態素解析の今とこれから 「形態素解析だヨ！全員集合」のオーガナイザとして企画・運営に参加。招待発表者として登壇（岡，中村）。

## (2) 研究実施体制

1. センター長1名・専任准教授1名・特任助教2名・プロジェクト非常勤研究員5名のほか併任教員5名からなる。
2. 平成30年度より特任専門職員を1名雇用するために人事を行った。
3. また、所外共同研究員を平成29年10月より2名追加した（計18名・内2名大学院生）。

## (3) 共同利用の推進

1. 2017年9月に『日本語話し言葉コーパス』の『中納言』上での音声配信機能を試験公開し、2018年3月に同USB版契約者全員に同サービスの提供をはじめた。
2. 包括的検索系の試作版を開発した（図1）。  
現在のところ、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語歴史コーパス』『日本語話し言葉コーパス』『名大会話コーパス』の4つが串刺し検索できる。
3. 京都大学秋田准教授の協力を得て、所内に音声・テキスト間アラインメントシステムを導入した。
4. 所内形態論情報付きコーパス管理システム『大納言』から音声再生ができるような拡張を構築した。
5. ジャパンナレッジのライセンスを引き続き10組導入した。主に『日本語歴史コーパス』の構築作業で利用されているが、所内にいけば誰でも利用できる。



図1:包括的検索系(試作版)

6. 『中納言』の授業用アカウント発行サービスの開発に着手した。

7. ワークショップについては、上記（1）第1項参照。

8. 2017年度中の『中納言』申込件数および検索件数は表1の通り。申込件数は昨年度を上回る水準(+30%:BCCWJ CHJ)。海外での利用状況については、下記（4）第1項参照。

| コーパス     | 申込件数 | 検索件数   |
|----------|------|--------|
| BCCWJ-NT | 4281 | 350508 |
| BCCWJ-OT |      | 8756   |
| CHJ      | 3507 | 112467 |
| I-JAS    | 3195 | 12477  |
| CSJ      | 3687 | 28276  |
| 名大会話     | 485  | 11822  |

9. 『少納言』検索件数は年間90万件。2015年度の年間80万件水準に戻る。(2016年度は機械処理によるアクセスがあり160万件)

10. 『日本語話し言葉コーパス』(USB版)の新規契約は62件、うち商業利用は15件。

表1:『中納言』申込件数と検索件数

11. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(DVD版)の新規契約は43件、うち商業利用は9件。

12. 上記9-10による今年度の収入は2732.4万円。昨年度比1.6倍。

13. 『梵天』によるNWJCの検索件数は一般公開版32万件、高機能版は文字列検索が36656件、品詞列検索が5716件、係り受け検索が493件、延べログイン数2106件。

14. 『国語研日本語ウェブコーパス』の分散表現データNWJC2vecを66件の組織と個人に無償配布。

#### (4) 国際化

1. 『中納言』は海外でも用いられている。29年度のアクセス調査の結果、86%は国内だが、残りの14%は、中国(6%)、台湾(2%)、韓国(2%)、アメリカ(1%)、その他イタリア、ドイツ、タイ、ロシア、イギリス、フランスなど、世界各国からの利用であった。

2. 国際論文誌1件

Masayuki Asahara (2018), NWJC2Vec: Word embedding dataset from ‘NINJAL Web Japanese Corpus’ Terminology | International Journal of Theoretical and Applied Issues in Specialized Communication 24-1, pp. 7-21, Benjamins. (意味班)

3. 積極的に国際会議発表(11件)を進めた。

PACLING (1件) 意味班 (会議後国際論文集 post proceedings に採択: 採択率 28/50)

TCP-MAPLL (1件) 意味班

DH (1件) 意味班 (言語変化研究領域と合同)

INTERSPEECH (2件) 音声班

DiSS (1件) 音声班

Oriental COCODA (1件) 音声班

JADH (2件) 意味班・係り受け班

PACLIC-31 (1件) 意味班

IJCNLP (1件) 意味班

4. 韓国日本学会招待講演1件 (『国語研日本語ウェブコーパス』関連)

5. BCCWJ, CHJ に基づく、単語係り受けアノテーション UD Japanese-BCCWJ, UD Japanese-Modern を公開した。同データは CoNLL-2018 (The SIGNLL Conference on Computational Natural Language Learning) に併設されて実施される評価型タスク Multilingual Parsing from Raw Text to Universal Dependencies で用いられる。(係り受け班)
6. 下記(6)第3項で述べる『梵天講習会』の講習会ビデオは英語版も作成し、公開した。  
[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/nwjc/bonten-tutorial.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/nwjc/bonten-tutorial.html)
7. 台湾の Academia Sinica と共同研究を進め、アジア言語の音声データの整備を進めた。また、2019年に開催予定の国際会議 LPSS の準備を進めた。

### (5) 研究成果の発信と社会貢献

1. 自動形態素解析用辞書 UniDic の公開サイトを新設一元化し、分散していた情報をサイト内の用語集として集約した(サイトアクセス数: 19,076)。  
<http://unidic.ninjal.ac.jp/>  
また、CSJ での短単位の出現頻度・接続頻度に基づく統計的言語解析モデル unidic-cwj-2.2.0 と unidic-csj-2.2.0 を構築、UniDic の7年ぶりのメジャーアップデートとして公開し、それぞれ510件、210件のダウンロードが行われた。また年度末には Windows 向け GUI, ChaMame を同梱した unidic-cwj-2.3.0 と unidic-csj-2.3.0 を公開した。本アップデートでは、BCCWJ や CSJ だけでなく、開発中の日常会話コーパス CEJC の統計情報も利用し、自動解析性能の向上に努めている。次に述べる wls2unidic により、解析対象のテキストに分類語彙表番号が付与できるようになった。
2. 分類語彙表番号と UniDic 語彙素番号の対応表を公開した。  
<https://github.com/masayu-a/wls2unidic>
3. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』の語彙表・語数表の整備を行った。  
[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/bcc-chu.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/bcc-chu.html)  
[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/csj/chunagon.html#data](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/chunagon.html#data)
4. 「言語資源活用ワークショップ 2016」「言語資源活用ワークショップ 2017」の発表論文集を国立国語研究所学術情報リポジトリより DOI つきで配信した。  
<https://repository.ninjal.ac.jp/>
5. 国内論文誌 5件採択(技術資料1件含む)
6. ブックチャプター 2件(海外1件, 国内1件), 解説 2件
7. 国内学術発表 26件(言語資源活用ワークショップ 2017 発表分を除く)
8. 新たに公開した言語資源は以下の通り
  - UD Japanese-BCCWJ 上記(4)第3項
  - UD Japanese-Modern 上記(4)第3項
  - unidic-cwj-2.3.0\_beta, unidic-csj-2.3.0\_beta 上記(5)第1項
  - wls2unidic-1.0.1 (分類語彙表-UniDic 対応表) 上記(5)第2項
  - 『分類語彙表増補改訂版データベース』(ver. 1.0.1)
  - 『国語研日本語ウェブコーパス』から学習した統計的言語モデル nwjc2vec 上記(3)第13項の skip-gram モデルを追加

- 鶴岡調査データベース 言語変化研究領域と合同
- 『日本語話し言葉コーパス』中納言版（発音情報拡張）音声言語研究領域と合同
- 『名大会話コーパス』中納言版（メタ情報拡張）音声言語研究領域と合同
- 『現日研・職場談話コーパス』中納言版 音声言語研究領域と合同
- 『日本語歴史コーパス奈良時代編』中納言版 言語変化研究領域と合同
- 『日本語歴史コーパス室町時代編 II』中納言版 言語変化研究領域と合同
- 『日本語歴史コーパス江戸時代編 I』中納言版 言語変化研究領域と合同

## (6) 若手研究者育成

1. 以下の通り所外向け講習会を実施した：

- ①全文検索システム『ひまわり』に係る講習会（9月7日実施，9名参加）
- ②オンライン検索システム『中納言』に係る講習会（9月7日実施，17名参加）
- ③『Praat』に係る講習会（9月7日実施，12名参加）
- ④『日本語ウェブコーパス』の検索ツール『梵天』に係る講習会（4/3，27，5/12，15，7/11，24，8/1，3，9/28，11/2，2/10，2/24，3/29） 411人参加
- ⑤コーパス検索系講習会（12月10日実施，於比治山大学(広島)，12名参加うち学生3名）
- ⑥視線走査装置講習会（3月2日実施，2名参加）
- ⑦コーパス検索系（『梵天』・『ChaKi.NET』）講習会（3月20日実施，19名参加）

2. 以下の通り所内向け講習会を実施した：

- ①Python 勉強会（9か月間）6人参加
- ②Praat 講習会（半年間）7人参加
- ③UniDic Explorer 講習会（4回）13人参加
- ④形態論情報修正作業講習会（1回）24人参加

3. 外部評価委員のコメントを受けて，7月と8月に2回 YouTube Live! による「梵天講習会」をビデオ配信した。

4. 『梵天講習会』の講習会ビデオを作成した。

[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/nwjc/bonten-tutorial.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/nwjc/bonten-tutorial.html)

自己点検評価

計画どおりに実施した

## 平成29年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画をどおりに実施した

「言語資源活用ワークショップ 2017」における研究発表, 共同研究プロジェクトの採択, 国際論文・会議発表からコーパス日本語学・日本語教育学の共同研究の着実な進展が確認でき高く評価できる。

- ・日本語話し言葉コーパスをはじめとして各種コーパスやデータベースのコンテンツの公開が精力的に進められており, 検索や音声配信など各種利用法の拡大や一定のサイトに公開情報をまとめるなど成果へのアクセス利便化が図られていることは評価できる。
- ・一方, 一般の閲覧者がそれらのコーパスの意義と使い勝手を知るためのガイドはまだ改善の余地があるように思える。例えば, 「梵天」を使おうとしても最初の画面になかなか行き着けなかった。
- ・「梵天を用いた研究業績」が「梵天」サイトに付加されている点は, 当該コーパスの研究利用を触発するものとして評価できる。
- ・外部評価委員会の提案に応じて作成された「梵天講習会ビデオ」は分かりやすくできている。YouTubeビデオ配信と共に評価できる。今後もコーパス普及のために同様の取組を継続することを期待する。

## 研究情報発信センター

センター長：プラシャント・パルデシ

### I. 平成 29 年度の計画

研究情報・研究資料を収集・整理・保存するとともに、大学共同利用機関としてそれらを公開・発信するため、以下の取り組みを行う。

- (1) ウェブサイトの整備
- (2) 研究資料室の環境整備
- (3) 各種データベースの整備・公開
- (4) 機関リポジトリの整備
- (5) 『国立国語研究所論集』の刊行
- (6) ことばに関する質問や相談への対応
- (7) 情報システムの整備

### II. 平成 29 年度の実績

#### (1) ウェブサイトの整備

- ・トップページから各コンテンツへの動線を分かりやすくするとともに、深層に埋もれていたコンテンツへのアクセスを容易にすることで、利用者の利便性を向上させるため、研究所メインサイト（ホームページ）の改修を実施し、デザイン・レイアウトの変更（メガドロップダウンメニュー導入など）、メニューの整理（データベース一覧、刊行物一覧の掲載など）を行った。

#### (2) 研究資料室の環境整備

- ・国語研メインサイト内に「研究資料室」ページを新規開設した。  
(<https://www.ninjal.ac.jp/info/aboutus/material-room/>, 平成 29 年 12 月)。
- ・「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」サイトにおいて、収蔵資料群概要 12 点を追加公開した。
- ・収蔵雑誌について「中央資料庫未製本雑誌所蔵リスト」を一般公開した。また、国語研 OPAC に収蔵雑誌を登録し、利用促進に努めた。
- ・国語研の過去の研究で収集した映像資料の所内試視聴システム（所蔵映像データベース）を制作し、配信サービスを開始した（278 点、平成 30 年 2 月）。
- ・音源資料の所内試聴システム（所蔵音源データベース）の改修を行うとともに、17,174 点を追加収録した（全 17,662 点、平成 30 年 2 月）。
- ・中央メディア保管庫収蔵資料の配架替えを行い、利用しやすい環境を整えた。
- ・各種メディア目録の整備を平成 28 年度に引き続き行い、地図目録の整備に着手した。
- ・収蔵資料の保全と再利用のため、音源資料（カセットテープ等）と映像資料（ベータビデオテープ等）のメディア変換を行った（全 2,224 点）。
- ・劣化資料の保全対策として、各種社会調査の調査票の再ファイリングに着手した。
- ・研究資料公開・利用時の個人情報保護に関して、「研究資料室の個人情報等に関する取扱い要領」を新規

に制定し、併せて「国立国語研究所研究情報発信センター研究資料室運用指針」「研究資料室資料の利用に関する申合せ」「国立国語研究所における研究資料等移管取扱いについて」を改正した。

- ・学会発表 2 件。論文公表 1 件。

### (3) 各種データベースの整備・公開

《日本語研究・日本語教育文献データベース》

- ・日本語研究・日本語教育文献データベースは定期的な情報更新を行い、約 23 万件のデータを公開している（平成 30 年 3 月末）。29 年度は 5 回の更新作業を行い、新規データ 5,300 件を追加公開した。
- ・データ化されていない『国語年鑑』1954～1993 年版掲載図書の遡及入力を行い、データの追加を開始した（1954～1961 年版 約 1,700 件）。
- ・オンライン・ジャーナル掲載の論文データ追加を開始した（平成 30 年 3 月末時点約 140 件）。
- ・韓国国内発行関係文献調査を行い、韓国学会誌掲載論文の登録準備作業を開始した。
- ・リポジトリ等で Web 公開されている論文（1985 年～）について論文本文へのリンクを完了した（平成 30 年 3 月末時点のリンク件数 21,000 件）。
- ・1993～1995 に行われた科学研究費国際学術研究「国際化時代における日本語研究文献情報の収集と分析」で収集された海外発行日本語研究文献目録データを当データベースに追加するための準備を開始した。
- ・英文 Web ページを作成し、トップページの改修を行った。
- ・韓国日本語学会で研究発表を行った（平成 29 年 9 月）。

《データベースコンテンツ整理》

- ・各種データベース類について、アクセス及び管理を容易にするため、コンテンツ整理（データ公開用サーバへの移設、総合的なデータベースリストの整備）を開始し、研究所メインサイト（ホームページ）の深層に分散して配置されていた『日本言語地図』地図画像」「日本語観国際センサス」などの整理を行った。

### (4) 機関リポジトリの整備

- ・オープンアクセス推進の一環として、(1)国語研定期的刊行物については発行次第、編集責任者から当センターへデータ提供を受けリポジトリに登録すること、(2)リポジトリ登録コンテンツには原則 DOI を付与すること、をセンター運営委員会で確認した。
- ・上記運用に沿って、「言語資源活用ワークショップ発表論文集」（2016 及び 2017：85 件）、「国立国語研究所論集」（13 号及び 14 号：30 件）を公開、DOI を登録した。
- ・ウェブサイトの「刊行物データベース」からリポジトリへのデータ移行について本文 PDF・メタデータの作成・整備を進め、「国立国語研究所報告」（主に図書：177 件）、「幼児のことば資料」（6 件）、年報、要覧、記念誌等（75 件）をリポジトリで公開し、DOI を登録した。・リポジトリ登録データの英語拡充に向け、「英文の研究成果紹介」の英語データの点検整備を進め、メタデータに統合公開した（約 150 件）。

### (5) 『国立国語研究所論集』の刊行

- ・論集の編集校正を進め、13 号（平成 29 年 7 月）、14 号（30 年 1 月）を刊行した。
- ・15 号への応募が近年の号の 2 倍以上の件数であったため、編集委員会で検討し、これらを 2 号分の刊行

- に充て、15号を2018年7月、16号をその3か月後の10月に刊行することとした。
- ・15号・16号の投稿締切～査読の日程は同じため、2号分の査読済原稿の整理～編集校正を進めた。

#### (6) ことばに関する質問や相談への対応

- ・ことば質問や相談に専門的に対応するスタッフが常駐しており、29年度は459件の質問や相談に対応した。

#### (7) 情報システムの整備

- ・コンピュータシステムの脆弱性対応等のセキュリティ対策を実施し、ネットワーク・サーバの運用保守を、年間を通じて適切に実施した。
- ・コンピュータ室へのサーバ・ネットワーク機器の増設に対応するため、コンピュータ室電源容量の増設工事を実施した。さらに、コンピュータ室のセキュリティ強化策として入退室記録用のカメラを設置した。

自己点検評価

計画どおりに実施した

## 平成29年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施した

- ・ウェブサイトの整備により「各コンテンツへの動線」がたどりやすくなり、ともすれば「深層に埋もれ」がちだったコンテンツへもアクセスしやすくなった点は高く評価する。
- ・「研究資料室」ページが新設され、収蔵資料リストが容易にアクセスできるようになった点も、国立国語研究所の過去の調査研究の一端に手軽にふれられる点で貴重である。
- ・機関レポジトリ整備では、オープンアクセスを意識してDOI登録を含むリポジトリ登録運用ルール化が進められて国語研成果へのアクセス利便化が図られた。しかし「学術情報レポジトリ」のコンテンツアクセスは検索方法を含めてより一層の利便化が望まれる。(例えば、「幼児のことば資料」を検索結果から探すのは手間がかかった。)
- ・「ことばに関する質問や相談への対応」は、国語研を一般の方々とつなぐ重要な業務である。一般の人にとって質問の入口がHPのどこなのか、どのようにして質問するのかが分かりにくいので改善していただきたい。「お問合せ」の欄では「研究所に関する質問」となっており、「ことばに関する質問」をすることをためらわせる。「よくある「ことば」の質問」のページからも質問できるようにしてはいかがか？

## 平成 29 年度「管理業務」に関する評価シート

### 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

#### 1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

##### 【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

##### 【実績】

運営会議において、外部委員から研究所の研究活動の広報について意見等をいただき、研究所HPメインサイトの見直しを図った。また、研究教育職員の選考について審議した。その他に、外部評価委員会からいただいた研究所の活動に係る意見を反映しアジア圏の大学と交流協定を締結した他、複数の研究班による研究集会を開催した。さらにコーパス利用の研修及びNINJALフォーラムをネット配信した。

#### 2. 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

##### 【計画】

機関拠点型基幹研究プロジェクトの共同研究プロジェクトを研究所とセンターにより推進し、国際学術機関等の連携及び国際協力の推進を国際連携室において図る。また、研究事業の進捗状況に関する情報をIR推進室において管理する。

##### 【実績】

毎月開催している共同研究プロジェクト推進会議において基幹研究プロジェクトの進捗状況などを確認するとともに、4月18日、26日、11月21日、28日にはプロジェクト研究交流会を開催し、延べ160名を超える研究者がそれぞれ参加しているプロジェクトと他プロジェクトとの連携の可能性などについて意見交換を行った。また、プロジェクト相互の連携を促進し4つのプロジェクトによる合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション - 話者の属性 -」を実施した(H29.9.8, 参加者82名)。

国際連携室では海外研究機関との協定をアジア圏のネルー大学言語学科、東呉大学日本語文学系の他に英語圏のミシガン大学日本研究センター、ハワイ大学アノマ校との交流協定締結を締結した。とりわけネルー大学との協定は、ネルー大学及びインド政府人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会(UGC)から日本語教材(テキストおよびビデオ教材)の開発協力依頼を受け、国語研スタッフ8名で合計30モジュールの大学院生向けの教材開発に協力し、日本語教育研究の更なる発展につながっている。教材の一部は現在ウェブで一般公開されておりビデオ講義はYouTubeでも公開されている。

また、国際連携室を中心にヨーク大学、ペンシルバニア大学、コロラド大学、ブランダイス大学と「統語解析情報付きコーパスのアノテーション方法および検索ツールの構築」について共同研究を実施した。北京師範大学と北京日本学研究中心との学術交流協定等に基づく共同研究「日本語学習者縦断コーパス構築のための調査」を実施した。IR推進室においては過去7年間の実績を

ファクトブックの形でまとめた他に I Rに関する人間文化研究機構 6 機関合同のワークショップを平成 30 年 3 月 14 日に開催した。

### 3. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

#### 【計画】

機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施

#### 【実績】

第8回西東京地区国立大学法人等共同開催の職員研修を3件実施した。具体的には①西東京地区国立大学法人等中堅職員研修（東京外国語大学）として、職務遂行に必要な知識等の修得，能力資質棟の向上，国立大学法人等運営の中核となるべき職員育成及び国立大学法人等職員としての一体感を培うことを目的とした研修に1名の職員を参加させた【平成29年10月25～27日】。②西東京地区国立大学法人等共同開催職員研修（国立天文台）として、「業務改善，業務の進捗管理，整理・整頓，人材育成について」をテーマとした対症療法だけでなく，長期的な体質改善を前提とした「考え方」と「手法」を身につける研修が実施され，7名の職員を参加させた【平成29年11月27日】。③東京学芸大学副課長研修として，副課長としてのリーダーシップの在り方や組織マネジメントを向上させ，幅広い視野に立った業務運営の在り方を培うことを目的とした研修に3名の職員を参加させた【平成29年12月4～5日】。また，平成29年11月29日に職員の男女共同参画に関する意識高揚を図ることを目的にした4機構連携男女共同参画シンポジウムに2名の職員を参加させた他，平成30年2月2日に?事評定の意義と評定者の役割を深く認識させことを目的とした事務系職員評価者研修に3名の職員を参加させた。④公的研究費の運営・管理にかかる法令やルールの正しい理解と研究を行う上で不可欠な研究倫理の理解，修得を目的としてコンプライアンス教育研修会及び研究倫理教育研修会が機構主催で実施され（TV会議），16名を参加させた。【平成30年2月19日】

自己点検評価

計画どおり実施した

#### 《評価結果》

##### 計画どおりに実施した

プロジェクト研究交流会やプロジェクト合同シンポジウム等，プロジェクト間の研究交流を積極的に推進している点は評価できる。

- ・国際連携では，特にインドのネルー大学の日本語教育教材開発への協力が評価に値する。
- ・IR推進室によるファクトブックは過去7年間の実績を統計的にまとめているが，こうした振り返りのスパンを広げた自己点検・評価も有意義である。
- ・機構内機関及び機構外機関との事務系職員の共同研修への参加が，所内業務をより広い視野で見えていくことにつながるものとなっているかどうかのフィードバックがあった方がよい。

## 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

### 1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

#### 【計画】

常勤研究者の科研費への研究代表者もしくは研究分担者としての参加率を毎年度 80%以上にするため、競争的資金の申請に向けた説明会や研究計画書の作成支援等を実施する。

#### 【実績】

- ・平成 29 年度に配分された科研費（新規及び継続課題）に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者 33 名のうち 31 名が参加した（参加率 93.9%）。また、平成 30 年度の科研費（新規及び継続課題）に研究代表者として常勤研究者 33 名のうち 31 名が申請・参画した。
- ・近隣の研究機関と合同で科研費説明会（9 月 28 日）を開催した。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、常勤・非常勤を問わず全研究者を参加対象とした科研費申請準備会議を開催（10 月 18, 19 日）し、申請者が他分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行い、若手研究者の育成にも配慮しつつ科研費申請を奨励・支援した。
- ・『日本語話し言葉コーパス』及び『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の有償頒布を行い、AI 開発の動向もあり 29 年度は総額 27,324 千円の収入を得た。前年度比約 10,000 千円増（約 1.6 倍増）。

### 2. 経費の抑制に関する目標を達成するための措置

#### 【計画】

（1）一般管理費の分析を行い、分析結果を基に教職員に対しコスト意識の啓発を図るとともに、契約方法の見直し等を実施する。

#### 【実績】

- ・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4 階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネを図った。
- ・複数年契約を実施している「施設常駐管理・消防設備等点検」の各業務委託契約については、対 27 年度比（実施年度）702 千円を削減した。
- ・賃貸借契約と保守契約の一本化、複数年契約の締結により複写機については対 27 年度比 1,206 千円削減した。

#### 【計画】

（2）業務の外部委託等を促進させるとともに、職員の人件費や外部委託の状況を分析し、経費の抑制策を検討する。

#### 【実績】

- ・第三期の人件費シミュレーションを行うと共に外部委託の状況を分析し、人事計画に活用した。
- ・7,8 月の 2 ヶ月間、管理部職員を対象に「ゆう活（夏の生活スタイル変革）」を実施。実施者に対して定時時刻で帰宅するよう促す他、会議の設定時間や一定の時間以降に仕事の依頼を行わないよう全職員へ働きかけるなどして超過勤務の抑制を図り、職員のワークライフバランスに努めた。
- ・毎週、水曜日の定時退勤日について所内放送及びメールで全職員に周知するとともに意識啓発を促

|  |           |
|--|-----------|
| し、超過勤務の削減を図った。                                       |           |
| ・施設管理業務及びネットワーク管理業務について、専門業者に外部委託を行い、引続き管理業務の効率を図った。 |           |
| 自己点検評価   | 計画どおり実施した |

## 《評価結果》

### 計画どおりに実施した

- ・科研費獲得にむけて説明会や申請準備会議等で努力している点は評価できる。
- ・国語研常勤研究者 33 名中、平成 29 年度に科研研究代表者となっている研究者が 29 名（88%）いる点は、常勤研究者の研究水準の高さの一端を表すものとして高く評価する。今後はこの点をアピールするために、「参画率」だけでなく、研究代表者数も併記した方がよい。
- ・国語研の研究者が申請できるような外部資金は、科研費の他どのようなものがあるのか、それらへの応募状況はどうなっているかについても報告がほしい。
- ・「働き方改革」によって専門職の過重労働が懸念されている状況を考慮すると、ワークライフバランスに努める姿勢は重要である。

## 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

### 1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置

#### 【計画】

自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。

#### 【実績】

所内に自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関することを目的とした自己点検・評価委員会（委員 6 人）を設置し、今年度から共同研究プロジェクト推進会議（研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした）と合同で会議を開催し、PDCA サイクルを管理するとともに、機関拠点型基幹研究プロジェクトの検証を行うため、外部評価委員 8 人による自己点検評価・外部評価を29年12～30年 3 月に実施した。

### 2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置

#### 【計画】

国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を、ウェブサイト等に掲載し、広く社会に公開する。

#### 【実績】

- ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて、外部評価委員会による研究系・センターの実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を、ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。
- ・研究プロセスの可視化と研究成果の普及のため、一般向けの研究情報誌『国語研 ことばの波止場

(vol. 2, 3)』(pdf版)を公開するとともに、一般向け講演会NINJALフォーラムを2回開催した。1回目は「オノマトペの魅力と不思議」を29年9月10日に開催した(立命館大学大阪いばらきキャンパス, 参加者215人)。2回目は「ことばの多様性とコミュニケーション」を30年2月3日に開催した(東京証券会館 ホール, 参加者235人)。なお、「オノマトペの魅力と不思議」は、昨年度、一橋大学一橋講堂で開催した同名のフォーラムが好評であったため、本年度は関西で実施したもので、昨年度のフォーラムの成果は、窪菌晴夫(編)『オノマトペの謎』として刊行した(岩波科学ライブラリー261, 岩波書店, 166頁, 29年5月)。また、29年9月10日に開催したフォーラムのビデオ録画をネット配信した。その他に、小・中学生を対象とした「ニホンゴ探検」を開催した(29年7月15日, 参加者354人)。また、上記「ニホンゴ探検 2017」で行われたミニ講義を撮影・編集した動画や、文字の疑問をテーマとした動画を新たにウェブで公開した。

- ・メールマガジン(月2回)を配信し、国語研が主催するシンポジウム、講演会や講習会、データベース公開等の情報について発信した。また、YouTubeに開設した研究所のチャンネルを通じた動画配信も行った。

自己点検評価

計画どおり実施した

## 《評価結果》

### 計画どおりに実施した

- ・自己点検・評価委員会と共同研究プロジェクト推進会議との合同会議を行うことでどんなメリットがあったかを報告していただきたい。
- ・ホームページが刷新されてウェブページ内の情報に以前よりもアクセスしやすくなったのにもなって、研究情報誌やフォーラム、講習会などのビデオなどの公開が進んできていることは評価できる。
- ・ファクトブックによると、近年、国語研からメディアへの情報発信数がかなり増えてきている(危機言語・方言関係のものが多いのではないかと推測するが)のは好感がもてる現象である。国語研の調査研究活動の意義を一般の人々に伝えていく努力は重要である。

## その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置を達成するための措置

### 1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

#### 【計画】

- 1) 施設整備・既存施設の維持管理及び省エネルギー対策を実施する。

#### 【実績】

- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等(樹木剪定、通路の補修等)により、計画的な維持管理を行い、職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。
- ・研究所の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った。また遮熱フィルム及びグリーンカーテンの設置、照明器具のLED化など省エネを図った。

### 2. 安全管理に関する目標を達成するための措置

**【計画】**

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等を実施する。

**【実績】**

- ・「事業継続計画（BCP）」を策定し、立川市作成の「立川市地域防災計画」を基に想定される被害状況を策定した。また、研究所内におけるライフラインについての調査を行い被害想定に基づく対策を策定した。本BCPは、全職員へ「国立国語研究所における危機管理体制（情報伝達システムの概念図）」とともに周知した。
- ・立川防災館において昨年度に引き続き火災や地震発生時取るべき行動や人命救助の方法について学ぶ体験学習に職員を33名参加させ防災の意識向上を図った（29. 12. 18, 19）。

**3. 法令遵守等に関する目標を達成するための措置****【計画】**

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等を実施し、受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督を行う。また、情報セキュリティに関する研修を実施する。

**【実績】**

- ・コンプライアンス教育研修会及び研究倫理教育研修会を機構内共同実施（平成30年2月19日）。
- ・情報セキュリティ研修（e-learning研修）を実施（平成30年2月23日～平成30年3月16日）。
- ・「人を対象とする研究に関する研究倫理審査」を27件実施した。
- ・自然科学研究機構主催の情報セキュリティ研修（10月4, 5日）に国語研CSIRTメンバーが参加した。

|        |           |
|--------|-----------|
| 自己点検評価 | 計画どおり実施した |
|--------|-----------|

**《評価結果》****計画どおりに実施した**

- ・国民的資産とも言うべき重要な資料やデータベースを収蔵している機関であるだけに、地域自治体の「防災計画」と連動した危機管理体制をしっかりと立てることは極めて重要である。

**【総合評価】**

- ・「総合的日本語研究の開拓」という機関拠点型プロジェクトの趣旨からしても、プロジェクト研究交流会やプロジェクト合同シンポジウム等、プロジェクト間の研究交流を積極的に推進していくことは非常に重要である。この点での今年度の実績は、十分評価に値する。
- ・ホームページの刷新で全体としてウェブサイト内情報へのアクセスが以前よりも容易になったことと、さまざまな資料やデータベースの公開も順当に進んでいることは評価できる。  
ホームページについては、例えば、「ウェブ内閲覧コースガイド」、「ことばへの質問コーナー」など、一般の閲覧者が立ち寄ってみたいと思えるような、さらに親しみやすい構成や手法の工夫を期待したい。

## 2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 門倉 正美 横浜国立大学名誉教授  
専門： 哲学, 日本語教育
- 小野 正弘 明治大学教授  
専門： 国語学・日本語史
- 沖 裕子 信州大学教授  
専門： 談話, 方言, 日本語教育
- 片桐 恭弘 公立ほこだて未来大学学長  
専門： 情報科学, 社会言語学
- 坂原 茂 東京大学名誉教授  
専門： フランス語学, 認知言語学
- 佐久間 まゆみ 早稲田大学名誉教授  
専門： 文章・談話論, 日本語教育
- 橋田 浩一 東京大学教授  
専門： 自然言語処理
- 森山 卓郎 早稲田大学教授  
専門： 日本語学, 日本語文法

任期：平成28年10月1日～平成30年9月30日（2年）

◎委員長 ○副委員長

## 国立国語研究所平成29年度業務の実績に関する評価の実施について

### 1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトの代表者が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

### 2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、平成29年度の計画及びその実施状況が記入された「29年度業務の実績報告書」（「プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証した。

「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次の通りである。

| 点検項目                   | 観 点   |
|------------------------|---|
| 研究成果<br>(研究)<br>(共同利用) | 研究業績の量的側面<br>・ どれだけ論文等のアウトプットがあるか                   |
| 研究水準<br>(研究)<br>(共同利用) | 研究業績の質的側面<br>・ どれほど学術的意義や社会的意義があるか                  |
| 研究体制<br>(研究)<br>(共同利用) | 研究推進にあたっての制度的側面<br>・ どれだけ大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献しているか |
| 教育                     | 研究過程及び研究成果の教育的普及<br>・ どれほど大学等の機能強化に貢献しているか          |
| 人材育成                   | 若手研究者の育成、及び社会人の学び直し<br>・ どれだけ受け入れて取り組んでいるか          |
| 社会連携                   | 自治体・産業界との連携など社会との協業<br>・ どれほど社会と連携しているか             |
| 社会貢献                   | 研究成果の社会への普及<br>・ どれほど社会に向けて発信しているか                  |
| 国際連携                   | 研究体制における国際的協業<br>・ どれだけ海外の組織と連携しているか                |
| 国際発信                   | 研究過程及び研究成果の国際的発信<br>・ どれだけ国際的に発信しているか               |
| その他特記事項                |   |

機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧

| 研究系       | プロジェクト名                       | プロジェクト略称      | リーダー            |
|-----------|-------------------------------|---------------|-----------------|
| 理論・対照研究領域 | 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法         | 対照言語学         | 窪菌 晴夫           |
| 理論・対照研究領域 | 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究           | 統語コーパス        | プラシャント・パ<br>ルデシ |
| 言語変異研究領域  | 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成 | 危機言語・方言       | 木部 暢子           |
| 言語変化研究領域  | 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開          | 通時コーパス        | 小木曾 智信          |
| 音声言語研究領域  | 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的な研究    | 日常会話コーパス      | 小磯 花絵           |
| 日本語教育研究領域 | 日本語学習者のコミュニケーションの多角的な解明       | 学習者のコミュニケーション | 石黒 圭            |

## 国立国語研究所外部評価委員会規程

平成21年10月 1日  
国語研規程第7号  
改正 平成28年 4月 1日

### (趣旨)

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第1号）第15条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

### (任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

### (組織)

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

### (任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

### (委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

### (議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

### (意見の聴取)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

### (外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

### (庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

## 国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】（第 1 回）

日 時： 平成 30 年 3 月 6 日（火） 15:00～17:00

場 所： TKP 東京駅前カンファレンスセンター「5F カンファレンスルーム 5A」

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 29 年度点検・評価報告書について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 30 年度年次計画について
4. その他

資 料：

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿
2. 国立国語研究所外部評価委員会規程
3. 前回議事概要（案）
4. 国立国語研究所プロジェクト等別 平成 29 年度評価担当
5. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 29 年度点検・評価報告書
6. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 29 年度 実績報告書
7. 国立国語研究所機関拠点型プロジェクト評価実施の手引き
8. 機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」  
基本計画
9. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 29 年度年次計画
10. 今後のスケジュールについて（イメージ）
11. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 30 年度年次計画

## 国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】（第 2 回）

日 時： 平成 30 年 6 月 29 日（金）14：00～16：00

場 所： TKP 東京駅前カンファレンスセンター「4F カンファレンスルーム 4A」

### 議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 29 年度共同研究プロジェクト評価について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
4. 平成 29 年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 平成 29 年度「組織・運営」,「管理業務」の評価について
6. 次年度評価におけるヒアリングについて
7. 委員長の選出方法について
8. その他

### 資 料：

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿（平成 30 年 4 月 1 日現在）
2. 国立国語研究所外部評価委員会規程
3. 前回議事概要（案）
4. 国立国語研究所プロジェクト別 平成 29 年度評価担当
- 5-1～5-6. 平成 29 年度共同研究プロジェクト自己点検報告書  
平成 29 年度共同研究プロジェクト評価シート
6. 機関拠点型基幹研究プロジェクト総合評価
- 7-1～7-2. 平成 29 年度国立国語研究所 2 センターに関する実績報告書  
平成 29 年度国立国語研究所 2 センターに関する評価結果
8. 平成 29 年度「組織・運営」,「管理業務」に関する評価結果
9. 平成 29 年度業務の実績に関する外部評価報告書の構成について
10. 基幹研究プロジェクトに係る平成 29 年の実施状況に関する評価結果について